

911.3
—
八
—
2

增補
改正

俳諧歲時記葉草

二

大清書局
刻本
出印

增補 俳諧歲時記 草 活

曲亭主人纂輔
藍亭青藍增補

秋

漢書律曆志少陰者西方西遷也
乃成 熟 遷落物於時為秋秋熟也物擊飲

乃成 熟

少皞

帝禮月令其帝少皞注云少皞白精之君金天氏也

蓐收

神月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皞氏之子諫也

白藏

爾雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

金商

秋五行屬金五音屬商故有金風素商之稱唐高宗九日詩云端居

臨王辰初

明景

元帝纂要秋景曰明景朗明義同

籟

謂秋声也增韻爽清快也爾雅吹物有声曰籟

夷則

月令

夷傷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

七月 立秋

節月令廣義孝經緯云大暑十
五日斗指坤為立秋七月節

新秋

韓文是時新秋七月
初金神按節炎氣除
孟秋 廣韻孟秋也始也又

初秋

中院通茂公卿說和歌了是
謂新秋也 初秋ハ七月十四日までとい

處暑

中月令廣義立秋十五日斗指申
為處暑濱暑將退伏而潛處也

處上声止也暑氣止
息也 是七月中也

文月

清浦奥儀抄此月
ふつきき七日ふふふとふふと

とて文どむをひらく故ふ文ひらげ月といふと畧せり
藏玉 七夕のあふよの空のうげとえて書ふらべふら

文ひらげ月有家の文月
と畧しとふつきともいふ

機棚月

藏玉鶴のよ

とろせよなあむと月
のころ待えり家隆

女郎花月

藏玉なをこれ

もどとろし月 顯昭

涼月

月令孟秋
月涼風至 益秋 經曰

每年七月十五日為父母
設盂蘭盆供十方自恣僧

日室相

桐秋

淮南子一葉落而天下知秋
甲書梧桐立秋之日一葉先落

蘭月 蘭秋 肇秋

和爾雅此月諸人詣
親墳墓故曰親月

要抄云

親月

親墳墓故曰親月 饒月 饒

景曰送行燕說文送去也
と訓も暑の去を送る意あり

八月 葉月

此月肅殺の氣を生じ百葉と落す故
小葉落月といふ今畧して葉月といふ

南呂

律禮記律中南呂高誘註云南任也
言陽氣內藏陰居干陽任其成功

白露

節月令廣義孝經緯云處暑後十五日
斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而

秋分

同上白露後十五日斗指酉為秋分
陰生於午極於亥故酉其中分也伸

月之節為秋分秋為陰中陰
陽適中故晝夜長短亦均焉
仲秋 月令八月為仲秋

壯月 商又曰壯月
纂要八月為中
桂月 同上八月亦曰桂月○桂の花の

中律 出處未考
難月 芋環不出せ
唐類函

八月乃饑以達秋氣
秋風月 藏王扶の葉と露宛

月見月 藏王名ふし
あつ秋の半

雁來月 月令仲秋之
月鴻雁來

九月無射 律記九月律中無射高誘註
云無射陰氣上升陽氣下降

寒露 節月令廣義孝經緯云
秋分後十五日斗指

霜降 中同上寒露後十五
日斗指戌為霜降言

氣肅露凝結 季秋 月令季秋
紅樹 通俗志

而為霜矣 疑らく紅樹月の誤あらん藏王
多例と山ゆゑと

朱熹詩云秋山有紅樹忽憶
田野中○韓退之

詩云春風紅樹鶯眠處似如
歌章作艶声云と

九月の異名よあつと
玄月 范蠡曰玉姑待之

長月 夜長月と素秋
素秋は九月小限ら

菊月 秋の總名あり素秋は白
又菊秋とあつ

晚秋 對早秋 梢の秋 季吟云紅
葉を故

紅葉月 證歌紅樹 寐覺月 藏王
なびつた

小田菊月 藏王とひつた
鳴りのくまの

秋

露まげく袖うら拂ふ

小田のりの月 頭昭

色とり月

梢の秋といふふかふし



七月 糸織姫

棚機七姫の内之異名分類
旧事紀小令天棚機姫神

織神衣云云
あふふふし

犬飼星

志の部二星
の糸小出

石枕

仙覚抄
いし枕と

ハ真の石ふあらざ玉にたなむ
むこのらへ夜の玉の枕とまら

芋の葉に露

藻塩
草露

取草とハ棚機の歌と書付

曬衣裳

星のうし物
うし小袖

ふふ羊の葉の露と書云

四民月令 七月七日麩と作て藍丸及び蜀漆丸と合

し、經書及び衣裳と曝し俗小習ふと然り世説郝隆

七月七日鄰人と云ふハ皆衣物と曝を隆仰き目して

腹と出す、人其故と云ふ曰腹中の書と曝のこ○星のこ

し物、衣裳と曝をも物と云ふも七夕小巧と云ふと云ふ為

之賈之家集 世と云ふ我を糸ハ七夕の涙の玉の緒と

やあふらん秋さても露や袖のせらふさばなまこつめふ何

どうさまし舟内侍 荒野集 七夕よ物うをももふびじ

越池の坊に立花

洛の六角堂頂法寺雲林院三條の南ふめん三十三所願礼の

一箇所也、近世僧専光教品の花枝と一瓶のうらふて山

水の景象と摸まると得たり和俗と云と立花といふ今

小至て代々こと玩ぶ僧俗此徒弟と云ふり此多し例

年七月七日立花教瓶砂の物等とあり人争ひてこれと云

ことと池の坊の立花といふ是

伊勢踊

滑稽雑談

り又二星小供まるとの意あり

生身魂

蓮の飯 閑慮
さし籍 倭筆

○世の松坂音頭あり、

本朝の世俗七月ふみま生る二親と供養して生身魂と名

と云ふも孟蘭盆の修行あり盆經願くハ現在の父母

と云ふも壽命百年病なく一切苦惱の患あらずは是七月十

五日僧自念の日現在の父母の壽命長久と祈り發願の文

あり、是生身魂の修行あり、和漢三才圖會刺緒中元の日

祝用と云但し聲あり骨小傍て割開きことと鮑うて

二枚と二重とありことと刺とりハ○同書云蓮の飯者

此の靈前小供し文以て親戚小贈ると礼式と云ふことと称

して生靈宗より、荷の葉と以て蒸せ、糲飯と包む。観音草を用てこもこ縛る佛名と以て好とするの、**稲**

妻 稲つゝ **和漢三才圖會** 秋の夜暗て電り、稲妻 稲父の

名あり、**柳傘** 稲光ハ雜あり、**稲の殿** 稲妻ハ對して

説文電、陰陽の激曜する、**稲の殿** 稲の殿といふ、詩云多

べし、**續猿蓑** 獨りし留守、**稲葉の雲** 秋凡ハ田面ハ冬ととそく、詩云多

る、中院通茂公○稲葉のわひとりのひる景色ありて、**稲**

の花 **夫木** ゆふささ **糸秋** **門田** 稲の花の浪する、後入我内大臣

本草 糸秋ハ、**大和本草** 近年中華より、**花** 春子と植秋の末ハ實多ク花

花 紅ハ盛ス、**隱元豆** 筑紫 **和漢三才圖會** 諸種と持來する、其一種ハ、**稻脊虫** 和名以

故ハ隱元豆と名づく、**和名以** 糸秋 **稲** 和名以

祢豆岐、古萬呂俗云祢宜按ぢ、**小** 和名以 **長** 和名以

長さ一寸むら、青色尖ア、**首** 和名以 **兩** 和名以

兩眼の間狭し、**と** 和名以 **著** 和名以 **状** 和名以

と著し、**状** 和名以 **似** 和名以 **故** 和名以 **俗** 和名以

俗呼て祢宜と、**小** 和名以 **兒** 和名以 **兩** 和名以

兩足と捕、**と** 和名以 **身** 和名以 **と** 和名以 **伸** 和名以

して首と俯き、**稲** 和名以 **と** 和名以 **脊** 和名以 **形** 和名以

似たり、**故** 和名以 **小** 和名以 **稻** 和名以 **子** 和名以

と名づく、**食** 和名以 **と** 和名以 **取** 和名以 **て** 和名以

食ハ味甘、**く** 和名以 **美** 和名以 **あり** 和名以 **小** 和名以

稲

稲妻

稲の殿

稲葉の雲

稲

糸秋

花

稲脊虫

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

稲

蠶とを和俗小實盛虫と林さあり、食ふ似て小の青色あり
 首ハ兜たてかぶと着るるガ如く、稻葉と食ひて大害也、夜松明
 と燈し、鐘鼓とふ
 らしてこまこと送ふ
 羊虫ひつひ 大和本草場、又菜の葉ふ
 由青奥と生きた昔昔藤ふ生
 るハ大ある、拇指の如く、長さ三四寸あり、羊じひつひ
 とりハ青色又褐色有り、後ハ化して鳳蝶あひでと成る、蝱螂ひつひ
 時珍曰、兩臂、芥の如く、輒つら小當て避ざ、故小當郎の名と
 得り、又螳螂首と膝臂と奮入、頸脰くわう大腹、二子、四足
 鬚ひげと以て鼻はな、小代人こしろの髪と食ひ、よく菓と齧り、蟬せみと
 捕ふ、深秋、小子と乳房ちちのうと作る、小枝の上ハ粘着ねり、即蝶蝱
 也、房うすの長さ寸むく、拇指の如し、其内重々として、隔房かふ
 づゝ、房うす毎小子あり、蛆卵しゅうらんの如し、芒種ぼうしゆの節後、小至して一齊出
 滑なめ、昔雜談、俗ハ鎌きくつとつゝ、かの兩臂、芥の如し、又鎌と
 めらふとて、こゝし、よとして、つゝるあ、べー、時珍曰、今人疣いんと
 病者、往々蝱螂と捕へ、こまこと食へむ、寵馬いん
 名一物なこの部ぶ蟻あま
 蟬せみの条じょう小註せうしゆ、
兼三秋物 居待月いすまいつく
 十八日

絲芒

葉細く絲線のどし、長三四尺
一株ハ数百の莖くわう最生也、秋莖

芋

時珍曰、芋花とひら
く、或ハ七八月の

色草

秋の千い、時珍曰、芋花とひら
く、或ハ七八月の

田舎杵

形田諸
杵より大

犬殺梨

和漢三才圖會 北國
取多し、奥羽津輕

萬葉座待ばんがざたい
 月つきと書り、
 と抽ひで花はな
 穗ほとあり、
 間まひらく者あり、莖と抽で花と生、黄色おう、房ハ長著なが
 あり、こまこと護まもる、半辺蓮花の状の如し、○粒芋つぶあま、唐からの芋
 青芋あおあま、螺芋かいらあま、甘藷かんじゆハの種類あり、
 頭字かぶなづなの部ぶよりこまこと註しあり、
 小こて、淡あわし、酎さけし、竹たけ
 こまこと、ひらゆる、塔たか、坊ぼう、
 秋田の産、他國ハ倍ばいして大あり、周しゅうア一尺四五寸、俗呼ひやくこて
 犬殺いぬころしと名づく、狗子いぬこ樹下じゆげ小有とまき、梨り、落おちまが、撲つまら
 死しも、故ゆへ、**稻**いね 禹錫食經うけきつじきハ
 小名せうなく、推おしニ云い稻いねハ、徐じゆハ、**稻**いね、**苜**もち
 古ハ麥むぎ稻いねの穗ほと扱あ小こ、二ふたのの小こき管くわんこを以もて、繩なはこを通とおり、繫くわん繫くわんこ
 こまこと握にぎり、持もち穗ほと扱あ、扱あ近年しんねん稻いね扱あと製せい之し、其その捷ていある
 扱あ竹たけ小こ、**稻**いね、**舟**ふね、古ふる今いま、辰たつみ上うへ川がはの、いれ、は、く、くる、船ふねの
 十倍じゆうばいを、

稻

禹錫食經ハ
推ニ云稻ハ、徐ハ、
字彙ハ、
獲也取也、
稻扱

稻舟

古今辰上川の、いれ、は、く、くる、船舟の
十倍を、

秋 い

國家上川水を巻くして舟と引のびと舟のうしろのふら
るが人の物とりやと言てぐりやうふ必ふんやん又二葉
船といふもの舟と入讀方物といやといふ心と
船舟ふよせりくよむじりくと藻塩草もろこし 船せん 船せん

遠とまきいりるやふ船の面の平々とあると申と
夜分も居所おとらば、○又新葉かて織る船と申、又
妙や船とて木の枝あぐく均いねとかけりたるも、船造
とらめり、**万葉** 玉むこの道行つと船造まきて舟人
るよりもぐぬ人丸 **新古今** 秋の田のうりねの末の船じ
しう、月やまこととよまける露のぬ 定雅○大う、是ふく心
得べ **船** **裂繪** **和漢三才圖會** 船 俗字 鯉、和名伊和

一、**鯉** **裂繪** **和漢三才圖會** 船 俗字 鯉、和名伊和
和之訓乃相通、中畧 群行して至る時、海波稍赤し、澳
人豫知て網と下し、是と米ふ、鯉好て鯉と喰ふ為、小逐
る者數万群とよして浪棲のどし、是と取て膾小作
る、灸として食ふ、又脂と取て燈油とす、○鯉引と網
と引の義、裂繪といふは魚、方と用ふはよ及びて指と以て
ととと解、故といふ、**本草** 食鑑一名海紫或ハ紫と云、**本草**

宮闈の兒女、鯉の賤名と忌て御紫といふ、
鯉の塩糟、其内色紫黒故小名づらり、
あんとする時、一片の白雲あり、その
雲段々として波の如し、是と鯉雲と云、
つこの部月見 **十六夜月** **既望** **古今** 君やらん我やう
の条とぞし、
もよはぬふら、○りさよふといふらやをら意、十六日の
月暮てのちちが、りりていつる故、○ちちとくと出ていさ
ち八月の雲芭蕉○此句意、かちくと月ハ出まとも雲
のさめいさよひて、いさといさ曲節あり、**蔡氏集傳** 日月
相望、むらとと望とい、
い、既ふ望む十六日、
羊肚菜 **和漢三才圖會** 羊肚菜、今
云免口草、八月の中湿地、小
多く生む、其織の表褐色、端曲り捲裏ハ黄白色、細刺
あり、ありら、ちちとて孔あり、蜂の巢のこころ、毒あり

八月 芋名月 **秋** 天
秋 天
秋 天
秋 天

石菖 **同上** 秋木耳のこ、織柄もく黒色、裏灰
白色、峯の頭、巖の上、あり、其得、
小 屋 **同上** 守舎、禾と看、す、あり、○
田間ふ建て、猪鹿と追ふ、処、

石菖 **同上** 秋木耳のこ、織柄もく黒色、裏灰
白色、峯の頭、巖の上、あり、其得、
小 屋 **同上** 守舎、禾と看、す、あり、○
田間ふ建て、猪鹿と追ふ、処、

石菖 **同上** 秋木耳のこ、織柄もく黒色、裏灰
白色、峯の頭、巖の上、あり、其得、
小 屋 **同上** 守舎、禾と看、す、あり、○
田間ふ建て、猪鹿と追ふ、処、

石菖 **同上** 秋木耳のこ、織柄もく黒色、裏灰
白色、峯の頭、巖の上、あり、其得、
小 屋 **同上** 守舎、禾と看、す、あり、○
田間ふ建て、猪鹿と追ふ、処、

石菖 **同上** 秋木耳のこ、織柄もく黒色、裏灰
白色、峯の頭、巖の上、あり、其得、
小 屋 **同上** 守舎、禾と看、す、あり、○
田間ふ建て、猪鹿と追ふ、処、

稻干

多識篇 喬杆伊奈 ○稻木俗稻耳とのふ禾と掛る具之竹の長短相等しきりの三莖と

取

取て一ふ篋と用てこきと縛り、田和漢三才圖會 稻束

中

中ふ於て禾と上ふのけこ乾す、和漢三才圖會 稻

負鳥

古今我門ふのむむせ鳥の鳴ふつふけさく和漢三才圖會 凡ふ鷹ききさく

鳥

鳥のこころい人の意路ふまふさうさう○鶴鶴和漢三才圖會 稻負鳥

實

實ふ秋の半さきとて來鳴りのふり、詩語抄 ちやとと稻負

庭

庭ふさきつふまを鳥とさきさう一鳥ホの諸名り、三才圖會 鶴鶴和漢三才圖會 雀のこころい飛とまハ鳴行とまハ稻く大と鶻

の

のこし脚長く尾腹の下白く頭の下黒く連銭のこし

故

故ふ杜陽の人こ色鳥和漢三才圖會 御傘和漢三才圖會 のりく秋和漢三才圖會 ころ小鳥

も

もかき山路ゆく秋や桑鳶和漢三才圖會 和漢三才圖會 鶻指

限

限ての色鳥のこ改為和漢三才圖會 青雀和漢三才圖會 臘和漢三才圖會 雀和漢三才圖會 狀和漢三才圖會 鳩

よ

より小く頂黒く腹灰青色羽の末黒く白き斑あり、

嘴

嘴微曲て厚く浅黄色尾短く好て豆粟と食ふ故ふ

豆

豆甘美と名づく俗以て豆廻しと名づく常ふ鳴

て

て春月ゆく轉和漢三才圖會 比志利和漢三才圖會 古木利和漢三才圖會 とりふかむ

加鳥

正字未詳同上和漢三才圖會 狀和漢三才圖會 鶻和漢三才圖會 のごとく小して頭背蒼く又腹臆最赤く紫あり嘴青く

詛

詛詁又とふを故ふ事物和漢三才圖會 詛詁和漢三才圖會 伊須加の嘴とのふ

神

神社啓蒙 生玉の社和漢三才圖會 根津國東成郡天王寺の辺小あり祭和漢三才圖會 神一座和漢三才圖會 天の生玉の命和漢三才圖會 社家註連記和漢三才圖會 明應年中

本

本願寺の僧々ふ來うて寺院と創し神地と以て境内小接を神其不潔と惡く彼僧と罰を僧を令て神殿と今の旅店の側小遷しこころく造營を其後信張の兵火ふうり殿社灰燼とまり繞小神筆と別所小近も慶長年中秀吉城廓と築くの日今の地よ近も

○

例祭九月九日神輿一基遊行流籠馬あり社内

秋

い

十坊あり、その内いそらまうり十五日八所明神の社ハ、
南坊と別當寺、**岩倉祭**、洛の北長谷村の

西岩倉あり、王城の四隅いづふ岩倉と置おき、これ其一あり、
拾あ芥抄大雲寺岩倉觀音○親長卿記云、文明三
年三月廿九日、岩倉長谷の觀音あふ泰あふ、十二面圓融
院の御願、日野中納言文範卿草創あり、○鎮守、岩倉
大明神、所謂八所とハ、八幡加茂、松尾山王、住吉春
日新羅大座、是ふ太神宮、貴船、稻荷、平野と加へて、
以上十二社と云と十二所明神と稱なす、是大雲寺の鎮
守と云と、土人本居神よと、例祭九月十五日、神輿遊行
を、神主ハ村中の氏子交あり、くると勤まむ、大雲寺、衆徒
四人、名代なとして、公人法師二人供奉、夜宮よ、大炬火たいくわ、二三立深
更あふ及あて、角力かくま五番あり、**滑な替か雜談**俗ふ岩倉の尻しと
き祭まりの夜よ入いりて神供と奉たる、一村の内新婦しんぷと云として、
婚まりの服ふくと著きせ、あ神しん供くの器うつと頭かぶ戴かき、神前かみ小こと
あり、あ一村の老若らうじやくちいさきあ技わざ木ぎと持も持も、新婦しんぷの尻しと云、新
婦しんぷと云、あと云と、立たまり、十五日○河内
てらあり、故こ尻しと云と云、**一宮祭**、あ十五
日○河内
國交野

郡北枝方村えだかたあり、祭まつる神牛頭天王、八王子、北野の天神、
稊あ社、帝釈天王、服ふく立寄た、姫大明神、淺原大明神、鎮座、年曆
詳あり、あ例祭九月十五日、今ハ十六日神輿出いり、神樂神湯
ホあり、氏子八郷坂村、小倉村、招提村、田口打、甲斐田村、中宮
村、禁野村、濃村、是社僧神宮寺及社家岡田氏記あと處あ
又一説あ、一宮平岡大明神ハ、河内國河内郡ああり、祭まつる神
天あの児屋根命こゝろね、姫大神、香取神、鹿島神、若宮わがみやの社、本社大
社、神武天皇の御宇、鎮座、例祭九月八日、九日、任務水足大炊
下あ稱な宣のたま神子五六輩、皆農民、
りてあと云と、兼務あと云と云、**伊勢御遷宮**、あ紀事
九大

社造、昔毎あ小陣あの義ありて、時日と定あらる、勅使あハ、伊勢
大神宮、春日あの社、廿一年と經あると、こあハ、必あ造あり、替あり、遷宮あの
時、納ある所の神室、行事官、調進あを、この月、伊勢あ、恭宮あの人、多
く、京師あと出て、十六日の御祭會あ並あ小御遷宮ああり、と云と、凡
恭宮あの人、先あ、五岳山の國阿あの像あ、小詣あて、と云と、杖履あ、二戴あ拜あす、
相傳あふ、國阿あ、深く太神宮あと信あじ、時あ、木履あと着あ、拄あ杖あと
持ありて、恭詣あと云と、終あ、小行路あの難ああり、故あ、その福あ、小做あひ
て、以あ、正安あと祈ある、○二十一年、每あ、小遷宮ああり、故あ、小十五年

りふ至ふとき木引ありあり、三年ありて木引成て、又三年木持のりあり、材木ハ木曾山並紀州大杉山より出、内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後四百八十四年と經て、雄略帝の時座跡、色

た風

九月の風あり **新古今** かのふりつりつり風ありあり、秋のらりありあり、我内查

隠君子

菊の異名あり **范至能** 留譜亭 山林好事者或以菊比君子其說以謂歲華晚

草木變衰乃獨憐然秀發傲視風霜此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 **愛蓮說**

菊花隱逸者也 いあて草

菊の異名あり **藻塩草** 長月の九日ありいあて草花ハ八重を

毬栗

其實苞中に在て未地小堅 **無花** 五代ぞ

果

和漢三才圖會 其實材小似て木實ハ俗唐栲 **把** 似たりといふと然らば葉邊より葉莖麻小似て

小く、皆色淡く潤ふ文理隆明あり、五痔と治せんと

識て魚毒と治

標

ハ推より少く大く木硬くして多

色不變松 色見草

藏王 秋も色不變松 雪霜と蒙りて變せざり其

くきしき山いろくへぬまの 荀卿曰隆冬と經て凋まら

貞と得とりづべ **新拾** いろえぬまの山の **岩蓮** 花の松君とそ千世の友とそ人 入道前内大臣

花

大和本草 岩蓮花俗の名之其草の形葉のあり 恰も蓮花の開るく如く異名之或ハ云佛甲草是也

鯛の黒漬

豫州の産あり、宇和鯛と稱せしもの 製両鯉と切削て乾とせ、鯛の性

腸の中黒汁あり、塩水小和して 其色黒し、くまを黒漬といふ、

る 七月六

道赤

九日 迎鐘

山城国名勝志 六道、五條の末比 建仁寺巽の角あり、今の建仁

寺大昌院管領も、葉師堂あり、是珍篁寺の本尊、**雍州府志** 弥篁寺ハ弘法大師の開基ありて元葬場也

小堂よ地藏と安置せし六道と称す傳のこの所真
 小通故小野堂この所より親ら六道小行て帰るや
 是ふよりて毎年七月盂蘭盆前九日小男女赤諸紀事
 今日諸人六道地藏詣て男女鐘と撞て聖具と迎ふ
 との各植の枝と買て携帰ふ又新穀と買て聖盃小
 供も是と私と称す○六道悉ふまうて植の枝と買ひて家
 ふりて盃前ふりて俗聖具植の葉小束とて来るといふ
 是聖具と迎ふる意ふべし古事談珍堂寺の別堂某
 云當寺の鐘ハ慶俊僧都と鐘ハ慶俊入唐の時留王
 なる僧ふりて此鐘土中へ埋三年と經て掘出ると衆
 僧三年と待ふ堪む繞ふ一年と過して是と掘出ると衆
 撞ふ其声唐小聞ゆ慶俊曰我寺の鐘聲とあり平念とら
 三年と待て是と掘出上ふりての時ハ撞て六時ふ声の
 るべしと歎惜と○わりの所謂よて聖具とむりやめめ
 撞ふ是と迎鐘といふ○六道ハ桓武天皇延暦十三年長
 岡より今の京小遷らせらるる時諸人の葬場と定めらる
 る遷都記やとえらる本尊薬師契
 傳教大師の作七佛薬師のそのとらる

は 七月

初涼

王劉傑詩云昊天清
 且高秋瓜登初涼
 墓祭 七月朔日
 十五日小至り

て各祖考の墳墓詣りて唐山の人清明の日上墳
 祭掃不同○源順家集小七月十五日むりてせし山手
 ままうつる所下りてのころとれる蓮の葉とらるる露あり山
 小我ハききたり是盆の墓祭と和漢文撰 前文一家と
 小杖小ちり髪の墓まわりはわらうらうのかとありて芭蕉
 評云故翁伊賀の西麓庵やて例の文稿とありてひそそ
 今思ふ小白髪の竟祭ハ其日の感情ハ演まて発句ハ祭
 る姿にあらむ此故ふ春の字と以て歩行の様と形容せ
 小當季の詞も惜まると増て切字の入所り此等
 や有様跡と云て「あはれ」ころあはれとあらふと下の句
 と云ひ次て俳諧のイチ
 歌もあつたきま 蓮の飯 いろ部生身魂 花燈
 籠 造花とめて美し 鱒 初鳥狩 初雁鳥
 貞徳白とや出の鷹とははめとつらふと初雁と鳥
 とといふあり鳥屋出の鷹とを夏の羽のけりてと鳥

屋よみて羽の出さるいさると盆の聖天の箸とて
夜鳥屋より出まふより著書とも申さるるの小鷹狩
の条とも見 **鳩吹** 鳴こももて手と合せて鳩の声の
合まべり **八雲御抄**

歌林良材 **藻塩草** **袖中抄** **水説同し** **花火** **和漢三才品会**

炭俵集 名月や誰か吹おこさぬの鳩酒堂 **花火** **和漢三才品会**

輝燧 小代ふきゆはは又夏月河 **秋** **和漢三才品会** 天

迎の遊興とも **御傘** **正花** 持之 **秋** 花ハ花也といふ

カ如し **按** 小枝葉長く垂地と蔽ふ状糸櫻ふ似て

一極三葉東の葉ふ似て又南天燭の秋ふ似て尖らと柔

軟之秋小花と著淡紫色俗専ら秋の字と用ふ奥州宮

城野方三里より萩生茂と山萩あり白花の者あり白

紫開分の者あり ○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあり及木萩

之ヲ木と作る木あり稍ふ青と枝生てその枝小花とあり

○ともありの萩鹿鳴草古萩草糸萩 **萩の錦** 錦

小萩とて萩ハ其頭字の部ふつちて註 **萩の殿** 殿

とていふあり **新後拾** いまこ初めてを由る **萩殿** 萩殿

秋もぎの花のありさこの露のたてぬき **法皇御製** **萩殿** 萩殿

の方貳間の而 **五社百** **蓮の實** 蓮の實

首註 菊戸萩戸同しと **蓮の實** 小至て思として

水ふ沈む石蓮子とて ○山谷詩 倒靱収蓮苞云 **初** 初

とも蓮の子の房中より抜出る穴と靱と見立し **初** 初

嵐 **和漢三才品会** 山の氣と嵐といふ 醫書ふ山嵐不正の

嵐と名づく **連哥新式秘抄** **初嵐** 初嵐

七月末より八月中とらまての風なり **絡線出** 六月の内よ

萩の戸

禁秘抄 萩の戸ハ常の御所 **天西抄** 萩ハ限

蓮の實

蓮の實 小至て思として

水ふ沈む石蓮子とて ○山谷詩 倒靱収蓮苞云 **初** 初

とも蓮の子の房中より抜出る穴と靱と見立し **初** 初

嵐 **和漢三才品会** 山の氣と嵐といふ 醫書ふ山嵐不正の

嵐と名づく **連哥新式秘抄** **初嵐** 初嵐

七月末より八月中とらまての風なり **絡線出** 六月の内よ

と鳴初て七月中とらまて野最の中昼盛ふ鳴く其声

キイ、スとりふ如く一二声の内ふ、チヨシと舌打を俗長

と蛭と云て小籠小入て市ふ賣て小兒の翫とてその形

自蝨蝨ふ似て大なり、是れとちとキイ、とりふハ機蹠の音

チヨシと儀打音あり又キスとゆつり **續猿蓑** **軟虫** 軟虫

夏の附合ふ砂を這ふ藤の中の絡線のちち沾園 **軟虫** 軟虫

冬蝨 蝨蝨の属長サ三四寸身もふもて瘦て方ある首

兩額は眼あり目の上ニツの鬚あり翅灰赤色黒

秋

點あり腹の下白く善跳て捕へが

櫃

和漢三才圖會黃櫃以て黄色と深

く〇今の俗をよむことあり、天子の御袍黄櫃深と称を是あり、帛と深て上り、硃水を用い畧染をば黒茶色とあり、其葉小く浅青色、莖微赤し三月小白花と開き細子と結ぶ秋に至り紅葉

兼三秋物仕

木今世子と採て専ら蠟燭ふ作る、依て多く平原の地ふ植て利とと

日亥中月

廿日の亥の正刻、ふ出る故あり

旗芒

袖中抄花芒款と

ふと同一ひききあり、或ハ万葉裏書ふも薄と穂、り出て旗とさげさるやうある薄といや、能因申しけると、**花野** 千草の花の野ふ咲きとさる事あり、野ハ

芭蕉

大和本草本草に濕草ふ載せ軟ふ

用とり花野といふときハ野、体とありて花用とり心得し、ろ地ふ植て茂易し春葉と生じ秋に至り上り冬根、葉枯し年々發生を冬と歷て大なり黄花と開く極めて

掃へ東鑑ハ其花と優曇華といふあり

葉雞頭

雁來紅をいふあり、如の部見ふ

菑

和漢三才圖會生薑音姜今俗多く善字と用ふ、我の音とも木其根とちり

美蜀椒

奈苗波以多知波、之加美、**蔓椒** 之加美、**吳茱萸** 之加美、此等と

蓮芋

其葉荷葉に似て田く、其根粟の形の如し、味美あり或ハ呼て栗芋といふ、按ずる水中小種

種あり、**鮟鱇** 和漢三才圖會彈塗魚俗彼世川の末海

彈

の部素山子、**班龍** 鹿

行小蝦

以て餌とと、綸の端鈎と去ること二三寸許の處

秋月貴賤以て遊魚の一ツとと、形色鮎に似て小く細鱗、體者滑やと口濶く腮大眼上ふ向く、斑點微黒無帯ふ

尾ふ又小班あり、**虎彈魚** 田の實の節、**納彈魚** 飛彈魚の類也、**節供**

八月

八朔

田の實の節、**節供**

特怙の節

紀事

九月朔ハ吉日ヤシテ相賀スル中

田面の節 華と同じ今日殊ハ八朔と称し又特怙の節と称す又憑の節供といひ或ハ田實の節と称す又田面の節と号す中世農民稻の初穂と 祭粟ふ献と故

小田の實の節といふ世ふ又其訓ハ借用テ憑の節供と称す蓋君臣朋友相依テ頼ハ我小取君臣朋友の間互ニ贈答の義あり今日貴賤各白帷子ニ著シ互小慶

と修む公事根源ハ朔の風俗後漢峨嵋潜龍の時外戚源の通方卿の亭小在リ小近習の男女密ニ斯義ニ

して開素と慰め奉る後皇位即ちあふ亦来嘉事と云

初月夜 或説ハ四日五日六日迄と云リていハ

初月と賞スルハ三五の月と待テヨリ

初潮 稗叢集 粟柳とめて云々初月夜義

十五日の潮といハ一説ハ初潮の初の字ハ粟月の潮といハ

五雜俎 海潮八月獨大あるハ何ぞ也潮八月

御傘 伍子胥タ死靈八月十五日夜ハ風波と云

箱崎祭

神社考 筑前國那珂郡此社ハ

祭る神三座中ハ應仁天皇東ハ神功皇后西ハ武内宿禰

仲哀天皇三韓と討んと欲し

筑紫櫛日の宮小至テ給ヒ軍旅と催この時天

皇崩御ありこの時皇后懐妊疎月ありんと云乃自ら

男子の貌とあり弓鴛鴦芥鉞と云ハ呪テ日請征伐の

後降誕ゆれハ三韓しく平定し筑紫歸リ

男子降美ハハ應神天皇是ありこの地と呼テ宇跡

邑といハ胎衣と宮小籠クテ地ニ埋メ松と裁テ標と

世日託宣ハハ宮と宮奇の松原小建ラハ例祭ハ

秋

花白

貞享式 御傘小正花チ春

扇をむくもの分を置方がよきなり如何なる秘
 事やふむと今按する小花種花畑も来一秋定
 びきふと○花白花白 初花初櫻といふ同
 草花もよふと 初紅葉 新拾遺もいふ山
 木々の梢のふちふちの 薄荷 和漢字書
 びきふと今按する 赤長観 薄荷 菘蘭
 菘荷菜の諸名あり本綱曰二月宿根より苗と生
 清明の前にもと分つがふる莖赤き色其葉對生 初
 時形長しく頭圓し長をふ及て尖る其莖葉在り
 似尖り長し冬と經て根枯む按する多く山城より出
 花紫 花景 大和地方多く藝春種と下す長て
 苗の高と一尺以來葉謝落金の葉を類し
 て小なり又俗ふと琉璃草小似る差互して生る三月
 花を開く梢の葉の間ふあり形状四く瓣五出やと肉
 小葉懸ふと又瑠璃草の花小異るしふとふと
 色白し又粉紅及び黄色のみけあり下長葉異る
 くとふと実と結ぶとの形四く尖る椀類して
 大なる秋小至て熟む裏白色ふと○按する御傘

亦の非書小花紫と秋と若紫と春と然る本草花
 景の說三月花を開くとも紫草と種く試ふあり
 て曰此草秋種るとの春花と開き春種もりけ秋種
 くとふと御傘小花秋ふるといふ亦處わすふと
 ○絹帛と紫ふと部の總名 花芒 濱木綿の花
 染る者此草の 奈不出
 大和本草 品 濱木綿 万年青小似る俗濱ふるといふ
 海辺小生る七八月白花と分る莖高くして只梢小
 數花ありまうひらき卷丹の花の形小似る好花
 あり季秋実と結ぶ花咲る跡小數顆の類の
 大と胡桃の如し内小核あり白肉あり 聖鳥信曰今按ふ
 西土のあり濱色蕉といふ紀州熊野ふとし甚と雪寒
 と畏る宅中小植て冬月葉を厚く色く或はこも
 てかふと一とせむと枯る盆小植て屋下の暖
 におふと海濱ふると潮風温りくと雪早く消故
 多ふ三種あり一種葉柔く薄く其莖の皮多く重
 なる是百重とせむとふと一と種葉つと
 一莖の皮重なる 万葉 三熊野乃浦乃濱木綿百

重成心者雖思直亦不相鳴人元滑替雜談此者

未俳書ふ載む然るここのへと古奇ふ多くあり元花と

以て季針草和漢三才圖會鼠草ふ似て綴りし

小用ふ長と二寸むくり、灰白色平地ふ葺玉

初茸同上浅山松樹の陰處ふ生む状松茸ふ似て

赤黄色立秋の初ふ出づ柔みりて味白雁白雁全体

甘く諸茸より先ふ出づ故ふ初茸也白くして

翅翻黒く嘴と脚と赤色其肉脂少し丸中秋白雁先

来て雁金こまふ次真雁又こまふ次て遅し春ハ真雁

先て歸り白和漢三才圖會鯉ハ鯉の本字

雁こまふ次魚臭あり正字未詳状鱒ふ

似て田く肥大るもの二三尺細鱗青質赤章腹淡

白く肉赤く細刺あり脂多く味厚美く頭の枕骨軟

みりて瑪瑙の如く氷頭と称す味亦佳く天和本草本

邦東北州の大河ふ多し南州ふ少し和名曰鯉

和名佐介俗鯉字鯉鯉の子同上其子二胞あり胞

と用ふ非あり中數千粒明透上ふ一紅點あり

鯛鯛といふ又筋子放鳥やの部八幡九月海

甘子と云りあり祭の条小註

麻廻紀事この月九日小兒小石と以て海螺の殻

と穿ち鈿と鎔して壳の内へ入せ或ハ洲濱館

と壳の内へ充て其力と助け各緒と以て海螺と纏

ひ勢ふ衆して臺中小投入も運轉せむその力た

きものハ其力弱きものを盆外ふ出を互ふ勝負と争

ふふとこまふと海麻撃といふ席の両端と巻てこまふと盆

り和漢三才圖會いつきの時より始ることふくは田

夫野人の玩ぶ所あり海螺の壳を用て頭の尖くと碎

き平仗尻の尖りと撃て田の糸繩と巻て引てこま

と席盆の中ふ舞を二三の螺と以て勝負とせし打出

さる者と負とせその先ふ入るものハ伊加といふ後ふ

入るものと乃字といふハ打合て同く出るとは凡ハ

張といふ張のときハ伊加と勝とを婆利女祭

九熊野よりつる海螺厚く堅し婆利女祭

秋は

廿日○婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ふあ

て祭礼昔ハ七月ありしと中ごろより九月廿日とを

雍州府志

繁昌の社元針才女と祭る所ヤ、實ハ辨

才天あり針才女と繁昌と和語相近し依て謬傳

宇治拾遺

ひくし出雲の前司てふ人のむすめ此

所てうせとん々々多藝とてめんと鳥部山具行

るもその死骸むの所ふりり後ハらふ動くはく

もあらせせんことあて此所ふとめ侍りふその塚の

むらう六七間むむ八人も住つて荒地あて有るを後ふ

何人かり社と建つより侍り故有て辨才天と祭れり

簾蓋内傳牛頭天王娑喝羅龍王の三女と娶つたり

その名と婆利女とり入○安藝嚴島の才女娑喝

羅龍王の才三女あるよりいひつるふまのむむ婆利女と

弁天といふもふり故あだふりり○大閤秀吉あつ

社と東山佐女牛の八幡宮の傍やうつとてふも其ど

崇まをささるふりりふりりふりり所ふ安置を

花の弟 異名分類花の才とりりハガらくの花

夫木も草の

時珍曰榛樹低

小ありて荆の比

葉生を冬の末花とひらく楸の花の如く條

垂り長さ二三寸二月葉と生を初生ハ櫻桃の葉と

皺文多くありて細き齒及び尖りあり其實色と

三五相粘一の苞ハ一ツ實々として楸の實の如く下壯

小上鋭し生ハ青く熟まれば褐其殼厚くして堅く

其仁白いて圓く大さ杏仁のと同じ亦皮ハ尖りり

然もとも空あり丸の多し故ハ諺ハ十榛九空○その

葉悉く皺む依て和訓ハレバとあり実を以て秋李

と 柞 似て秋紅葉冬落つ城州柞の亦名所

且奈良の西南ハ祝園とりり所あり城州の内ハ元柞

園ハ後祝の字ハ改む祝園の神社春日大明神ハ此神の

森皆柞の木ありて秋甚と紅

葉を他邦より希ある木あり

番綿 番船 大坂

小あり江戸へ積出を綿こその廻船ハ一番二番三番

ありて江戸へ着岸の遅速を以て損益を定む商賈專

ら勝負 初鴨 貞享式 此名ハ全く新撰あり或を

賞翫をを加減ともいへん今按るハ

秋 はに

奉膳式と雁鴨と並あがり、賞をる処ハ秋冬の差別あり、さほど見聞の次第情と論せむ初雁といハ風雅と思ひ、初鴨といハ風味と思ふ爰と天眼とも天耳ともいへり、譬ハ初雁と音ハ喚とも風味と先ハ思ハ、鴨の冬ふるハ勿論也、初ノ字 肌寒 秋声賦 其氣標 列人肌骨

七月 庭の立琴

江次第乞巧奠小御所より筆一張と申正

東北西北の机上の妻小置く、註よ延喜十五年の例和琴と用ふ、裏書小云柱と立る小三梳あり、常小半呂半律と用ふ、秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ樂書小云黄鐘調大食調ハ律呂の調、半律の調也、夫木、このあふ夜の庭小むく、新綿 藻塩草小琴のあふ引ハさく小の糸寂蓮、ひここハ七月十六日あり、内裏の貢の綿あり、俳諧小、二百十日ハ頁のりぎらぎら、作者さうらう、正月の節立春の初日より、二百十日といハ此、秋の最中、金氣殺伐の氣變動する時、故小必風

雨あり、此時節中箱の花盛とを、その花とをこめんとを農民恐る、續猿蓑、前草二百十日も恙ふ、葛平

廿六夜待 江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出、三尊佛の影向と拜むとて、高輪小群集

是と招て與とを、又出賣菓餠餅、酒接小月と待遊客、是と賑ふ、土人幫間虎八云、土人廿六夜祭と称ス、其由来と尋る小審あ、近村の民、此處よ来、海岸小生る、菰と折取圓座とて、月のどると待、今聖天棚敷、菰と敷物小賣ハ、その名残、高輪の、此外田安の臺、湯島の社地、群集を、高輪の、賑ハ、兼三秋物 似折、御所折小似て肥満、及もど、あらを、味大、

八月 庭たき 鶴鴿、の世の、濁酒、醪、汁、滓、の酒あり

和名毛呂美、今、九月 鬼、前、良安云、衛、和、俗濁酒といハ、名久曾末由美

秋 二 ぼ

其葉秋に至て紅葉す、面色丹の如くやして青赤相
襍錦の如し、故小俗錦木とり人子と結ぶ二顆小
て尖る小正りして紅あり、信州野州の山谷ふあり、
ほ

七月 星合、星の契

齋諸記 天の河の東小
織女あり、乃 天帝の子

あり、機梭小勞役して容と理る小違あらむと、天帝其
獨居と憐こし、將小嫁せんとして、河西の牽牛と夫小
與ふ嫁して後竟小女工と廢を、天帝怒り責て河東
小歸らしめ、惟一

星祭、星の手向 周處風土記
七月七日の
年小一會せり

夜庭と洒掃して、露小几筵と施し、酒脯時の果と設
香粉と河鼓織女小散し、云々注云二星辰会まると小
當て、夜と守る者皆私願と懐く、或云天漢の中と

見る小爽爽とる白氣あり、光曜五色あり、此とりて
徴應とて、見る者拜して願ふ、富と乞ひ、壽と乞ひ、

子あさこい子と乞ふ、唯一と乞ふるを得、兼求るを得
む、三年あして是との、頗る其作と受る者あり、○

牽牛、犬飼星織女、祭河鼓、秋まり、姫、
百子姫、糸織姫、胡麻姫、梶の葉姫、とも、葉梶の葉

天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、
火取香、願の糸、衣裳と曝す、芋の葉の露、索餅、銀

河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、星の屋形
乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、喜迎舟

妻より舟七種の舟、以上各頭字の部、小らして註を
ほし

星のかし物 一の部衣裳と曝す 星合の濱
といへる糸小注也、

増山の井、伊勢小あ 本願寺の籠花 七日 紀事
マ、星の逢ふ所あり、

の晚、東西の本願寺末流、並家礼、花散種と以て、船の状
と作り、又櫓の形と作り、中、小草花、数品と建て、御門主

小献、盆市、草市、荷の葉賣、
盆市、草市、荷の葉賣、
盆市、草市、荷の葉賣、

紀事 凡七月、街市小太鼓、團鼓、大小、知正、羅木、三、手拭、
奇特頭巾、作鬚、金銀箔の紋所、小賣、是盆踊必用

の具、又盆前、截子、燈籠、臺、燈籠、金、竹、草、挑、灯、
小行灯と賣、是皆中元の夜点、を、所へ、又、索、麵、梨、

乾瓢茄子、角小豆、空閑梨、木麻枿、鼠尾草、荷の葉、
麻、大小の土器、供饗膳、破子、くんあまけ、ホと賣、是民
間聖具、会、**穂屋**、みの部、御狭山、**鳳仙花**、時珍曰、
の處用、余の條小出で、其花小

二月子と下し、五月再び植べし、苗の高二三尺、莖小紅
白の二色あり、大指のよう、中空ありて脆し、葉長くして

尖し、桃柳の葉小似て、鋸齒あり、極の間小花とひらく、或
雑色亦變易ま、状飛禽の如し、夏の**木瓜の子**
初より秋の冬まで、開謝相續て実を結、

時珍曰、其實小瓜の如くありて、鼻あり、津潤、小味、不木ふ
るものも木瓜とも、鼻ハ乃花の落し處、胸帯小あり、
木瓜灰小焼て、池中小散す、以て魚小毒をへし、**和漢三**

才圖、世小木瓜と称するもの、本草の註小合、是木
桃、しと木瓜小あり、武州江州より多く、こまを出す、
藥肆以木瓜小充、近頃唐木瓜といふ者あり、人其花を愛
ま、是眞の**穂掛**、藻塩草、田舎の稻のしり初め、新

木瓜あり、らき藁のすりめるといふものと

て穂と組合せ、門戸もと倉戸も
掛て、神小奉るを、ほのちといふ、**兼三秋物鬼**

灯、和漢三才圖會、酸醬五月小花を開く、純白、其亦
白色ありて、蒂ハ青し、宿根より自ら出、小兒中此

白子と盤去、空殼として、こまと舌上小合て、獸吹、たは
音あり、○今の世小女の童のわづき吹る、**菜花物語**
初花の巻、寛弘五年の所、御色白く、らん、い、はづ、
あ、と吹き、らめて、**源氏物語**、野分の表、わづき、
い、と、さ、事、あ、と、と、醒、齊、と、り、**南瓜**、時珍曰、南瓜

は、出、三、月、種、と、下、を、沙、汰、の、地、小、宜、し、四、月、苗、こ、ま、生、
と、引、と、甚、く、繁、し、一、蔓、十、余、丈、延、へ、節、々、小、根、け、り、
地、小、近、て、即、着、其、莖、中、空、其、葉、の、状、蜀、葵、の、如、く、大、
の、葉、の、如、し、八、九、月、黄、花、と、ひ、ら、こ、瓜、と、結、ふ、正、四、
こ、西、瓜、の、如、し、皮、の、上、小、稜、あり、甜、瓜、の、如、し、本、小、殺、
顆、と、結、ぶ、べ、し、其、色、或、ハ、緑、或、ハ、黄、或、ハ、紅、あり、霜、と、経、
收、む、暖、處、小、置、け、ハ、留、て、春、小、至、る、べ、し、○一、種、**南京瓜**

一名東埔寨、一名唐茄子、本草、南瓜、瓜の下、所謂、陰瓜

秋、は、

是ほらのいも 形かたち螺ら芋いも 似にて大おほ **ほと** 鵜う 志の部鳴の **星** 余不出

月夜 あり只秋季あり **東花式** 古抄ハ星月夜の名と

あけて只秋ありとむらり云捨て月ふ去嫌の論ありとむらり
是ハ秋ありて月ふありとむらり登句膠才三とて此名目あり
ときハ其三句ハ素秋やとて七句白の月の座ハ此の季
少シ異名とむらりハ例の詩ありとむらりとて此ハ故

公おの翁おの芭のの **八月** **譽田祭** 十五日 河内國長野山 護國寺地蔵院

の縁起ニ云當社ハ八皇十六代應神天皇の御陵あり
母后神功皇后の御胎内小はしりて三韓征伐の後
筑前の國小於て降誕脚腕小靴の形ある故小譽田別
の皇子と号し奉る是弓矢の家と守るありとて
此時小頭あたままて久治世四十一年仙齡百十一歳の春大和
國豊浦の宮小崩たふさむ玉躰たまみと瑪瑙めいぼうの棺小納り河内
國藻伏もづひの岡小葬り奉る三十代欽明天皇の勅小よ
りて宝殿と營いそみ三所の神明と祀り所謂中殿ハ八幡

大菩薩おほたハ仲良天皇右ハ神功皇后之世小神祠多し
とてと當社ハ玉躰と納の奉りの靈窟ありて八幡
宮の根源威験深きとむらりハ○神祭八月十五日
先ま十四日の夜奥の院の御座前本堂ハ鳳ほう輦けんと行幸
ふし翌十五日午の刻還幸舞樂あり四月八日あ祭
申衆うしん舞隔年くわねんふりて行ハ放生會ハ當社小あり此
よハ但ただ社 **放生會** の部八幡 **菩薩祭** 廿二日
説いの趣おもと記 の余不出

肥前國長寄ながふ於て米船人船神と祭る八月廿二日
とむらりとむらり **和漢三才毒會** 舟の神と媽祖まづ娘むすめ
といハ俗よことと舟菩薩といハ唐船長寄たう未まて往々祭
る所の神是ありハ船中の品物と水揚
とて四々寺あり福州ハ石灰町崇福寺漳州ハ下筑後
町福濟寺南京ハ寺町興福寺この三ヶ寺寺ハ唐僧
住も今ハ看主持けんしハ外小目付寺とて筑後町ハ聖徳寺と
いハあり昔より和僧持ありハはと祭の日ハ和僧ハ唐僧たう袈
束ぎあとして法事修行ありハ本尊ハ觀音あり此日米船人を
その寺院ハ恭詣も其異体とて諸人群集とて

のハ四箇寺ほすき 穂ほすき芒ほすき 芒の穂と尾花ほすきといふ
ふ黄蘗ほすき沁ほすきすほすき 尾花ほすき 穂ほすきとよほすきくほすき形ほすき獸ほすきの尾

不似ほすきりほすき故ほすきふほすき名ほすきくほすき 牡丹ほすきの根ほすき分ほすき
まほすきこほすき花ほすき芒ほすきしほすきらほすきハほすき 和漢三才菡金夏
乾ほすきしほすき古ほすききほすき畑ほすきの土ほすきと細ほすききほすき沙ほすきと以上三品ほすき篩ほすき和ほすき九ほすき月ほすき紅ほすきき

芽ほすきと出ほすきこほすきと移ほすきしほすき栽ほすきべほすきこほすきと培ほすきふほすき小ほすき葉ほすき濁ほすきと用ほすきふほすきへほすきりほすき
らほすきじほすき冬ほすき月ほすき油ほすき渣ほすきと用ほすきひほすきて少ほすき一ほすき根ほすきの傍ほすきふほすき入ほすき 頬ほすき赤ほすき鳥ほすき

或ほすきハ鮮魚ほすきの洗ほすきひほすき汁ほすきと灌ほすきぐほすきも亦ほすき佳ほすきなりほすき 頬ほすき赤ほすき鳥ほすき

正字未詳 和漢三才菡金 狀ほすき雀ほすきより小ほすきく背ほすきの色ほすき亦ほすき
雀ほすきのほすきくほすき其ほすき頬ほすき赤ほすきく胸ほすき白ほすきくして鳴ほすき鶉ほすきの文ほすきありほすき声ほすき

青鴨ほすき不ほすき似ほすきて細ほすきく高ほすきく 畫ほすき眉ほすき鳥ほすき
常ほすき一ほすき蒿ほすき間ほすき不ほすき棲ほすきむ 狀ほすき鶯ほすきより大ほすきく

灰赤色ほすき眉ほすき白ほすきく畫ほすきくか如ほすきく頬ほすき亦ほすき白ほすきくして間ほすき黒ほすきく
背ほすき上ほすき小ほすき黒ほすき點ほすきありほすき翅ほすき尾ほすき畧ほすき黒ほすきく尾ほすきの両端ほすき白ほすき毛ほすきありほすき

腹ほすき微ほすき赤ほすき黄色ほすき臆ほすき下ほすき小ほすき赤ほすきき斑ほすきありほすき其ほすき足ほすき赤ほすき黒ほすきく其ほすき声ほすき
口ほすき滑ほすきりほすきて多ほすきく嚙ほすきふほすき小ほすき鈴ほすきの音ほすきあるほすき者ほすき其ほすき声ほすきと謂ほすきて

行鈴諸鈴 九月 星見草
の名ありほすき 菊ほすきの異ほすき名ほすき多ほすきく藏玉ほすき
庭ほすきりほすきせほすきふほすきくほすきてほすき人ほすき

異名ありとも星ありてよじあり 古今ほすきの雲ほすきの
くみそほすきるほすき菊ほすきありほすきありほすき 鴨ほすき上ほすきナほすきくほすきくほすきくほすき人ほすき

鬼目 家の祖根ほすき小自
然ほすきわほすきと生ほすきて蔓草ほすきハ兼朝顔ほすき不ほすき似ほすきて小ほすき白花ほすきと開ほすききほすき秋

実ほすきと結ほすきぶほすき秋季ほすきとまほすきるほすきゆほすきれほすきハ其ほすき実ほすきと賞ほすきしてほすきハ春秋ほすきその
実ほすき甚ほすきぶほすき紅ほすきく鴨ほすき好ほすきんほすきてほすきるほすきとと啄ほすきびほすき依ほすきて名ほすきと人ほすきハ菩提ほすき

○時珍曰白英ハ其花といひ鬼目ハ其子の形象 菩提
子

校量類珠功德經 諸陀羅尼及ほすきびほすき仏名ほすきと念誦ほすきする
てありほすき木患ほすき子ほすきハ十倍ほすきありほすき浄土ほすきに生ほすきせほすきるほすきと求ほすきめ

こ此珠ほすきと受ほすきよ水精ほすきハ百万倍ほすきありほすき菩提ほすき子ほすきハ無量倍ほすき
とく色ほすき也ほすき昔洛東建仁寺ほすきの千光国師ほすき宋ほすきハ入ほすき此種ほすきと

得ほすきて歸朝ほすきしほすき筑前ほすきの香椎報恩寺ほすき小植ほすきつほすきてほすき一ほすきより
傳ほすきふほすきとほすきなりほすき後其種ほすきと京師ほすきの寺ほすき々ほすき小傳ほすきこほすきとと植

泉涌寺六角堂ほすき極山ほすきの西塔ほすきホほすきありほすき宇治ほすきの興聖寺ほすき小
予ほすきこほすきと見ほすきるほすき一ほすき樹ほすき小葉ほすき二色ほすきありほすき一ほすきツほすきの葉ほすき棕ほすきニほすき似ほすきて厚

く大ほすきく又ほすき一ほすきツほすきの葉ほすきハ木犀ほすき不ほすき似ほすきりほすき其ほすき葉ほすき小莖ほすきありほすきて莖
より嫩ほすききほすき細枝ほすきと出ほすきしほすきてほすき小ほすき花ほすききほすききほすき実ほすきと結ほすきぶ

秋 はへ

其実淡黒堅硬して念珠とて香氣芬々たり、興
聖寺の僧曰、是經小説る菩提樹あり、天竺此樹下小於
て佛成等正覚し、樹あり、樹の高さ一
丈むより、枝極のうり百日紅小似て甚ど奇樹也

鶉草

大和本草 品葉ハ紫草小似て短く小筋
多し、又藤の葉小似たり、蒼々筆の如し、花秋

開く六出あり、中より葉出て又花の形とふ、葉こ
と小葉の點あり、杜鶉の羽の形小似たり、染の
びく、莖の高さ
一二尺小まき也



兼三秋物 辨慶草

和漢三才圖會 景天和名以岐之佐俗小ハ辨慶草本
細小景天極め種易し、枝と折て土中おち、澆溉旬
日便チ生むる、二月苗と生ス、脆き莖微赤黄色と帶、
高さ一二尺、おと折ハ汁あり、葉淡綠色わく光沢
あり、柔小厚く状長き匙の頭及び胡豆の葉小似て
尖らぬ、夏小白花と開き、実と結入連翹のてくちりて
小く、中黒子あり、粟粒の如く、人皆盆盛て屋上不
養ふといふ火と碎べし、故ハ慎火草の名あり、按ざる

小景天佛甲草小似て大なり、莖と折取て擔間小倒
小懸多小日と経て相まを、後地不裁る小亦活、馬
齒草小勝多、蓋辨慶ハ源の義經の家臣より、女
童相傳へて強勢の士とて、故ハ相比して、と名づく、
以岐之佐の亦
活の字訓り、
布瓜 時珍曰、六七月黄花とひら、
五出微胡瓜の花小似たり、
辨具小黃あり、其瓜大さすむく、長さ一二尺、甚くさハ
三四尺、深綠色、皺の點あり、瓜頭、龍の首の如く、嫩ふ
る時皮と去る、蔬不充老

八月 紅藟

和漢三才圖會

陰處小生、其綴紅色裏
白く細き刻有て毒あり、
大毒あり、故ハ人近あらず、
虵 虵

穴小入

月令 仲秋月雷始收声、蟄虫抔戸、和
俗春の彼岸小出、秋の彼岸小入といふ

七月

ととと 妻

とりのハ、乏の字、
よめり、稀少の義

あふこの稀小とむりき妻也、故ハ織女年小一度まじふ
あふと、とり、妻とよとと、哥あり、とと、増山の井、亭

環とて活法の書小織女の異名のやうふ
出づるは、さうし、なまらど織女のいひ有べし、
年七渡

織女の年小一度天の川と渡る意あり、
葛不絶物可良佐宿者年之渡尔直一夜耳、
燈

籠
一切經音義 燈籠又爐小作る火の居所九火
と盛の器と爐といふ
紀事 九中元燈籠と用ふる

と寛喜前後小起て、今小至て相續て故事とて定
家卿明月記 近年民間小長竿を建ててその末梢小燈
籠と設け紙と貼し灯と舉て遠近よりふことと見る

流星小似たり、
五雜俎 宋の初小中元下元皆燈と張る
こ上元の例の如し、太宗淳和年中始てこまとやし、○

本邦の俗、中元の夜家々燈と張て廿四日乃至晦日小至る
或ハ朔日より三十日小至るもあり、又白き提灯と出を

もあり、○高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、
リコ燈籠、以上各頭字の部小ありて註と、舟燈籠、影

燈籠、舞燈籠、揚燈籠、
燈籠、
考、
燈籠踊

紀事 洛北岩倉、花園、西村少年の女
子、各大灯籠と戴き、八幡の社前

聚りて、男子大數と擊笛と吹踊とせむ、是と灯笼踊
といふ、頭上小載く所の灯笼、踊る女子の家々、春の初

よりとてと作て、互小共
作る所の模様と秘ス、
鳥居の火
世の部施火
呪の糸註

鳥屋勝
鷹新毛と生じ羽翼全く備ふ、鳥屋
と出るの時、逸勢特小称まふ、これと

鳥屋勝といふ、○去年よりいと色まらり、
斤うり狩ゆくす名の秋ぞうねり、き、定家
蜻蛉

秋津虫 うけう入
桑華紀年 神武天皇高き小登り、此
邦の形蜻蛉に似るとを以て、秋津洲と

名づく、
和名抄 蜻蛉 和名如
和訓 葉うけう入のあまう

あまうといふ、ハ蜻蛉といふ、
飛良歎々と水小点し、閃々と電のむくみ、
小比ていふあり、
和漢三才圖會 蜻蛉ハ總名あり、大小

て青色あり、者紺蟻、一名天雞、大よりて玄紺、
藜一名江雞、小よりて黄あり、者馬大頭、最大よりて身緑

色赤率ハ小ハ
富草の花
風俗哥
あつとみくとの

秋と

とみてみつと入てもこへまる **頼桐** 大和本草佳俗

らん、ユニ稻の花をいんと之を 唐桐といふ高草二 **菟麻** 三

ふ、實あり大 和名唐荏、又くらげ、ハ、葉ハ大麻の如し、甚と

毒、わりとど、 **兼三秋物 番椒** 天井守 和漢三

番ハ南蛮の裁り、俗ハ云南蛮胡椒、今唐芥子、二月種 才面全

と下し、葉柳の如く、亦胡椒の木、葉ハ似て和 五月ハ白花とひらき、実と結ぶ、數品大小長短異り、

と田きとの種あり、初め青く熟まれば紅あり、秀古公 朝鮮と伐り、彼國より渡る故、俗又高麗胡椒と

り、○天井守、番椒の一種、とくく上とびく故、名々 とど、猿蓑、唐の芋

煮て食ふべし、時珍曰、連禪芋、壯大ありて 鳥劫

部案山子

八月 富賀岡八幡祭

記江

戸城南深川あり、祭る所、鶴が岡、不同トといふ、別

當大栗山永代寺 深川才一の大社、或ハハ神体

ハ管公の作り、源三位頼政深くを崇む、其後

千葉家に移り、足利高氏ハ傳へ、基氏持氏ハ至り、後

上杉ハ傳へて、太田道灌よりを信仰を、礦石集

寛永元年、長感法印、其夢のありて、永代島ハ高居

と建立し、同八年成就を、○深川の土人本居神とす

祭礼八月十五日放生會あり、二三十年一度祭を行ふ

豊浦祭 神社塔蒙 長門國豊浦郡龜山あり

仲哀天皇あり、三十三社註式、人皇五十六代、清和天皇貞

觀元年、男山ハ近座の時行教和尚行宮と造り、これを

勸請を、後土御門院文明年中建立を、○今八月祭は、

三月十四十五日の兩日、龜山祭あり、先帝祭といふ

安徳天皇の御祭礼あり、阿弥陀寺ハ御陵あり、海辺

小宮あり、この祭前後四日の間、鳥飛とを得、又平

秋

家蟹赤間が関の海辺ふ上る常ハこのとをり、是先帝の御初月と里民のり、又九月十四日十五日ハ幡春日ハ而社と祭る、國至より馬二疋と牽き競馬わり、是ハ幡祭也、**烏頭** 其苗高三四尺莖四稜と作葉艾ふ似て其花紫碧色穂と作、其實細小糸椹の如し、黒色本附子二物と種成熟とふ小至て四物あり、**天雄** 時珍曰二月種と下し、**烏頭側子附子** 是也、**黄蜀葵** 或ハ宿き子土ありて生む、夏ふ至て始て長む、葉の大き莨麻の葉の如し、深緑色、岐子と開く、五の尖あり人の爪形の如し、旁小き尖あり、六月花と開く、大さ花の如し、黄

色、紫心六瓣やして側てり、且小開き午ふ收、暮ふ落亦呼て**測金錢花**とす、其莖長きもの六七尺皮を剥く繩索とあまべ、**木賊** 川 禹日木賊苗の長さ尺むり、叢生を根毎小一幹花も葉もあり、寸々小節あり、色青く冬と凌て凋む、四月こまこと採、**時珍曰**木骨と治る者こまと用て磋擦と光淨あり、木の賊といふが如し、**和漢三才圖會**物と磋

と磋の如し、故ハ**砥草**と称す、**胡黄連** 三才圖會苗の高さ五六寸、根小數莖其莖細くして淡紫色葉地層草ふ似て、小く七月花とひらく、桔梗花ふ似て、小く黄色、**○千振** **天和本草**胡黄連ハ黄連ふ似て、大ニ黄あらむと味苦し、此草日本不あり、未詳

千振とて、秋白花とひらき、葉細く味甚苦き、**小阜山野**ふあり、たうやく、**酢醜醜** **天和本草**酢醜醜花の條下ふ云本邦のハ白花千葉菊の如し、依て筑紫とて菊とらるとのハ中花ハ黄色ある者ありと、**農政全書**不記せり、**唐黍** 故ハ黄色の糠と除醜醜とのふ、**唐黍** 紅戸の俗ありとのハ**春の日**待意ハ殿と

實 **蘇頌曰**三四月花をひらく、黄色粟の花ふ似す、実ハ粟より少く大ニ餅ふ作て麩とて、凶年の食とも木ハ斑文あつて、諸の器ふつらり箱とて甚美矣、**秋**

九月 杼の

唐黍

蘇頌曰三四月花をひらく、黄色粟の花ふ似す、実ハ粟より少く大ニ餅ふ作て麩とて、凶年の食とも木ハ斑文あつて、諸の器ふつらり箱とて甚美矣、

秋

木曾の山中多し是と麩ともる小其粉と熱湯を
ら糸調へ温飽のごく棒不捲て温ふる内ふ急ふこま
と伸を冷まハ堅く縮つて伸む其手廻し

罌子

甚急なる故俗諺は糠麩棒ふるといふは是なり
天和本草荏桐も油桐とも云々ト訓
桐實 非あり桐似たり其實大毒あり食ふべ
ららざる實小油多し民用とたましく此油とぬると青漆
の如くまる法あり○時珍曰罌子桐の實と荏桐と名く
罌子ハ實の狀罌に似たり因てあり荏其油荏の油
小似たり

和漢三才圖會濃州江州多くと種油
志のりらると販其功荏の油小同煉成て漆代ふ
桐油漆と名く五色とぬるべし常の漆ハ白色と塗
あこもると又松脂とをへ船槽と塗る小水と漏らば
とチヤとといふ○年浪草小桐油ガモ同物といふハ
ろとて魚花果の異名

唐枹

いの部とる也

團栗

の子之數種

ドンクリハ榲の一種小榲といふ木の實之榲小似
て大あり味淡く食ふべし榲の形状の部とるし

ち

七月中元

十五日修行記七月中元ハ大慶の月
道書小云七月中元の日地官

下り降りく間の善悪と定む諸大聖普く宮中
道士その日夜お於て經と誦し十方の大聖
灵篇と録し餓鬼囚徒といふ解脱と得せしむ五雜俎
道經ハ正月望と以て上元と七月望と中元と十月
望と下元とを遂小三元三官大
帝の称あり是俗妄の甚しき

地藏祭

洛外

六所の地藏諸あり加茂御泥ヶ池山科伏見鳥羽桂太
祭ことく九一日六所の行程十四里之文徳天皇仁壽
二年小野堂地藏の像六体と造り木幡の法雲山大
善寺小安置を故小この所と六地藏村といふその後保元
二年平清盛六ヶ所小堂と造りことわらち置り七
月廿四日供養西光法師とを與し行ハ今小主りて七
月廿四日諸人六所詣をことと地蔵祭といふ洛下の
兒童ハ又各香花と街衢の石地藏供してことと祭
る又今日六齋念佛の徒も又六所の堂小詣りて太鼓と
擊鉦と鳴し以て踊念佛をふも俗をれと六斎太鼓と

新名、洛東光福寺

干菜の一派あり、

ふく風やさむうらんうれ
むいやくよこるる声のね、

兼三秋物 茅

和名大

本草 白茅、本艸小穂頭云春芽と生ず、針のさす、俗小

こまこ芽針とつひ小兒がて食ふ毒あり、血と破り血と

止む 九月 重陽

音唯類書重陽、魏文帝の
鍾繇、與る書、小歲往き月

来て忽ち復九月九日、九と陽數よりて日月並ひ應と

故小重陽といふ、俗其名と喜して長久よりて宜うんす、

故小宴して 重陽宴

公事根源 九月九日ハ節
日あて侍まて菊の宴行ハ

多とことと重陽の宴と申、九月九日ハ月と日と九陽

の數小叶ふがゆゑ小重陽といひあり、むくハ天子南

殿小出御ありて、節会行り、上達部、御子達より始て、

其道のハ、ね探韻給り、文つくり文臺ふみて講せらふ、

十月の旬のふあふも、けふも水魚、さめハ例あり、文輩

臣小菊酒と賜ふ、犬とい五日の節会小あふ、御限の

左右小葉葉の袋とかけ、御前小菊瓶とむく、又葉葉の
房と折て頭小柿めむ、悪氣とさるといふ本文あり、

千代見草

よまひ草 菊の異名あり、慈童八百余
歳の後出て、彭祖と名と替

て、長壽の術と魏の文帝小傳へ奉り、文帝百歳の壽

と成とあり、和歌もと菊小千とせの秋と詠むること

珍しく、此意 契草 菊花の異名、藏王陸奥

を名付侍る也、 國小兄弟あむりの世ふあ

まよびて、弟ハ筑紫へ行り、とがひ小名残と惜と別れ

らるとも、兄庭前の菊と、一本と二つ小まけつ、意とえ

とり、とがひ小此きくをこてあぐさむ、といひあり、弟

筑紫へかちつ、下向して、此きくとうもとり、この菊二小

分しまふ、かく枝むろ



兼三秋物 律

の調 索隱曰按、律十二あり、陽六、を二律とと

黄鐘 大簇 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六を

呂とと、大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘 是也、名

づけて律といふ、貞徳曰、もれちらぶ、秋、ハ、

秋 ちりぬ

呂の声ハ春ふるるべき道理あり
共其さくさくむらば呂の雜

八月 龍膽
草

和漢三才圖會其葉笹の葉似て厚く九月花を開く
花紫やして鈴鐸の形の如く上ふむく花中小蒼子の
り又正白花の者あり笹龍膽とあづく**八雲御抄**云々
草アんと云云○思ひ草**八重垣**龍膽といふも
露くさといふ通具御説「道のくの尾花がむる思ひ草
今さらふあぞ物とあむらん○とふ真洲翁云い木丹
ともふきて云字書木丹ハ梔子の花也と出る是こ
源氏とあめの巻ハ四季といふるその夏の方ハ花橘撫
子さうびくさふおとやうの花とさくくさあてとあり
是れ夏こくさふらくらぬあるといはらる○尾花
かむる思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説をまをさむ
むらくあづくにを龍膽といふハ誤とあづく
九月 鯉魚風
九月の風也 **李賀詩**明前
流水江陵道鯉魚風起矣
兼**三秋物** **零餘子**
野山菜也
草解と蔓

葉の形状混雜して分別をなくし草解亦零餘子あり

アて山菜の如く故小諸説草解と以山菜といふ山菜
ハ其蔓紫色と帯ふ其葉山く大あり其化白色穂
とあして下こ来ふ草解ハ其葉山くして大り且稜
あり其蔓青色淡黄の小花といらく隨て莢と結ふ
三稜あり山菜もまふ莢とむらふ故小見易らむ
九月 白膠木紅葉
時珍曰楠木木の形椿
りごと一五六月昔黄色の
穂とあふ一枝小累累なり七月實と結ぶ鹽膚
子と名づく葉の上小虫あり五倍子と結ぶ成す
る

八月 縷紅
如く莖より蔓と出し八月小紅花と

いらく形丁子小似て長さ
六七分の花あり愛まべし **瑠璃鳥**
和漢三才圖
會碧鳥俗

云留里大さ雀の如くふして頭背翻上翠色頰頰
下小至て純黒胸腹白く背脚尾具小蒼色其舌圓

滑ありて **と**
七月 鬼の洞念佛
七日

秋 ぬると

十五 **滑巻音雜談** 洞ハ八瀬河の西の山中ふわり俗鬼の

ま **洞**といふ口狭く中闇し高き二丈許深き三丈昔

酒顛童子此洞より丹波の大江山へ移るるといふ或

昔叡山小童あり僧徒其美しきと愛せし勸酒交歡の時

時人と敵血ととり酒小和してこもと飲ひ一旦魅とありて

此洞小入云此話羅山詩集酒顛童子の洞小題すと云

る序小入云 **雍州府志** 毎年七月七日より十五日小至

村中の兒女此洞小聚ると鉦と鳴り大彌陀の号と

唱ふふと先 **踊** **書言故事** 王子醇くため無可平

祖祭といふ **踊** かけ軍士ふとして誦鼓鼓ともし

遂小せよ其ご行い子醇西人と對陣せし時軍士百

余人よ命して誦鼓ともし隊小軍前小出と虜見

て驚き愕く遂小こもと撃破る注云誦鼓戲ハ樂人

雜劇とありて跳躍ともし世人皆こも小效ハ **本朝**

の俗七月十四日より晦日よ至る毎夜大人小兒街頭小

踊とあり **懸踊** 念佛踊 題目 踊 燈籠踊 伊勢踊

木曾踊 小町踊 七夕踊 亦あり **折つけ燈籠** **用捨**

各共頭字の部小つちて註 **折つけ燈籠** **箱魂**

祭よび **用捨** 折つけ燈籠と江小絶り **箱魂**

鹿栗 **貞享四年** 親ハ鬼子ハ口よりき菘虫よ其角折つ

けとらん月の支月野馬 **中** 畧竹藪と折つけてその俣垣よ

まると折つけ垣と云此燈籠と竹と折つけてつらも故の

名ありうりり此少ていなく家とてつらういとねい

よく竹とありとありあるり何と又名のどく折つけて上を

かく形のりりきあり **麻柯の箸** 聖具祭も供ふ

一ツ小異ありしと **麻木**の箸もととありし惟然 **時珍** **送**

日大麻其楷自らして稜あり輕虚燭心とま **送**

火の部迎へ火 **女郎化** **祭化** **和漢三才面会**

を高さ二三尺葦小稜理ありて蒿の莖小似る枝兩々

對生し節の間葉を生む其葉三七反前故の葉小

似て細く長し七月穗と生花とひり最細小正黄色

變まべ **本朝支粹** 源順の詩云如蒸栗俗呼為女

即者是あり隨て子と結ぶ花白き者男倍之と名づく **大和本草** 敗曾藻塩草小白花あると俗よと云へし

といふ又オホトチハ女郎花に似て花白きありて...

○此花と女子の艶姿ふことして讀む歌俳諧ともふ...

同ト古今名よめでとれるむろぞとまふ...

あきと人ふくそね僧正遍昭續猿蓑とふへ...

の杖ふくそね萩の凡大和本草萩ハとき...

山野おも水辺おも生む中実こよへれど...

大和本草麥門冬の一類

とも萩の上風ともいふ羽草

大和本草麥門冬の一類

漸く青くあふ根小門冬あり尤大葉麥門...

異草之滑稽雜談

草と和らげゆり然まどと本草綱目と考ふ...

種之白頭翁俗いふ猫草小畧似たり今云翁草...

和漢三才圖會初生地膚子つ秧みひり...

小極あり莖葉ことと按めを汁あり須臾...

あり英と結ぶ三稜あり中細子あり藥小用...

入花山院の朝は鷹飼あり晴頼と名づく...

草と名づく慈鎮和尚鷹飼自秋の野小ま...

青くとりくへて入鷹飼

近し長と一二尺以來柳葉の如し莖細...

月花と開く菊花の如し深黄色七八月及ぶ

秋物 鬼芒

時珍曰葉茸の如くみりて長三四五

尺甚と快利りて人と傷ると鋒刀の

兼三

秋

如とふ 芋生の浦梨

芋生の浦伊勢守の和哥ふこへの浦梨とてこころよきものなり

古今とよのうらふことなし一ゆわいある

小田守 晚

稲守

山田守九田と守了稲と守るハ人畜の傷残こと防ぐたまふ

八月尾

花の粥

大内記田原康富日記文安五年八月朔日ハ尾花の粥の事その由来何事あるハ自然見及ぶのよ一問しゆる人いまだ見及ぶその子細とちらむいり返答一畢る云々

海人藻芥八月朔日小花の粥内裏仙洞以下令用給良葉云々彼粥調法薄黒焼ヲ粥ニ入合也後水尾院當時年中行事ハ朔の条ニ云々夕この御いし初献よ

鬼の志草 紫苑の事云々 和漢三才圖會白粉草の部ニある也

白粉の花 正字未詳春苗と生し冬枯み高さ二三尺叢生と葉淡青ゆて白粉頭ふ

紅色五出葉葉少し葉の長さ一寸余亦紅花の中ハ紅の葉と出を細く糸の如し葉の本小子と結ぶ灰黒色嫩胡椒の如くも中ハ白粉とてと採て婦人の面下塗光沢餘粉は優なり○中華の書よと云々

外國の物みんと大和本草ふと云々 車前子 初の苗と生ず葉地は布く匙の面の如し年と累一者長さ尺余中ハ

救草と抽て長さ穂と作と鼠の尾の如し花甚細密く青色微赤き実と結ぶ草歴のどし今入五月苗と採て七八月実一採

滑替雜談此者苗或ハ花といふも古来より実といて八月の部ハせり故実ハ准べき

尾花 尾花の部穂花の条ハ出

思 思の部穂花の条ハ出

草 草の部龍膽の条ハ出

黄蜀葵 名一物この部ハ

落穂 詩經此有滯穗伊家婦之利注云滯ハ遺て棄るの意ハ收成の除る滯漏の未

穂わりむ実婦るるとして利とて得る此

豊成餘あつて尽く取らむ又穢寒とて共ふ

と見えり。列子

落鮎

洗鮎

和漢三才圖會

拾穂者行、歌
近し、此時鮎芥子の如き者腹小満其背淡斑の文と
生じ、刀刃の鈍く、如し故小鋪鮎といふ。八月九月湍の水
草の間小子と生て後漂泊して流入、適ひ下りて死を、是
落鮎なり。其下りて落るゆゑと持筈と撰て以てこまこと

捕へ名づりて下り、菜といふ、
九月より肉瘦味甚劣

九月岡崎祭

十

日或ハ、東天王祭九月十五日、洛東岡崎ふり、名勝

十六日志九月十六日祭礼云云紀事東山岡崎正一位

東天王祭神輿一基、鉾二本、ついでその内一本の鉾、

下り、埴と以て鷹二連、獵犬一疋と造り、彩色と施す、

是を犬鷹鉾といふ、其傍に感神院の三字を彫刻を、疑

らく、四感神院の鉾云云當社、聖護院の杜小あり、

故有て吉田の地、小移と、然る小同神社亦岡崎ふり

と故小東西と以てこまこと分つ、雍州府志、犬鷹の鉾

ハ、村入神室と稱、豺祭獸、月冬、此記、戌月之

弟草、少女草

と藻塩草小の多り

天、幾、翁、若、弟、草、少、女、草、と、い、ふ、草、同、前、

殺之、食、也、梅と花の兄といひ、菊と花の弟といひ、故を、○古、露、ま

てとわひおひり、少女草、あらき、風と花、わて、小、花、

かきふ、菊とも松ともいふ、住吉の里、小五位の松とて、

後、小ハ化して、公羽、小成て、住、久、常、小、心、と、ま、あ、り、て、琴

と、ら、ら、又、庭、小、菊、と、う、ち、て、愛、し、り、り、小、翁、が、言、我、庭、ま、き、し

の、松、蔭、ま、の、ぞ、ま、む、翁、が、草、の、花、も、ま、あ、ん、○此、故、

事、小、より、て、松、とも、菊、とも、こ、の、小、翁、草、と、い、ふ、一、

母、草、の、實、三、四、月、一、莖、と、抽、で、淡、黄、花、と、開、く、

結、入、生、ハ、昔、く、熟、す、と、ハ、真、紅、累、々、と、り、て、天、南、星、の、実、ふ

似、て、可、愛、三、才、面、會、万、年、青、葉、芭、蕉、小、似、て、隆、々、と、り、て

衰、へ、も、其、多、壽、と、以、て、万、年、青、と、名、く、大、和、本、草、

唐、小、ハ、一、切、祝、儀、に、用、る、よ、し、花、鏡、小、と、い、ふ、

栗、熟、せん、と、り、て、子、出、て、其、苞、

自ら裂けて、地、小、墜、る、物、是、

遅、稻、晚、稻、時、珍

落

老

秋、と、わ

日稗稻早中晩の三収あり六七月収る者と早稗と
も八九月収る者と遅稗と云云是遅稲なり時珍
曰十月収る者と晩稗と云云是晩稲なり
と云云是晩稲なり
落水 一水と云う、畿内ハ
ハ所々稻と蒔て後田ハ菜種と植る、故ハ
兩作所と云、田の水と落さハ、菜種と植る用意、
すん 是あり、秋甚紅葉を、立花と好む者秘藏して

あ **七月早稻**

時珍曰六七月収る者
者ハ早稗といふ食ハ

童相撲

扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑童相撲廿番と御覽綾綺殿

兼三秋
七月六日童相撲廿番終りて舞と奏と

物木綿取

挑吹 和漢三才圖會 其实挑の如
し、四ツ小裂て中ハ白綿と出

若煙草

和漢三才圖會 煙草相思草波
婆姑 淡芭菰 羅山文集 他波古

希施婁、皆番語也、云云 按、どうふ天正年中、南蛮の商
船始て此種と貢を、以長寄の東の土山、植二月種と
下も、五月移し植、新芽と摘去、虫と除くと、毎且
怠るべし、高さ三四尺、葉商陸に似て、長大七八月
葉と采り、葉を覆て、こまこま、一宿して取
出し、一葉と小繩、ふまふま、編み、こまこま、して晒し乾し、
一夜露宿して、後晒し乾し、黄赤色と云々、
敷と擴げ、こまこまと収む、云云、若煙草是あり、

八月

楓菌

和漢三才圖會 此月諸鳥異國
より群飛して

山林江湖小来る、
是と渡鳥といふ、

九月 度會新嘗會
外 言

十六日、内裏より初稻と伊勢兩宮へ奉らせ給
宮十七日、ふく、大嘗会といふ、御即位の後、日本國中
の神々へ御饌と奉らせらるゝといふ、
新米と奉る故、よ早稻米の御饗云、
吾亦紅 陶 弘

秋 あか

景曰地榆其花子紫黑色莖の如し故小又王豉と名く云是花葉小ワレモカウ本名王豉一名地榆比叡山鞍馬及び近道ふ生む宿根より二月苗と生初生地ふく独莖直上高さ三四尺對し分て葉と出を楡の葉ふ似て稍狭く細長くして鋸の齒の状ふ似て青色七月花とひらく椹子の如くして紫黑色

か 七月 梶の葉姫

棚機七姫の内あり 異名分類 碓の葉姫

ハ八雲御抄は梶の葉よとの書也皆由緒あり云漢雲問答は茅の葉の露と硯の水とに梶の葉七枚小歌一首づつ書よと云えり是等小よふ 梶比葉 皆二星と祭る具事要の物と以名付と云えり

年浪草 和俗七月六日市中小穀の葉と賣明夜詩奇と書て以て二星小供とる所あり又短冊は楸の葉と用て詩歌と書く 和漢三才圖會 和名加知 俗云加 楸と云ふ 楸の皮今多く紙に造る又布に織往昔木綿と稱せ今も亦祭祀の人木綿縮小被る上古の衣服小象の敷今二星小供とる時詩奇と歌の葉小くと牛女神と

祭の故小木綿の義小象の菅草長高は朗詠抄曰昔余吾の海小天人下羽衣と獵師小盜ま心あらど獵師の妻とあり年月と經て羽衣と取得天上し再ひ人界と下りて獵師と共に天上も女ハ織女とあり男ハ牽牛とあり其再び天へ上るの時梶の木の上より糸とひれし是小取付て登る故二星の手向小梶の葉と用ひ願ひの糸とて五色の糸と用ふと云畧して爰小記此事淡海志と云ふ 梶

の鞆 あ の 部 飛 鳥 井 河鼓 あ の 部 二 星 烏鵲 う ぐ ぎ の

橋 え し 藻塩草 鴉鷺記云史記小云瓊小夫婦あり夫と遊子といひ婦と伯陽といひ皆老に契つて子ハ

二ハの候陽ハ三四の旬也と云此文のころハ遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦とあり互小志切共月と愛まると限つて夕小ハ月の出ると待て里小行曉ハ月の入ると惜して高峯小上る伯陽九十九ありて死を遊子深く歎て月と形見と云ふはるか或夜伯陽鴉小来て空と飛ゆと云ふ遊子殊小歎きて百三歳あり

死せり天の星とありて、鳥小乗て天と飛行て、銀河小望
 て川と隔てたりとありて、帝釈毎日此河を水とあひ給
 故、水けがま有て渡ると許さる、然りとて、七
 月七日、帝釈善法堂へ御参りて、日あり、水とあひ給
 たりて、渡ると許さる、年小一度とて、人間の事
 一日一夜あり、此とき鳥と鵲と羽とあらば、橋とて、彦星
 織女と通ま、是と鵲のこゝろあり云、大和本草
 鵲ハ畿内東北の國ふま、筑紫ふ多し、朝鮮より来
 たり、ふや、高麗鳥と云、鳩より小く、つらみより大、
 羽小黒白あり、尾長し、本草小載、鵲あひ合り、
 茶 せの部授待、縣心躍、紀事十四日あり、晦日小至
 と催し、或ハ又各同列して相知處の家小至て、大小踊躍
 とす、是と懸踊とあり、掛らる、所の家再び踊躍と催し
 て、こゝろ酬ゆ、蜻蛉、の部、の部、の部、の部、の部、の部、
 是と返しと称、蜻蛉、の部、の部、の部、の部、の部、の部、
 拍ちる、御傘拍ちるハ夏あり、無言抄小
 秋と有る、傳事ハ秋の部、の部、の部、の部、の部、の部、

盤木の散ハ夏、今此國の人の申、拍ハ初秋、小紅葉
 て、あるもの、此注よつて、無言抄をよみ、あるものと
 秋之、貞享式、此拍ハ御傘ハ説ありて、論語の松柏と護
 と、畢竟ハ雜とあせれとも、爰ハ
 散字と結ひて、決て秋と定へ、
 男、この部の桂と、
 鶉來紅、兼雞頭時珍曰、雁
 穂子とも小雞冠と同一、其葉九月鮮紅、
 花の、故小名、兵人呼て、老少年とも、一種六月、紅
 の者あり、十様錦とまづ、○雞頭や雁のくる時、猶
 赤し、芭蕉、増山の井、雁來紅、説つ、まの、花、
 枕草紙、ふうまの、花、時珍曰、折高樹大葉、圓は
 雁の末と書といへり云、
 黄白色、實と結ぶ、青綠色、八月熟、○烘折、
 胡蘆粉、樹練粉、木淡粉、似粉、伽羅粉、山座粉、筆粉、
 田舎粉、君遷粉、樽粉、樽粉、
 以上各頭字の部、わつて、注、
 秋、加、
 粉、餅、米粉を和して、換

蒸て小兒^{コノコ}と興ふ食し **案山子** 彈鳥却 和漢三才鳥
て下痢^{ゲリ}下血^{ゲツ}と止む 僧都添水 会藝芝類

聚云古者三皇の世ハ人死して未棺^{ミツクハ}擗^ハ殯^ハ葬^ハのら
を畏^{おそ}ふ白茅^{シロヤサ}と以^{もつ}して中野^{ナカノ}に投^なぎ孝子^{コウシ}其禽獸^{シモノ}
の食^をふと視^みる小忍^{コニヒ}ひも彈^{たま}と作^{つく}以^{もつ}て守^{まも}り鳥獸^{シモノ}
の害^{ガイ}と絶^たつ按^おむる俗^{ソク}ふり案山子^{アンサンシ}今田圃^{タノ}の中^{ナカ}草^{クサ}
偶^トみりと持^もせ以^{もつ}鳥雀^{トウセツ}と防^ぼぐ備^ひ中國湯川寺^{チウクニョウケンジ}は玄賓^{ゲンビン}
僧都迹^{ソウトノ}と民間^{ミンケン}の奴^ヌふ晦^{クワイ}まとして田^タ入^イ稻^{イネ}と護^{まも}り以^{もつ}て鳥雀^{トウセツ}
と驚^{おど}ろして勢^{セウ}と今^{イマ}ふ至^{いた}て鳥雀^{トウセツ}と懼^{おそ}む芻^{ソウ}盡^{ツク}と僧^{ソウ}

都^{ミヤコ}とを續^つ古今^{コキン}山田守僧都^{サンタノモリソウト}の身^ミととあり秋^{アキ}

そてねばいふ人のぬし 玄賓^{ゲンビン} 和訓栞傳燈錄^{ワクンシヤテンドウロク}ふりふ
案山子^{アンサンシ}ありとり鹿^カふしあふべし山田^{サンタノ}のそらぐとと
るの思^{おも}ひ信野^{シンノ}少^シて節分^{セツブン}の夜^ヨいと一^{ヒト}豆^{マメ}ふらとさすを
煮^にくしとく焼^やくしの義^ギ埃^{アヒ}囊^{ニヤウ}抄^{セウ}ふ灸^{シウ}串^{クサ}と名^ナく
ととええりいづと焚^たり魑魅^{チミ}の畏^{おそ}る傳^つふる意^イをあらと

増^ま山の井^イとらづ添水^{ソヅミ}と書^かて水^{ミヅ}辺^ヘふあうけて水^{ミヅ}のちら
と添^そて音^ネと出^でる鹿^カやぐく思^{おも}ひしととらづ別^{わか}れの物^{モノ}

つる故^ゆ鳥^{トリ}の人の形^{カタ}と心得^{ココロ}て古^コ奇^キわととめると多^{おほ}
し然^{しか}れども実^まハ別^{わか}れの物^{モノ}石川^{イシカハ}丈山^{ジョウサン}覆^{フク}檜^{ヒノ}集^{シュウ}竹^{チク}笛^{フエ}尺^{シヤク}餘^ヨ

上^{かみ}短^{みぢ}く下^{した}脩^{なが}し桔^キ棹^{サウ}不^ふ野^ノ方^{カタ}て首^{カビ}と下^{した}流^{なが}小^こ矯^{けう}とる故^ゆ尾^ビ尾^ビ
石^{いし}と鼓^{つづみ}く旋^ま轉^{てん}俯^ふ仰^{おほ}我^{われ}巨^こ々の声^{こゑ}と登^{のぼ}揮^ひて運^{うん}心^{シン}院^{イン}云^い我^{われ}巨^こ
声^{こゑ}韻^{オン}九^くあらび 駒^{こま}帛^{ヒト} 躬^{こま}恒^{とこ}秘^ひ藏^{ざう}抄^{セウ}家^ケの中^{ナカ}小^こ鎌^{かま}といふ

たて菅^{かや}笠^{かさ}とききて立^たてま鹿^かの田^タとをまぬとこをれ
と鎌^{かま}帛^{ヒト}とり歌^{うた}ふ我^{われ}宿^{しゆく}のうゆめ立^たるまふあやねふ

山田^{サンタノ}ふ鹿^カ **鹿火屋** 年山細關 説々あまじ山田は猪鹿の
のかりぬ つく所は小き家と作て壘^{うす}埃^{あひ}何^{なに}

と心^{こゝろ}得^えべし或^{ある}ハ香^か火^か屋^や又^{また}置^お蚊^か火^かを字^じとりて書^かる所^{ところ}
もあふふよりてまふ人^{ひと}もあふと用^{もち}ふらす又^{また}火^か
字^じ濁^{にご}として頭^{かぶ}昭^あ飼^い屋^やの説^{せつ}迷^まふはかせ

鹿^かの異^い名^な玉^{たま}葉^は 山^{やま}とありあけせきのけむりこふ
世^よふ遠^{とほ}ざうるほとをあらる 赤^{あか}深^{ふか}家^け集^{しゆ} 朝^あ辰^{ちん}とる

をぎのちのくたてり **肩^{かた}枝^{えだ}鹿^か** 匡^{くわう}房^{ぼう}卿^{けい}寺^じかぐ山^{さん}
のいかに下^{した}ふら

秋^{あき} か

とけて肩ぬく鹿ハ妻こいふせと、曰事紀才二三復命申
 臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内媛天香久山之
 真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而今占矣占事記
 の説もよおや、神代ハ鹿の肩骨と扱てらるるハ
 クも、かの木ハ和名抄ニ云櫻桃和名波加一名延喜
 式ニ云九年中御卜料波々加木皮ハ大和国有封の社
 小仰て採てここころづら夫婦相をふとむら離はな
 ルと進らしむ、**片鶉** こころづら 伏ふ居るといふ、**駮鶉** ふら **藻**
草鷹 うさぎ 将まさこころハ馬上うまふて鷹うさぎと居
 て、うり立て鳥とりふ合するといふあり、
八月 **菅大** こんげん

臣祭

十六日 **雍州府志** 京四条の南綾の小路西洞院
 の東ふあり南北道と隔て是善公の宅

地この内北は菅神の祭あり是菅神降誕の地故
 社と建ててこころ祭る、**神社啓蒙** 或人云此所昔菅家の
 館一夜飛梅の天神といハ是之今飛梅の跡この地ハ
 存も又説小文字の宅ありて菅神をいめて辻座の地ハ
 浴の人阿米神と称も、例祭八月十六日社辺の氏子是
 と祭る、神典ニ菅童子素袍供奉社僧といふことあり

亀戸天神祭

は四日の江戸本所の本龜戸村より
 祭る所筑紫太宰府の神

休やすみも同じ寛永三丙寅年菅家の末葉大鳥居信祐
 建立も祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年ハ菅社の
 神室天國の劍といハありこの外後水尾院の宸筆安
 樂寺の瓦硯もみちの文臺 大關秀吉公の文臺と連言師
 繪等神庫ハ藏祭の日奉幣 昭也みこまんとりハ紅葉の葉 **貝割菜** まの都間
 神樂ホいり、近來正祭あり、
苜蓿 まぶさ **大和本草** 霜草莖葉節穗皆苜蓿の如くして
 小ハ宿根より春苗と生も葉ハ青白のこ筋
 多くまがアとして本末は通じ四五月穂を生じ中華の
 書ハいまこ見ぞ、莖葉の類ハカルカヤといふ、**新撰**
 嵐あざ少く岡おか辺ハ茂るわらわの上葉の露ハまのここれり、
 衣い室内大臣ハ萬葉集ハ苜蓿といふ、後世ハ一種の
 苜蓿まぶさハあらも、秋苜蓿あきまぶさといふ、**萱**といふ
 といふ和訓葉ハ雀麥うさぎといふといふ、

苜蓿

大和本草 霜草莖葉節穗皆苜蓿の如くして

萱

小ハ宿根より春苗と生も葉ハ青白のこ筋

苜蓿

大和本草 霜草莖葉節穗皆苜蓿の如くして

萱

小ハ宿根より春苗と生も葉ハ青白のこ筋

萱の軒端

和名抄 茅和名 萱和名 **大和本草** 七七
 長短一種あり、短き者とかヤといふ

萱

和名抄 茅和名 萱和名 **大和本草** 七七

御傘萱菅 萱 軒端植物よあらむ 秋よあつたまき
道理ありて 名草ハ秋の季大切なる故ハ用たり
つて 如此し 簡多し 屋根ニ菅て何十年はつらみの秋
季植物ハ用ひてし 宜しうらざる式 桂の花 木犀
ありしと 蕉門の徒はると用ふべからむ

南方草木状 江南の桂ハ九月花をひらけ 子ふ 此木犀

あり 本草綱目 菌桂 巖桂の二種あり 菌桂ハ葉枿の

葉の如かりて 尖り狭く光沢あり 三縦の文ありて 鋸齒は

其花ハ黄あり 白の蕊 巖桂ハ其葉ハ鋸齒あり 批把の

葉の如かりて 粗濁める者 俗呼て木犀 蓋草 蕪頭

といひ 木犀の花 香氣高く人として酔ひ 蓋草 曰蓋

草ハ葉竹よ似て 細く薄し 亦田小ノ荆裏の人煮く

黄色と染む 極て鮮好 和漢三才圖會 多く越前よ

て出ると 以て染家必用の物とて 按るるふ 倭の蓋草

竹の葉よ似む 芒の類 江湖大浦の田山中最も多し

老鴉瓜 玉章 〇時珍曰 王瓜一名土瓜 其根土氣

と名く 王の字何の義と云ふと云ふと瓜 鴉子よ似

て 熟るとときハ色赤し 鴉喜と云ふと食ふ故ハ俗ハ鴉

老鴉瓜と名く 三月苗と生し 其蔓鬚多し 其葉山く

して 馬の蹄の如く 六七月五出の小きき黄花とひらき

茂とあす子と結ふと 粟多くなり 熟るとときハ紅黄の

二色あり 天和本草 其実まうく 長し 玉章と云 王瓜の

実ハ文とむすふと似 籬豆 本草と考ふるふ人家

より 故小玉章といふ 籬豆 籬垣の側ハ三月種

と下す 蔓生して 延纏いて 籬と蔽ふ故ハ沿籬豆と

名く 又和俗破牆豆といふ 此豆一粒と植むハ豆ハ升と

得ると破牆とハ升より 芥菜時 時珍曰 芥數種ハ

と音近し 故このふ 芥菜時 已皆ハ九月ノ種

と下かり 月令 仲秋月 鳴雁来賓 〇時珍曰 雁の状

を 鴈 鴈小似て 亦蒼白の二色あり 今人曰くして

小なるものを以て雁と云ふ 大なるものと鳴と云ふ者

と野鴈と云ふ 雁ハ四徳あり 飛とき一序ありて 前ハ鳴て

後ハ和ふ 其禮也 寒きときハ北より南の衡陽小止る

熟きときハ南より雁門小帰る 其信也 偶と失ひて再

秋 加

ハ配ガモ其節也夜群宿して一奴巡驚ハ畫ハ蓋と
啣ハ繒繳と避く其智あり捕る者ハと養ハ媒とし
て以其類と誘ふ其一愚く南不來る時瘠瘦て食ふ
べからず北不むる時肥故よハと取へしハ白雁ハ鴻
鵠ハ海雁ハたのむの雁ハ代ハる雁ハ二季鳥ハ以上頭字の
部ハわくちて注をハ○もらほざらふハ一種あり目ハ黄

中ハて其外ハ雁の如しハ雁の書漢書前漢の
新方雁ハ頸長ハ關東ハあり漢武字ハ子卿

杜陵の人武帝の時節と持て匈奴ハ使ハを單于ハと降
さんと欲し武と幽しハ大害の中ハ置漢武ハと求じ匈奴詭

て言武死ハと常惠漢の使者ハ教ハてハ天子ハ上林
中ハ射ハて雁と得ハる足ハ小帛書ハと係く武其澤中ハ射

と是小由ハて還ハると得ハる古今秋風ハ初ハりハるを
きこもふるたの王ハととけハてハ川ハん友則曠野落

著ハ小荷ハ今ハる文雁陣本朝無題詩雁陣數行
天川雁其角微月冷虹橋道遠天晴

雁金和漢三才圖會所謂雁金ハ雁之鳴也

鳴者今昔米鳴ハと詠ハるハ自ハ雁の名ハなハか

小似ハるハ遂ハ雁金の二字と用ひて本意ハ夫ハ云

雁字山谷詩云雁字ハ一行書絳霄談林搗

汎奔句阿蘭陀の文字ハ横ハふ天ハ雁搗

鳥和漢三才圖會好ハ檀樹ハ棲ハ打ハ故俗呼ハて檀鳥

鳥の聲ハとハ又人の言ハとハすハ商家除夜河鹿雁雁

元且ハ又ハ食ハふハ以ハて借ハて取ハの義ハと祝ハふ河鹿雁雁

歳時記蛙好ハて山川ハ小ハわりハ夏ハの季ハより秋ハにハまり

て鳴ハ奇ハふハかハらハつハとのハとハよハてハかハらハつハとハ詠ハるハ俗傳

小西行ハ小奇ハありハとハふハものハ臆ハ説ハりハて考ハるハ俗傳

秋 加

ありハその声ハ鹿ハ似ハるとハ俗呼ハて河鹿ハとハ言ハふ

同書ハ正字ハ黄ハ額ハ魚ハ杜父魚ハの屬ハ水底ハふハりハて鳴魚

ありハ故ハ小此魚ハと誤ハりハて河鹿ハと称ハすハ諸國ハありハ伊豫

越ハ前越ハ後加賀ハ近江山城ハ亦ハ多ハしハその土地ハよりハして

名ハのハりハ形ハもハ声ハもハ大同ハ小異ハ石伏ハコリハ石ハ多ハ石

又川才三伏見子十ハドヨ伊山差山近江ア魚

この外も猶あり近ごろ山海名産図会へ入書し委し
論じたまはるる小畧記も青藍云々焦門の先哲のよ

るううう蛙小あつと猿蓑あやまりてききうあつと
鱒お 九月桂の宮相撲 八日 拾芥抄六條の
嵐葉 北西洞院の西カ

月八日桂の宮相撲今昔物語天曆の御時入震且より渡
り僧長秀とあんないひる元医師ふあんなりる桂の宮

の前小大ふる桂の木ありる桂の宮とを人ひるる
長秀唐の桂心ふまるとり雍州府志桂の宮一

町云々神社 十五日○神社江戸湯
第宅詩やび

の神二座神社啓蒙大己貴尊鎮座とを將門の社ハ
本殿と去ると百歩ふり○大己貴尊八人王四十五代聖

武天皇天平二年鎮座之將門の灵ハ六十一代朱雀帝天
慶三庚子年二月十四日將門滅亡とをその後怨灵とをく

祟あふ依て延久のころ一遍上人三世真教坊將門の
大を以て神田の神社ふ合せ祭る當社とすハ今

田橋の邊あり此所のヤ人芝荷村ハ今も
礼の日神輿とををり此所は留めを奉幣けり祭礼九

月十五日菟町山王と隔年ハ神輿二基引山三十六本踊

屋基太神衆ホホと小従ふこの祭の練物ハ頼光大江
山入の形状と摸して二間余の鬼神の造り臺小

のせて敷入と荷引山の外今ハ是ハ神事ハ頼光の

町内神田外神田大傳馬町濱町辺日本橋通町前後
都合三十六町ハ神幸の町ハ夜宮より棧鋪と播種

の提灯と出して甚賑へ神樂渡御の町ハ本社ハ
倉町通り飯田町より田安御門不入 上覽所前常

盤橋十軒店通り筋違御門と過て本社へ還御ハ大祇
祭式山王祭おんむうハ神事能あり今ハあハ

神主芝寄大隅守社 上難波祭 大坂博守町小
家五人巫女あり

あり祭り神三座才一稻荷倉第二祇園鳥守才三
平野仁德後三条院延久三年勸請俗小仁德天皇の祭

とのハ毎年九月廿二日神事神湯亦あり氏子あま醸と醸と
互に相贈る社説ハ仁德帝の社ハ元大江橋の東上

町の内ふあり是よりく皇居の
跡あり秀吉公の時上難波下遷を
桂川の御夜

部野の宮の別と
かむらよもた和名抄菊
かすみ草良子茂木又加波良花波

天和本草順ふ和名抄ふから
かすみ草

蔵王のうきせむいつとまくのうき草ふき一も

とわりの名残此菊は奥州新妻の里ふあり因縁無
新妻といふ物語ふあり業平作具はきくといふふ

きて秋ふ入らうく彼物語は十月十五日とあり然る
時珍曰其木文木と名づく斐然として草采は

榎故ふこきと榎いふ信州玉山懸の者と佳といふ

控ふ小羅願爾雅翼云披ハ杉小似て杉小異ハ披
美しき實ありて木小文采あり其木桐ハ似て葉は

より絶て長ト難し木北杜あり杜ハ木也ハ木
あり棗のどし其枝長くと檄攪の枝ハ枝ハ

者あり尖らざるものあり稜ふくして鼓薄し黄
色其に生ふて食ふべし

斛下りて天和本草其木層と焼を
蚊退くカヤリの木ニリの子と畧せり
櫛の實

日三四月白花と開ふ穂とふも栗の花のごとく
と結ふ大サ櫛の子の如し小苞あり霜の後苞はけ

子墜和漢三才圖會本草綱目と案を
い 雞冠木 小楓、岐あつて三角とふも霜の後

小至て葉丹し愛をへし雞冠木も亦楓の屬然
楓の花ハ白色実大りて鴨の卵のごとく雞冠木は

実と迥ふ異あり猶朝鮮の松の子大りて常ふ異あり
ガ如し雞冠木ハ數種あり高き者二三丈葉尖ハ二岐

あり蝦蟇の手の如し大低七八岐或ハ九岐又十三葉の
者ありこきと十二重といふ三四月嫩葉紅色も満山小

映む五六月青葉も復て深秋其葉黄く落ふ歲々
るものハ五月小黄花とひらく状飛蛾のごとく指頭も実

と結ふ中の子半房子のごとく和州竜田雍州高堆山
最多くこきあり秋小至て葉丹く赫耀く天下これ
と賞美を允草木秋紅葉も者多くあり蝦蟇手の

樹の葉勝るるも故ふ只紅葉と称するハ即蝦蟇手
秋

の葉 **朽紅葉**

八雲御抄 紅葉の詠をる木朽葉あり

夫木秋にばらの木の川 葉のいふらん園生の朽紅葉もさうらけり為家

の紅葉

紅葉の川水より流るる枯草は露

枯野枯草ハ冬ふれども 露とむすびてハ秋あり

よ **九月 淀祭**

神社啓蒙 伊勢向の神社ハ山城國紀伊郡淀の駅小

橋の東河中ふあり祭る所の神一座天逆向津姫尊

空基文園小云 天照大神あり 石清水社家説 八幡辻幸の縁ふりて

伊勢向と号しるは祠と一説は淀姫の社祭る所

今三座淀姫の神千観内供の天神天神以上三座傳云

千観法師肥前國佐賀郡淀姫の神とこの地ハ勸請と

淀姫の明神ハ八幡宗苗の叔母神功皇后の御妹云

紀事 淀大荒木の社祭る廿二日或ハ淀水垂淀姫大明

神の祭廿三日何事是なる也土人云淀祭 称する者

還幸の時行列と云くは跡を先へ振るるて

同じ邊と帰るあり故ハ跡を先とハ此祭といふなり

草の糸よ出 **夜寒** 夜寒夜寒秋の寒き夜

草の糸よ出 草の糸よ出 夜寒夜寒秋の寒き夜

の雜書よ出てる事と經史より尋るハ未由也とある

らど 詩經ニ皖彼牽牛或彼織女と云と説者以為

三星をあらして竇あり夏小正言七月初昏織女正

向東十月織女正向北 五雜俎 牛女の事齊諧にあり

武丁の妄言ハ成る博物志に成る様ハ乘の浪説千

歳の下ノ婦人女子傳に口實と云る事可あり文人

墨士乃習て常語とて天上の列病とて横に汚穢

と被らしむ亦怪むべきの甚しき事あり云然とも

詩哥連俳の道浪説と 薫姫 織女の異名あり異名

巧菓ハ机の上ハ火と云ふ 短冊竹賣 六日市中較の

秋 よた

葉とらふ明夜詩奇と書て二星ふ供を或短尺ふ紙
の葉と用ひて詩奇と書て今ハ民間の兒女五色の紙
と剪て短冊としるふ古奇と書てこれ葉ふ結ひ向
屋上小出すこは竹竿の五線糸ふ換るりふ昨今市中
短冊竹賣多し又近來 小町踊 還魂紙料
五色の短冊紙と書じり **七夕踊** 正保の頃

の画卷ふ七夕踊の圖と載せり其詞書云とて
七月七日ハ 中 畧乞巧奠とて人々今宵ハ七夕祭と
もなるものしるふ七夕ハツをりも小娘とら美
しく出太鼓と手毎手持り面白く踊る
るゆゑ是七夕と名づく事昔今ふ怠らむを
うや云七夕踊と別あるふゆゑを小女の人情ふ
盆とまらうゆゑ七夕よりとる故の名ふと云
問答ニ云 享保 十年七月七日七夕と祭る 中 面白く歌と
るふ大内と町と小路と友達のこへゆ踊と
たりびりあり小町とて人毎美人のやふ思ひ名
けて小町踊と名付り云○七夕踊と小町踊と
踊るは小町踊と名付り云○七夕踊と小町踊と

踊 洛北修学寺村の老僧法華の題目と 高燈籠

用捨箱昔々物語 新見 翁著小昔公死去して其年より七
月高燈籠とゆゆりゆとる七回忌とてとるゆあり
立やうハ六月晦日長と五六軒の杉丸太上三角のい
らうと結ひ杉の葉めて色四手ときつて付燈籠ハ辻
番の行燈の形ふらひとく作上りさ下を回ませ屋根
も扱てくらく女閉と臺所の間の廣ふ建て七月朔
日あり晦日まで毎夜暮六つより明六つまでとて一向
宗ふらえと他宗ハ丸くゆくのとし哀ふもゆあり
とゆり具享保十八年不記とてしるが既ふ當時在家
の高燈籠の絶ふハ明くもとゆりの頃までゆりしる
らむ下 ○猿蓑集 高燈籠

ひるハものゆと柱ゆ那 千那 **靈祭** **靈棚** **棚**
懸掛 麻柯の著枝豆枝豆根芋青蕎麥杵米
瓜 茄子此類聖天と祭る意あり秋とて青藍
云むハ在家ハ佛檀と銘アゆとちり故ふ
七月十二月二度魂棚と銘ア設け聖天とむ之祭也
秋 九

ふりまゝのふ邦宗門師改の砌我家の何宗とていふ
るありふ常ふ佛檀と設くることいふあわの四葉物語
魂祭るとい一年は二度ありのうらわきとて此月の祭と
年のとりよりいふとていふいふいふいふいふいふいふ

十二月晦日の夜のことといふ祭よ亡人の来る夜とて魂祭
ることいふ此項都ふあきこといふまのこふい猶も
このありしこと哀あきとて枕草紙のつら葉と師支の晦

日ありとていふあきとてあき人の食物もよく云○棚經
善趣寺の僧来つて牌前ふ誦經することと棚經
といふ○うの部孟蘭盆会の条よりいふこといふ

大
○棚經
善趣寺の僧来つて牌前ふ誦經することと棚經
といふ○うの部孟蘭盆会の条よりいふこといふ

文字の火
の条より出づ
鷹の埒出
和漢三才圖會
四月羽

毛と易んとする時韋縲と解き去て鳥屋の内ふ放
つ日と逐て脱落して還新毛と生も七月中旬は旧のどし
ことと片鳥屋といふ二歳毛と易ると兩鳥屋といふ三

歳と兩片鳩といふ○鷹といふやむらうこといふ
今いふこといふこといふこといふこといふこといふこと
鷹の山別
或鷹書曰鷹の山別

菓と立父母は別るといふ
子生じて菓あり其子成長るといふハ親と食ふの枝
わり父とと畏て居ハ菓より一尺杖と去て

子と養ふの菓より一尺量と呼び鷹の秤といふ
九七八月媒と以て鷹鳥と取ると呼ぶ鳥屋待といふ鷹鳥

の雛菓と離して飛翔して自食と求る時常ふ絶崖切
巖の喬樹と度る其巖窟の辺小茅と結びて居て

鷹の至ると窺て羅と掛問は張死鳥と以て媒とて
こといふ捕ふ此と何賀計といふ
鷹祭鳥
祭鳥處暑

或ハ細掛は作る是と鷹打と云
候七月
玉の川まき
天和本草 其实ハ梅娥小似
祭鳥處暑

花粧は其葉と去て其実とのこ
して多く挾む此時其实粗熟
兼三秋物龍
ア立花とこのじん七月七日

田姫
岷江入楚 竜田姫ことと按むるふ春ハ佐保山
の神より事ありふ山霞の色ふよせて春

とていふ神といふ秋ハ竜田山の神より事ありて紅
葉と詠むる故ふ秋とていふ神といふ又共ハ神の名

秋
た

玉兔

つこの部月の蟾と云ふはちつき、
いへる条は註せ、
新撰六帖、我明と

新撰六帖、我明と

とふこととぞたらまらむの月もさうらく、
衣笠内大臣〇十

七日の月、山の端づる月と、
立ゆをらひてまらぬこと

鷹の羽芒

白き魁あつて鷹の魁ふ似たり、

搏技枅

是賦枅

關東の俗こと搏技といふ酒樽と

田の色

許慎の說文曰

稻二月始めて生じ八月熟と云、
あつる時ハ七月ハ

ハ青黄半熟する時あり、故よことと田の色と云、

の庵

御傘田を守る時づり作して居る庵を
秋ふらふと後撰秋の田のうらと海の庵と云

八月

田の實の節、
侍

怙れ節

その部ハ朔の条は出づ、

端正月

昌黎月詩三秋端正月今宵

出東漢事文類聚前輩中秋の月と名づけて端正の

竹の春

竹譜竹ハ八月を以春と名づけて竹ハ八月

欲を故小

檀特花

吳響集客又曰檀特花と小春といふ、
つものあり花炬火の如し、

こととも亦芭蕉の類少や、
答て曰是亦芭蕉の別種

ありん、
和漢三才圖會高サ三四尺葉芭蕉ふ似て小く、
甚柔あつて又慧苡ふ似て大く、
甚硬うらむ、
長サ尺ふ

餘り潤と三四寸、
冬枯も春生む、
七月莖と抽ん

花と開く、
深赤色、
形穗最も愛まへ、
子と結ふ圓く

龍舌草

多識篇龍舌草今按多豆大和
本草水中小生む葉ハ車前のと

水中小花と生む花白く菱のどくわして大あり、
處々ここ

と云、
水かといひ葉枯る、
又水葵と云、
葵の葉も似

と云、
花を三出あり、
八月ふさぐ、
實ハ三角あり細く、
煙

草花

花鏡烟花一名淡把姑、
初て海外不出、
後種と漳泉小傳、
今地不隨てことあり、
未春不老

不似て葉菜より大あり、紫白の細花とひらく、**和漢三才**
高会 八九月莖の頭小朶挿せり、小白花と開く、赤
色と帯ふ畧紫苑の花に似たり、**王章** かの部王の
子と結ぶ内小細子あり、黄褐色、
の条小注を

蓼の花 蓼の穂 **和漢三才高会** 二三月繁
茂し、秋小至て穂とふす、細
花とひらく、紅白色敷品あり、花穂と
ちり実と結ぶ俗ふらと穂蓼を云、**種瓢** 九瓢の
種子と

をづまのめ、採収て是と穂の下小鉤、或は火爐の上小
鉤て水氣と去て、乾き過して褐色とふる、時種子ととり
出し蓄 **種加子** 時珍曰、茹中瓢あり、瓢の中小子
へやく、あり、諸茹老小至つて皆黄なり、

茸狩 木の子取 **尔雅** 菌ハ形蓋小似たり、木菌去菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ふるまのこ其角
大根時 **和漢三才高会** 藟服大抵八月
種と下し、彼岸小苗と出き、
よのむ

魚 時珍曰、鱗魚江湖の中小生を魚の形物と刑裂、
かの如し、故小鱗魚、魚の名あり、常小三月と以て
始て出づ、状狭くして長く、薄くして削まる木片のごとし
亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
小二の硬き鬚あり、腮の下よ長き鬚あり、冬冬との如し
腹の下小硬き角刺あり、快利の如く、腹後尾小直く
して短き鬚あり、肉中小細き刺多し **天和本**
草本草綱目 小載する鱗魚小相似て同じくらん

高き小登る きの部菊酒 九日〇歳
の条小出づ、**醍醐祭** 瀬守

治郡小野の南深雪山醍醐寺小あり、**紀事** 九月九日
醍醐天神祭能あり、又昨日夜小入て、清滝権現の社前
小於て能三番あり、まこと夜宮能とり、○神樂三奉才

一長尾天神、才二清滝権現、第三勝間明神、以上三社、
當寺緑起云、祭る所清滝権現ハ沙迦羅竜玉の才一才
一長尾天神ハ延喜帝の御願小ありて、御願寺とある

秋 た

故小勸請あり、勝間明神ハ神縁社説詳あり、系切齒
例祭九月廿三日小記を誤り、廿三日ハ同所堂取祭あり

當寺の伽藍ハ山上山下小作りて上醍醐下
醍醐といふ土人長尾天神と以て本居と崇む 宝の市

すの部住吉相撲 廿日、洛東建仁寺の門
会の条小出づ 前ふあり、今九月廿

日ここと祭る、相傳ふ建仁寺の千光國師采西帰末の
日、船中暴風の難あり、とあり、蛭子の像波濤小隨て漂

ふりのあり、采西とこと収めてここと祭る、風や波靜り
て恙なきこと知得たり、采西寺小帰ると社とあり、今夷

の言是あり、今ふ至り、西海赴く人、此社小詣て風波の
難あり、と祈る、故小旅夷と祭る、祭礼の日官川町

辺の居民、遺物造物ホと出せ、大般若 梅の異名あり、
神樂一基持餅と小従ふ、黄大般若万重

よて、花葉凡六百葉、故小大般若若六百卷、たもじ寶
よちをらと名づく、白色の者又あり、

大和木草、方土ふあり、と云ふも、と云ふも、と云ふも、

其實の大木、樅子よりや小肉と去せ、其内小肉と

實ハあり、一種クスダブと云、其葉白クスダブ似たり、最よく

桂の葉小似たり、桂葉をクスダブの葉ハとこと本より

より、凡他木ハ其葉のよち中、一條より、桂葉ハ三條の

よ、本艸也、如以、いろクスダブの葉由、桂葉と同一、

あり、白クスダブと中のよち、よちより、又枝より、處々、

クスダブの實ハ、冬熟して黒し、よち由肉と去せ、其内ハ

實より、クスダブの葉の形ハ、桂と同じ、味も桂小似て香

氣中、よちあり、白クスダブより、香あり、味辛し、木理クス

秋 れ

丸 八月

嘉祝小用ふる故、委しく、二月の部、漢
嘉支 時珍曰、錦荔枝、木名、昔、一名、類、葡萄、實、
及、其、葉、相、似、を、以、て、名、と、得、五、月、実、と、下、

苗之生之變と引葉葉卷積並ふ節節の如く下
七八月小黄花といひく玉輝枝の形の如く瓜之結ふ長
四五寸短者二三寸青色皮の上小斑痕痕及ぶ葉枝
の形の如く熟るとして黄色自ら裂け内は紅の如
て子と果心軟く味甘くして食ふべし形扁なり瓜字
如し亦斑痕あり田人言皮を以て肉及び塩醬し煮

蔬ふ无苦く滋 **連雀** 和漢三才圖會今處之
しと青氣あり

胸赤色翅黒し背白の田文あり羽尾の端黒紅其尾
くく黒し頂の上は毛冠あり眼領の四圍黒く常
林の棲むの群をまむ形葉もどして又鳥と樹中
畜ふ或は尾と枝を舞ぶがごとし界孔雀の形勢に似る
但し声好らんと比伊比伊といふ

九月例幣

月朔日より十一日小辛に伊勢例幣の諸家門前小注連
と引門外小標木と建て幣屋及び輕重服の輩門内
入るるの事とらふとんと前希といふ十日の朝幣

らせのへ毎年のことあり例幣と申し續日本紀卷終

天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使と製製とらふ言
今より以後中臣朝臣と差して他姓の人と用ふと得
ぶとと命ふらふ依て大中臣藤波祭主とてとらふ言

ふむ最上所と神 **と** **兼三秋物 爽氣** 連言 初式
祇官代ともふ

漢和の篇ふ云爽、秋のともやけともふ増韻
爽、清快ともや即ち清く快きの義蔡松年詩

爽氣深出 **袖の露** 袖の時雨ふといふ如く袖の滝
千林赤 顔涙へ袖の露は涙より限る

るる **添水** かの部宗山 **八月獻昨** せの部秋
ら香 子の糸ふ出 奠の糸

注 **蒼粟麥の花** 時珍曰蒼粟一名莠粟莠弱く翹
そ 然とて長し易し收り易し新ふ
磨て麥のこも故ふ蒼といふ莠といふ麥と名同一
うらるる立秋前後種と下し九月收り新ふ性甚暑霜
と畏る苗の高と二三尺赤莖綠葉葉東鳥掛樹の如く小
白花といひく繁密繁々然とて實と結ぶ粟とて

○増山の井小出せる波の露はふもこの露の誤也○
 月令章句 露ハ塩液ニ似テ露ト云リ結ビテ霜ト云
 紅虫ト云ル云 故ト名ク 兼三秋物 露路 露の玉
 世ハ絶テ去リ鳳仙花ト云フの部ニ在リ天和
 紅 本草 女兒鳳仙花ニ酢漿草ノ葉
 合セテ凡ト染ビ
 世ハ絶テ去リ鳳仙花ト云フの部ニ在リ天和
 紅 本草 女兒鳳仙花ニ酢漿草ノ葉
 合セテ凡ト染ビ
 世ハ絶テ去リ鳳仙花ト云フの部ニ在リ天和
 紅 本草 女兒鳳仙花ニ酢漿草ノ葉
 合セテ凡ト染ビ

○増山の井小出せる波の露はふもこの露の誤也○
 月令章句 露ハ塩液ニ似テ露ト云リ結ビテ霜ト云
 紅虫ト云ル云 故ト名ク 兼三秋物 露路 露の玉
 世ハ絶テ去リ鳳仙花ト云フの部ニ在リ天和
 紅 本草 女兒鳳仙花ニ酢漿草ノ葉
 合セテ凡ト染ビ
 世ハ絶テ去リ鳳仙花ト云フの部ニ在リ天和
 紅 本草 女兒鳳仙花ニ酢漿草ノ葉
 合セテ凡ト染ビ

羊躑の實の如し三 九月 穠我菊 穠の老る時黒色 拾遺集雜の

○天の川門に明りて舟の影東湖

公事小あらむの雲を舟の影東湖

白露しらつゆ袖そでの露つゆ上露うへつゆ、**露の身**つゆのこゝろ、露つゆの身こゝろとハ、露つゆのとき

以上頭字の部ハ注ス、**露の身**つゆのこゝろ、**露の身**つゆのこゝろとハ、露つゆのとき

曠野集くわうげしふ 句くわ露つゆの身こゝろハ泥どろのつぎ **物理論**月つきハ水みづの精せい朝あさ

説文月つきハ日の照てきこゝろ処ところより生なむこゝろ故ゆゑハ又また哉や生な魄はくといふハ當あたる時ときハ

日の蔽おほハ処ところより生なス故ゆゑハ又また哉や生な魄はくといふハ當あたる時ときハ

光ひかりハ盈み日ひハ就つきこゝろハ明あ盡は○桂けい男おとこ、さくらえ男おとこ時とき月つき

次つぎ新月しんげつ弦げん月つき三日さんじつ月つき王わう鬼き銀ぎん鬼き玄げん鬼き在あ明あ哉や生な明あ

既望きせう既き生な魄はくいさよハ哉や生な魄はく暉き素そ金きん波なみ夕ゆふ夜よ時とき

月つき夜よ夕ゆふ月つき朝あ月つき日ひ立た待まち月つき居い待まち月つき臥ふ待まち月つきくぐり

月つき廿にじゅう日じつ亥げ中ちゆう更ま待まち月つき常じょう娥わ真ま如にの月つき心こゝろの月つき胸むねの月つき

盃さきの影かげままほし、朔しやく日じつごろの月つきおまちの月つき以上各

頭かぶ字じの部ぶハ **月の霜**、**月の雪** 杜甫仲秋詩云 満月飛明鏡

帰心折かへこころを太たい刀とう轉ま蓬ほう行かう地ち遠とほ攀か桂けい仰あや天てん高たか水みづ路ぢ疑うたが **月**

霜しも雪ゆき林りん棟どう見み羽う毛もう此こゝろ時とき瞻あ平へい鬼き直ちやく欲よく數かず秋あき高たか堂どう

の桂けいの花はな紅べに葉は 桂男西陽雜俎 月中ハ桂あり、

常じょう不ふとと研けん木もく削せうハ木もく連れんひ合あと其人そのひと煙えんハ名な石いし削せう

ハ雲うん山さん抄せう月つきの桂けいハ光ひかりとりの古今ここん久く々々の月つきハ桂けいと

の劍 月の都

三日月の状と刀劍の形ふありとあり、
 羅公遠傳云中秋の夜時ふ玄宗宮中て月と語りて
 遠奏して曰陛下臣不從ハ月中ハ遊ハルヤと云
 と取空ふ向ハ舞ハ化して大橋と云其色銀の如し
 小請し向く登る約きふ行ハ数十里精光目ハ奪ハ
 冥気人と侵も遂ハ大城闕ハ至ふ公遠曰此月宮也
 女教百皆素練霓裳して唐庭ハ舞ハ帝問て曰此
 何の曲と曰霓裳羽衣の曲と玄宗密ハ其言
 調と記して回ハ顧ハ其橋未ハ随ハ滅也
 月の

蟾月の兔

玉兔 五經通義 月中ハ兔と蟾とあり
 と並ハ明ハ陰陽ハ係ルハ〇杜甫詩云搗藥兔長生
 の白居易詩云照地幾許ハ斷腸金蟾玉兔遠不
 知の蟾ハ月中三足の月の蝕 天經或問曰星月皆
 蛙と云と玉蟾と云 日の光と借日ハ月
 天の上ハあり月ハ日天の下ハあり朔日月行と日天

如ハ然ハ也定ハ常と失ハズハ人其光と云故ハ
 ここと日蝕とハ月蝕ハ朔より望月ハ至ハ一向ハ
 度りて日月望ハ中間ハ正對もと云地球障隔も
 月地影の上ハあり日地球の下ハあり日光
 ここと蟾と云故ハ月其光と云と月食云
 拾遺記 月ハ男月讀月夜見皆月の名
 日本紀ハ月ハ男神故ハ男と云
 月讀

男

出潮

性理大全 余襄公安道云潮の漲退ハ海ハ
 増減と云ハあり蓋月の臨ハ則水柱ハ
 ここと小隨ハ日月ハ右ハ轉リ天ハ左ハ轉ル一日一周ハ
 西極ハ臨ハ故ハ月卯酉ハ臨ハと云ハ水東西ハ漲ル
 月子午ハ臨ハと云ハ潮南北ハ平ハと云ハ
 彼竭ハ此盈ハて性秉絶也皆月ハ繫ル
 夜ハ花の春と云ハ
 植物ハあるハ同じ
 事ハ居ハ
 所あり 月とあり
 御傘人倫ハあり月
 月

月の宿

御傘 露水ありハ結
 月の宿
 秋

の友 師傘人倫之但し句体ふ 明日頃の月 つき

源氏浮舟の巻 ついでに の夕月夜 三 炭俵集 細

とついでに月 ついでに の宵の月 ついでに 利生 ついでに の月 ついでに の夕月夜 三 炭俵集 細

月 ついでに の夕月夜 三 炭俵集 細

女蘿 は 是松の上 ふ 浮蔓 ま の地錦 大和本草 葉ハ夜

紋 ふ 付る ふ 似て 冬 月 も 葉 ち ち と 皆 本 草 ふ の

とし 和 俗 壁 生 草 の 秋 紅 の 又 常 の ツ 夕 月 似

と り 冬 の 葉 の 和 漢 三 才 面 金 鳥 菟 毒 入 子 細 小

葉 長 間 ふ 多 し 藤 柔 間 て 披 あり 枝 葉 の 葉

の と 故 ふ 鳥 菟 毒 と 名 の 七 月 菖 と 結 ひ 葉 と 葉

青 白 色 の 花 の 水 と 粟 の 色 の 黄 色 の 出 産 と 結 ひ 龍 葵

の子 の 如 し 生 き 青 く 熟 ま じ に 紫 心 内 小 細 子 あり 云 云

是 大 和 本 草 の 入 夏 葉 も 秋 に 至 て 葉 深 紅 葉 也 し

甘藷 和漢三才圖會 瓜 瓜 黃 獨 の 葉 似 て 畧 小 其

根 の 状 瓜 似 て 似 て 肥 り 大 く 攪 漉 者 の 如 し 故

小 名 鎮 江 府 志 所 謂 佛 堂 手 置 者 と 也 と あり

粒 芋 其 葉 紫 の 理 あり 子 こ 白 粉 淡 味 以

根 曝 乾 せ 或 は 糸 小 繫 て 晒 し 乾 す 初 菖 麥 穂

稻 藁 と 用 て 包 宿 して よ く 霜 と 生 む 豫 州 西 条 の 産

甘 美 備 州 小 次 濃 州 及 び 妻 梨 具 さ 上

尾 州 の 産 長 さ 三 四 寸 を 有 り 軒 の 上

八月 の 綵 雀 名 の 部 繪 行 器 敦 賀 祭

氣 比 大 明 神 ハ 越 前 敦 賀 郡 不 あり 祭 神 仲 哀 天 皇 瓦 土

記 氣 比 の 神 宮 八 宇 佐 同 体 ハ 八 幡 應 神 天 皇 の 垂 跡 氣

比 ハ 仲 哀 天 皇 の 鎮 座 あり 例 祭 八 月 十 日 ○ 今 月 二 日 よ

秋

ま三日神事四日と後宴と称し町々の氏子東番西番と
さし引山と出し地車おて町中を引廻る山の上の一丈
むろりの松と四方錦繡の幔幕水引ホ洛の祇園祭の
山の如く上は武者人形を飾る山の敷或は五ツ或は六ツ祭礼
當日の山車を出し天神の森と
鶴が岡八幡祭
の所御旅所にて神輿遊行

相州鎌倉ふわり一名ハ雲井ヶ峯上の宮三座中ハ應神東
ハ神功西ハ妃大神神下の宮四座仁徳天皇東ハ文礼
宇礼の二神西ハ妹比乎後冷泉市の御宇伊豫守源頼
義朝臣安部貞任と依時丹祈の旨ゆりて康平六年ハ
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請を
永保元年二月成就義家朝臣修覆と加ふ治承四年十月
右大将頼朝卿小林の卿お迂りまふまふ今ハ鶴が岡あり
毎年八月十五日放生会並に祭礼奉幣中流騎馬角力ホ有

司召

教隆卿記司召ハ秋の除目あり京官除目と号
先春の除目ハ縣召と号を各拜任の輩と号

と召春ハ大政官の應秋ハ外記の廳不於てと号と召卿
司召と称しハ司召定考同儀と号と号ハ備この部定考

月見

名月今宵の月夕の月芋名月
望の月十五夜三五の夜月華

事文類聚

歐陽修既月詩序云月之為詭冬則繁

霜大寒夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱
害詭秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十
五之於夜又月之中誓於天道寒暑均取月數則
蟾兔田况埃壙不流大空悠悠蟬蛸徘徊博華上
浮昇東林入西林肌骨與之踈冷神氣與之清冷
○名月湖東問答去采云三五十五夜の月をて名月と

りてそのうちいづかの月をちて名月といふ故あるとを
きく然とも今日名月の詩哥と作りしふあまら故
實に限るべし尤故實ふらふ佳あまら文明の字
と用るとハ和漢ともふ三五の清光と賞し来る故不明
と名と通ひるをとりて通用とす○今宵の月今
日の月以上十五夜の月不限てりてこととを且多ふ今
宵と賞まるとる句中ふららざんばとくのそは續捧養
ふららあまらむいさうひやせん々々の月智日月○芋名月
御湯殿記名月御祝三方ふ芋をくり高盛と歳時

拾遺 浪華の俗十五夜と芋名月といひ十三夜と粟名月といふの三五の夜、白樂天詩三五夜中新月色○月華五雜俎人々の八月望月華あり或いは夜半或いは微雨後或いは八月のころからと、秋後の望よりふこころあり或はつゝその五米鮮明旁照數十丈金線の如きもの百餘道或は但紅雲をよと開き繞るのこ、臨川吳比部搗蒜のりし時一度をよと見るその景象鮮妍千態、**月草** 露

草

時珍曰鴨跖草花と碧焯花といふ三四月苗を生じ莖葉ありて葉竹に似たり嫩き時食へば四五月花とひらく蛾の形の如し兩葉翅のごとく碧色愛をこく巧匠其花と採り汁と取て畫色と作と青碧芥くは蟹の如し、**倭名抄**鴨跖草 和名都岐又佐 **仙覺抄**鴨跖草月草と称す月草ハ露草く万の花ハ朝日影ふをを咲と此花ハ月影ふ咲けハ月 **和漢三才圖會** **月夜草** 大毒の草といふ 土中より生ず **格物總論**燕春社小来り秋 **人並** **燕歸** つとめ久 **和漢三才圖會**百舌反舌鶺鴒馬魚俗ニ云真豆久見

狀鶺鴒のどくして灰黒色京師除夜毎これをもて食ふと祝

九月 津村祭

例とす 坂津村にあり祭神鎌倉權五郎景政が靈といふ **揚陽**

郡昔津村何某専ら武勇と勵み諸國と巡行して軍術奥旨と極む相模の國に至りて一夕景政の社小詣て神殿に通夜を時小神渠武勇と感下託して云撰津の國難波の勝地小祝ひ祭を我將小汝と擁護せん答云何と以て證とせむ曰枕上小神幣ありん明且こめてこまははくして神幣わりみづのりこまを負ひ津村小歸りて最祠と造り神幣と納てこまと祭る卿昊の宮これ元祿のころ卿昊の大明神と贈号あり毎年九月二十七日神祭神湯の式あり津村の土人本居神と

椿の實

和漢三才圖會海石榴の實山無花果

油と取但千瓣の者ハ實と結まを **露時雨** **露路**

秋 つね

霜 露寒

古今こきんと云ふらひらふこと申せしむるの
木の下露ハ雨ふまざる暮秋の露
のこゝろあるとつ由時雨と入露霜
露寒露の気の凝こんと云ふべし

ね 七月願ねい

の糸

公事根源こうじげんと云ふことより事た
らひり七夕祭とつふあり香花と云ふ供具

と云ふて庭土ふよと云ふことより一色の糸
と云ふて一事と祈るふ三年のちみ心叶ふと云ふ此ゆ
ふ乞巧と申す朗詠ろうぎやう憶得少年おぼえとくせうねん
念佛踊ねぶつどり洛北らくほく

長乞巧竹竿頭上願ながぎやうたけざなづのうへにねがふ糸多いとた白居易

兼三秋物糸

村一乘寺村念仏踊あり念仏
と唱へと云ふことより故ふ此秋あり

まら月

新六帖しんろくてふ秋の夜のいこりねまら月うけふ
身と吹とむを庭の松瓜 衣裳内大臣いさやううちだいじんハ

重垣ちゆうげんやまら月十九日の

八月 藤原旅草ふじわらたびくさ

月一説ふ子待つきひと廿日の月

和漢三才品会わくわんさんさいひんかい俗云鼠耳よくいねみみ朽木及び老樹の根上くちぎ及びらうじゆのねじやう
生と九月盛不出なまといふつきもたぬ根座と云ふ數十載生あせうむじ織オリ四

外灰白色凡て灰白色ある者と呼て鼠色と云ふ此物
浅鼠色あり
故ふ鼠耳ねみみ称なづ

な 七月七日御節供

日本紀持統天皇五年七月七日公卿と宴し朝服と賜

紀事きじ今日武家並地下の良賤各自帷子と着慶と
修しゆ家々索さう類るいと
契けい又互また相贈あひあづかる

七箇池ななつたに 事林廣記じりんくわうき 戚せき

夫人傳云高祖

漢宮七夕ふ百子の池ふ鴨あひ五緯と以て相羈あひと云ふこと
相憐愛あひあはれといふ七箇の池とハ星と祭るふ七ツのたらし

小水と入て鏡とつけてはりの影と云ふことより百箇の池

ハ天の川ともいふかて姫とハ棚機たなごりといふ又百のこらふ小
水と云ふことより
刀豆たうとう 時珍曰ときちんいふ莢の形と以て名と

と云ふことより
命いのちをいふ案あんひらふ段成式酉

陽雜俎やうざくふ云泉浪不挾いづみなみはなはら豆あり莢横えはよこふ斜しやふて人の劔

と挾はさめが如し即此豆あり三月種と下を蔓生つるせいし引

て一二丈葉豆の葉の如くして稍長大五六片葉

花とひらぐ蛾の形のごとく莢と結ぶ長き者尺ふ近し

秋 七

微阜夷小似扁して 栗の實 時珍曰按さくらんぼ 陸佃埤雅云大栗

と栗ののひふ小栗とと藤とのふ天和本草夏芽と生故

ふあつめとのへ○花の形春のふの部栗の花とつる

兼三秋物 梨子

時珍曰梨木樹の高三四尺大りる栗光

賦あり細き葉のり二月白花と開く雪の如し天殺

紅稚子梨 觀音寺梨 妻梨 松尾梨 水梨 田梨 空閑

梨 鹿の梨 小の浦梨 山梨 木の種 鳴子 鳴竿

類多し各頭字の部ふのちて注せ

躬順抄 棹の先小鳴子とつけて片山里小栗といふもの

と作す猿と追ふし○秋の田畑小も鳥獸と驚は具こ

八月 長き夜

夜の短き至りハ夏至ハ過ぎハ夜の

秋の夜と以て長夜とも所以ハ秋分ハ昼夜等ハ初て

夜の長きとハゆハ夏の短夜ハ對ハて秋と長夜となるハ

名の木散 産文曰按さくらんぼ楓櫃柞木のここの

千梅も此事如何 滑煤莖 和漢三才圖會楓櫃の樹

のようハあり 和漢三才圖會九九月中拔大根

むりハ小ハある者三四歩ハ小ハ叢生ハ淺褐色ハ帶ハ内刻あり

甚滑其莖煤黑色奈女ハ滑ハ須ハ々ハ煤色あり木ハ莖

の上 中稲 和漢三才圖會九九月中拔大根

畝会 八月小種と下し彼岸の中ハ苗ハと生ハえハ稍長ハ

種蒔 不及 中汲酒 九月 鳴瀧

祭 福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北鳴瀧

秋 鳴瀧川の辺ハふハと封ハぎハ西朱雀ハりハ西洞院ハ至り

福王子祭九月二十八日神楽一基餅五本御室の御所の庭ふ入云云○福王子の宮祭る所斑子皇后の皇后八瓊敷帝の孫女ありて吏部尚書仲野親王の女光孝帝立て皇后とある宇多帝と生れ此辺の地主神と崇め奉り仁和寺の鎮守とす滑誓雜談俗小五番洗ひとりん是一年中の諸社の祭祀の終つて又當月の外小神祭ちき故に毛吹草小鳴滝祭廿八日記に近來の俳書外小福王子祭と並へ載るり同社の祭と謬て再び出外ウラ和漢三才圖會和漢三才圖會倭名奈良俗小古奈良樹の高と大橘橘花實花實檨檨の輩のどく秋月紅葉とす時人こまごこ賞と大和本草大和本草檨と大奈良といふ葉栗の如し秋冬枯て落む四五月份花ひらく栗の花ふ似たり實は楢のこまごこ大に其苞半つひ又小楢小木あり材木とまへこまごこ實の苞あり半とつひこまごこ即團栗とす南あえ天の實天の實換領曰南燭株高三五尺葉苦棟のこまごこあ人家多く庭除の間小植俗小南天燭あとりの夏のふの部南天の茶あ

七月蘭

宗奭曰葉麥門冬のどくして潤し且細く長二三尺四時常小青し花黄綠色中間瓣上小此の點あり春芳しき者と春蘭とを色深し秋芳しき者と秋蘭とを色淡し開く時満室尽く香し他花と又別し山谷曰一幹一花ありて香餘りつらものを蘭とす幹數花ありて香足るものを蕙とす大和本草是世俗小花と玩賞する蘭も真蘭ありむ今この蘭ハ本草小これと出さむ蘭草集解正誤小載也

七月迎へ火

送り火 七月十三日黄氏日あ 都鄙といふ聖霊と迎へ

の義あり此時門前ふかひて必麻柯と焚てこまご迎へ火とり十六日又こまごこと行ふこまごこと送り火といふ報恩經七月十四日卯時来り次の日十六日午時あ五雜俎蘭人最中元と重む家々猪胎具衣の具と設け先人の号位と列ね祭てこまご燃く女家則父母の冠服袍笏の類と具一皆紙ふ為る者こまご籠るふ紗こ以をこれと紗箱といふ父母の家へ送る女死をハ塔亦代つて送る蒲中ふ至るとこまごハ則清晨陣設らると甚

嚴げん子孫冠服と具し揖讓盤折いひつるして神と導いづる迎鐘むかひかね

き以入る祭畢まつりおひらけて復送またかへりてこゝと出いる部六道ぶたう **虫送** むしぞうり 紀事きじ年とし依よて田蝗のり害がむと送かへる

黍あはの条じょうよ出いる **木槿** ききん 時珍ときちん曰い此花朝あさ開ひらき 暮ゆふ落おち故ゆゑ小日こひ及およぶ名

是民間あまのの詞ことばの部 **室の早はやを** むろ 古今ここん六帖むくしやく 津つの國くにの

此こゝの夫木つまき集あはらぎの雨あめの室むろの早はやをせりて今いま紀伊きい 國くに小牟婁こまろ郡ぐんあまを夫木つまきのこゝふをさるべしと年婁ねろ 郡ぐんの早はやをせりて古ふる説いふもくもいふはこゝを杜撰ずせん

兼三秋物虫 あまの **虫籠** むしろう **雨雅** あめみや 足あしある虫むし

雍州府志おんしゅうふし下賀茂げがもの社司しゃしの婦人めづ松重まつしげ鈴虫すずむしを養やしなふ籠かご

と作る其式しき織細竹おほこと剣つるぎと篋かぶつと造つくる内うちふつの小筒こつつを安やす き土つちと盛もて苔こけと敷しきき露草つゆぐさ少すくしむと種くさは俗よこ所ところ謂いふ

露草つゆぐさ鴨跖草あひぢくぐさより紫白むらさきしろの糸いとを以もつて藤花ふじはなの形かたちを作り 籠かごの上うへより下した垂たる其躰からだ觀みるは堪たへず秋あき小至こして虫むしを 入いる下した小榻こた或あるハ簾外れんがい小掛こかけ、蚤ひららせと見みる **虫合** むしあひ

虫むしの声こゑのよありと **胸むねの西務さいむ** むね 思おもひの暗くらむ **胸むねの月つき** むね 合あははせて遊あそぶことの **八月はちがつ紫むらさき糸いと吐はく** むね

萩はぎの葉はの胸むねの月つき胸むねのうちの曇くもらはて 清きよきまるべし猶なほ深意ふかも侍まつるや **花はなの部ぶ小出こで、** **掠り草くわくぐさ** はな 和漢わくわん三才さんさい面会めんかい掠り樹じゆ小律せうりつ故ゆゑ俗よこ

花はな紫むらさきとして **掠り鳥りうてう** はな 呼よびて掠り鳥りうてうとの人ひと形かたち小鳩せうこの如ごとく一ひと項かた白しろく

背せ灰はい黒くろ色いろ背せの下した黒くろ白しろ眉まゆ淡たん黄わう額がく以下いげ順じゆん至し て俱とも小こ白しろ翻くわんの上うへ灰はい黒くろ色いろの斑まだらあり翅はねの本もと微こ白しろ羽う黒くろ

白交化ハ嘴黄色鼻の辺微黒と帶脚脛黄との声鶴
小似て喧々好んで群とままと又小椋鳥あり状相似一小

九月撰虫

公事根源是ハあふちふ式わら事わ
あは殿上の道達とて殿上人とも遊ハ

て嵯峨野おくひひいて、木棠子

雜恭曰棠葉此
樹葉木槿似て

薄し細き花黄ふと槐小似て稍長大子殼酸漿ふ

似て其中小実あり熟せる莢豆の如く田く黒くく
堅硬し数珠とまるふ堪くる者是あり、六月 椋の

花収むへし南人以て黄と染甚と鮮明あり

實

時珍曰無患子樹甚廣大枝葉多椿の如く特ふ
其葉對生とて五六月白花と開き実と結ぶ大と

彈丸の如く状銀杏及び苦楝子の如く生ハ青く熟
まるとハ黄老るときと文敬あり黄むるときハ油燥の

形の如く中畧実中一の核 殼と去て仁とまる者
堅く黒じて正珠の也 剝栗 槲栗の類あり、

七月 烏鵲の橋

孟蘭盆

會

日本紀齊明天皇三年七月始て孟蘭盆と設け同
五年初して孟蘭盆會と諸國小下し講せしむ釈

氏要覽

孟蘭盆ハ是釈氏の孝と述恩と報い苦と救

ふの要と人目蓮の母とまらふと以て始とす梵語ハ孟蘭
此ハ倒懸とりの盆ハ此方の器之事文類聚孟蘭盆経三

云目蓮比丘の母の餓餓中小生むるを見て即鉢と以て
飯と盛り世てその母不餓を食いまご口入らば化し

火炭とある終不食ふとと得て目蓮大ふ叫びて馳還り
佛小白す佛の曰汝が母罪重し汝一人の力いふとまらふ所

不あは當ふ十方衆僧の威神力とりとむて七月十五日
不至り當ふ七代の父母現在の父母厄難の中不あはかの為

小百味五菓と具へて以て盆中小着て十方の大徳檀越
をへし仏衆僧ふ勅して皆施主のくめふ七代の父母と足願

し禅定の意と行りありて後食と受まらふと目
蓮の母一切餓餓の苦と脱とることを得り目蓮仏小白を

永く来世の仏弟子孝順と行ふ者又孟蘭盆と奉し
まらふること得せむへし可あらんや仏言く大善し

故の後代の人これ小因て廣く華飾とあるを乃木と刻
秋

之竹と割鉛錫剪か糸花果のうこん 鬱金の花 時珍曰鬱金二種あり形どよし工巧の妙と極るに至る

鬱金香是花と用ふ根と用ざる者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のどし外黄内赤く人以水浸し色と染び

又微香氣あり又曰四月の始り苗と生て薑黄ふ似く花白く質紅あり未秋小莖心と出して實ふし嶺南の

者ふハ音あり小豆 馬追 とりの其声 スウイといふが

ふ似て噉ふふ堪 ごころしどふ似て小あり色純青し尻小剣あり又ふ

きとあり雌雄の異あり中元の時夜盛ふ鳴其響音紡車と捲がごとし 関東 兼三秋物 上露 嘉元御百

の俗言ふ馬追といふ よく野をらの草の上露は落て 鶉 和漢三才圖會按

下葉ふまことむきむきなり 頓寛 むら小處々の原野

小多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れとりの黄赤小白斑の彪あり珍き彪のごときハ甚これと賞まは其声知地快といふがごとし數回あり嘩々快と上

とと毎小早且日午々暮小鳴凡春二三月始て鳴也 種小至て声を止む六月又更小声を從し中秋小至て

声を止む人是と養ふ其雌ハ小く足卑く轉らざる呼て阿以布といふハ片鶉駟鶉 鶉鷹鳥 鶉と取る 鶉

各頭字の部ハやうちと註を 衣 荀子曰子夏之夜懸結とて鶉のとりし 御今

生類ハ二句去しハ一説ハ衣の裾の 鶉の床 御今

破きて鶉の毛ふ似るといふあり 新式と

只侘人の短き着物といふ然とと秋の季りらゆゑ 此道理とて簡なるふ余の鳥ととりてさら小空と翔

らと晝も草のうち小のこりふあり此鳥よりうらまき と床とての夜分小つらむと定るといへうらま 鰻

和漢三才圖會鰻鱺此物冬春ハ泥穴小蟄し五 月小至て遊ぎ出此時味勝て子と生を織く

江州勢田城州宇治名と得たり 紀事 秋月鰻鱺流 小従ひて下る是と落鰻鱺といふ築を以てこれと捕

る小流小従て築の中小落入故小捕へ易くして魚店小 秋

多く元 **八月宇佐宮祭** 十五日(豊前守佐 郡築紫ふ)

り、欽明天皇三十年豊前國既の事菱形の池の 上の氏家の兒小孫を自我、具第十六主誓田天皇 廣愷八幡、我を護國天驗威身、自在王菩薩と名、 迹之諸別小神明を垂る、今頭小此地小在まふ、もと元 を奏を勅しと祠とらふ、方小八色の幡と云、按託 宣し八幡と号、社説不當社祓宜奏と云、天神の 託小宣く我、天量劫よりこのこ、三有、化生して善 行方便を修、諸の衆生と濟度と我名を、自在王弁 くとせ、帝、獻聞ありてことと許し、まふ、**事根**

源八幡、垂跡の号、後、豊前國宇佐小鎮、まひ、が 聖武天皇東大寺建立の後、巡礼、まふ、と、託宣 あり、依て彼寺小勸請申さ、まふ、也、勅使、まひ、猶 宇佐小恭まふ、宇佐宮祭、まひ、**宇治花園** 八勅會、放生會、亦、此地と始とまふ、

山城凡土記 鬼道とい、輕島明の宮の御宇天皇の御 子、宇道の、推郎子、同原の、日行の、宮と、まひ、**宮座**

三除斎云、鬼道の推郎子、崩御の心と、新初、撰、出、まひ、 人のなると、露、まふ、世と、宇治山の、秋の、花園、まひ、と、 りと思ふ、宇治の、花園、八桐原の、日行の、宮の、花園、まひ、故 小慈鎮和尚と、推郎子、崩御の、ころと、まひ、まふ、手、梅 春耕と、まひ、頼通卿の、花園と、記せ、まひ、推郎子の、崩御の ころと、詠る、哥、小臣下の、花園と、まひ、合せて、詠る、例、まひ、 し、殊、更、慈鎮、八宇治の、関白、頼通、公より、五代、後法性 寺、兼実、公の子、まひ、その、先祖、まひ、**薄紅葉**、薄色、の、 花園と、まひ、まひ、まひ、

梅、**和漢三才圖會**、梅、嫌、木、未詳、葉、明、彩、り、 微、小、鋸、齒、あり、野、梅、の、葉、小、似、て、小、冬 凋、と、春、芽、と、生、ま、五、月、小、白、花、と、開、く、畧、南、天、の、花、の、子、 と、結、ぶ、初、青、色、十、月、葉、落、て、子、紅、小、熟、を、枝、幹、亦、添、り、 多く、美、一、種、白、き、者、あり、異、と、まひ、**漆の花**、漆、樹、高、く、 漆、耐、向、く、 二三、文、餘、皮、白、し、葉、椿、小、似、て、花、と、槐、小、似、て、まひ、の、 子、八、午、李、子、小、似、て、木、心、黄、く、六、七、月、刻、て、滋、汁、と、取、

茴香の實

和漢三才圖會倭名久礼乃本綱茴香

宿根より深冬小苗と生し夏とあそ

高三四尺肥く茎葉糸の如し五六月花開く蛇状の花のどくどく色黄實と結ぶ大と麥粒の如し輕くして細き稜あり俗呼て大茴香と今惟寧夏より

出る者と以て第一と名他處より出る小き者これを小茴香といふ按むるふ懷香と大茴香とすし雖今唯

大茴香と稱る者八角茴香本朝未小茴香と稱る者即懷香和多くと種て用ふ高三四尺

肥く莖粉白色細き葉淺緑糸の如く柔靱夏花とひらく淡黄色子と結ぶ形粒の麥に似て小く筋稜あり

中の子は皮と同色なり飛散る処小苗を生

鶉艸

一切の國史草史和名抄亦此名

師小尋遠侍る小粟の異名海雁天和本草海雁在其大者常の

雁小比もとい微小あり色灰色の如く味及び足黒し其頭小眼の如く白色なり翅短く有

九月

太秦の牛祭

十日紀事山城國太秦の廣隆

寺常盤村の南山の内村西

北より桂の宮院内小伽藍神あり大辟の神社と号を祭る所の神秦の始皇帝あり元亨釈書聖德太子九

つの伽藍と造る四天寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺廣隆寺池後寺葛城寺日向寺紀事上宮王

院の庭において牛祭と修む寺僧各集會を相傳ふ慈覺大師帰朝の日順風と摩多羅神祈る飯山の後

此神と飯山の麓に勧請を赤山大秦もまた此社あり故小今宵寺中の神事も多推仲と祭る者寺中

の行者紙衣と着牛に乗せて上宮王院の前に出祭文と讀誦を具悉く懺悔の詞ありていふくハ寺僧より

者としてこと修せしむ法令畢つて門前小角力あり寺説ふこの會ハ大念仏會と稱す十日の

曉開闢十三日の曉に至ての結願也下巫川橘大

本章温州橘其葉蜜橘に似て薄く漆掻漆樹の注小其葉肥蜜橘に似たり大とも亦同八月の

秋うゐの

部漆の花の条ふりえり、**漆**の木の枝梢迄きしん、
小悉こく、鋸のこぎりと以て挽目ひきめと附、其挽目より脂あぶらと奪と、是則すなはち
生漆汁きりし、奥羽及ひ下野和州なご、なご、中国ちゆうごくと所々あり、
其脂あぶらと撥取はたきと諸國皆みな六七月ろくしちがつとて、九月くわがつふ出せる、
裏枯 うらぐれ **御傘** ごさん 草葉くさばの外そと色いろづきこころる事こと、
とむくせと、蘭野邊らんよへ、原庭はらにわといふ文字と入

る、植物しょくぶつふ二句ふたご、草くさの名草ななぐさの字あざ、はら植物しょくぶつふ三句さんご、
連つらふ裏枯うらぐれ過すて秋草あきぐさの句ご、はら字あざもやせざらん
て非あらふ今いま一有ひとへし、云い、青藍せいらん云い木の梢えだの枯かるも、
枯かとらうる者ものあはれ、御傘ごさんの文体ぶんたいも草くさふ限かぎれ

る、**梅紅葉** うめもみぢ 梅うめの木きの葉はの
紅べに葉はせあり、**うぢを寒** うぢをさむ 秋あきの
寒さむさ

る、**の** の **七月** しちがつ 残のこる蚊かみ、残のこる虫むし

の の **七月** しちがつ 残のこる蚊かみ、残のこる虫むし

残のこる蠅はら はら **貞享式** しんかうしき 残のこるといふ字あざ、其季そのきより此季このきふ
残のこる、はら道みち理りあり、はら畧りやく壁へき言ごんを

残のこる、はら重陽じゆうやうふ残のこる、はら残のこる虫むしハ何なにふ残のこるべきや、はら残のこるの
字あざハ終はらて其季そのきの次つぎふ取とり、此論このろんと残のこるの字あざの例れいと

志しふも、はら六月ろくがつの部ぶふ出でし、はら通俗とくふく志しハ推おし派はいの

書しようして、蕉門せうもんの式しきふ、**残暑** ぜんしょ はら秋暑あきしょ はら山谷やんがく詩し西せい

も、故ゆゑふ今いま改かへて秋あき季きも、**後の藪入** あとのやぶいり はら春はるの部ぶ

残暑ぜんしょ推おし不去か、はら梢えだまで来て、**八月** はちがつ はら注しゆ後ごの

空くう断たらむとも、秋あき季きふ連つららむ、秋あきの部ぶ、**八月** はちがつ はら注しゆ後ごの

句ごと秋あき季きの、はら後ごの字あざふ及およぶ、**八月** はちがつ はら注しゆ後ごの

野の口くち念佛ねんぶつ はら十五日じふごにち 播州はろしう加古郡かこぐん教信寺けうしんじあり、
と野の口くち念佛ねんぶつといふ、清せい和わ天てん自じまの

御宇ごう、教信けうしんといふ者ものあり、姓氏せいし詳しやうあり、或あるハ、はら南なん都と因いん

福寺ふくじの住僧ぢゆうそう永西坊えいせいぼうの才さい子しあり、はら加古かこの駅舎えきやの、
草庵くさあんと結び、常じやうふ西せいふ向むかひて、称なづ名な念佛ねんぶつと、性じやうに愛あいか

て旅人りょじんの荷かを助たすけ、はら救すくふ、貞觀しんくわん八年はちねん八月はちがつ十五日じふごにち元稹げんぢんの
の卿けいふかいて、盗賊たうさくの、はら首くびハ教信けうしんの庵あん、
贈くわる、骸むしやうハ其地そのちふ葬まうる、毎年まいねん八月はちがつ十五日じふごにち僧徒そうだ多く、
教信寺けうしんじふ集あつまり、はら仙事せんじ念佛ねんぶつと、はら教書けうしよの畧りやくふ云い揚切やうせつ勝
尾寺おしふ僧そうあり、はら勝如しやうにょと名なく、八月はちがつ望もちの夜よ、はら僧そう来きりて

門と敲く即迎へ入る客僧の吾ハ播州加古の教信
念仏の功力ふよりて今宵極樂の往生を尊僧ハ必
聖年の今宵往生をきこふといひて去る時ハのち
空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せり

比彼岸 いがん 春秋の彼岸ハ昼夜等分りて長短なし仏道
ハ中道と崇ふこの時節まとも中道の辰故

仏事と修も提謂經再浄土三昧經ハ王子よ善と修ま
るこえりハ王子ハ彼岸小わらハ王子ハ立春春分

立夏夏至立秋秋分立冬冬至是也天神の諸神陰陽
交代する時この日梵天帝釈鎮臣三十二人司命司録聞

魔大王ハ王使者悉く出て四方と巡り見人民の善惡を
校へ録せり故ハ善事と修まべき

善道寺大師觀
經叙念仏して西方往生の願行とまよふ冬夏の両時と

取も春秋の二節ととも仲春月仲秋月ハ正東より
日出て真西に没る弥陀仏の因真西日の没所ふあは

故ハ弥陀の在所と衆生ハ指示して往生とすべき
のち

後の出替 ごうり 紀事雲嶠類要云秦の人本家輝を
得て一子を生じ事ハ思て隣家

小興ハ鄰家ハ富貴家ハ本家貧し後二月二日を以て
取帰し後復本家富隣マ貧し和俗二月二日之家僕の

交代の節とまると元此の野分 月合仲秋月音
本く後二月二日八月二日

風也倭名抄暴風漢の野山の色 御今 秋ハ植物ハ
語抄云 和ハ夜知又乃 和ハ夜知又乃 野山の色

二句ハ中畧又枯野も色の字さへ 野菊 野原ハ自然
ハ秋あり枯野ともりのハ冬あり

と生むる菊と云く花葉ともハ菊ハ似て小ハ褐紫の
花多し稀ハ黄花のりとも是上古より本邦ハ菊

ハ小毒あり食ふべからむと云り今人家ハ植て翫
ぶりのハ唐土より来る上古ハ野菊の外なし 鶉

和漢三才圖會 按まると俗ニ云野雁ハ頭頸灰白色
の端黒く其背ハ黄赤紫の約文あり 翻深黒腹正白

脚掌蒼黒し 九月 後ハ雜 國の女兒雜
和 滑靴言雜談

とふまゝ古き物語も出たり上己の節ハ扱はるは
今又九月九日ハ賞をも女兒多し源氏物語ハ常も

秋 の

雖いそいそとこゝろをこゝろに重陽ふむとあそぶ左も何のまじ
う、俳諧是と名づけて後の雜祭とと後とこゝろに己の對
して謂のつち 志の部十三 野の宮は別別 別 野の宮は別別 別
るもの、夜の条注ス

山城国葛野郡小倉山の下椿原ふりりへ伊勢
斎宮始此所ふ栖栖ふふありて、伊勢太神宮を勸

請も此所嵯峨野へ故ふ野の宮と称こゝ延喜式九齋

宮の親王定こ畢まで、宮城の内便こもき所と止て、

初齋院とて被禊くと乃又、明年七月ふ至まで此院

ふ齋と、更ふ城外の淨野とトし、野の宮と造こ八月

吉日とトして河ふ臨とて被禊くと即ち野の宮ふ入

○野の宮の別と、齋宮爰ふ籠らせりて二年の九

月伊勢へ参こもふとき、天子へ御暇を奉内し、

此時天子御手づり、由豆の爪櫛と齋宮の御頭へさじ

ふふとこゝろと別の櫛と申と、是ふよりて伊勢齋

宮ふ移こもふ故ふ野の宮の別と申こゝ蓋鳥尊留留姫
ふうつけあふ、因縁と以て齋宮ふうつけ 日本紀 四 崇神天
ふふと又別の御櫛由豆の爪櫛と申こゝ

皇六年天照御神と豊鋤入姫の命ふ説こゝ大和國登

繼の邑ふ祭こもふ、同書 六 皇仁天皇廿九年三月天照

太神と豊鋤入姫命ふ離とて倭姫の命ふ託こもふ、同書

才景行天皇二十年二月五百野の皇女とつりして天照太

神とまのり、三代之の、故ふ代々皇

女と伊勢へ奉と宮仕させり、天皇即位の後親王の内

處女とを、太神宮の御給仕と定めり、ト定こゝ

内親王あきと、諸王の姫君と、定こゝ例ありつた

と、定め奉と、二年の八月より翌年の九月迄野の宮ふ

隔、此間三度の神事三度の夜あり、上御門院承

元二年四十一代の齋宮、後鳥羽院の皇女素子内親王の後

此事断絶と、○九齋宮群行ハ九月十七日、其前

日桂川ふおいて被禊と修と、桂川の御後、

桂川ハ山城國のちうさき 菅家文章菅家文章 黄ば花之過過 重陽世

葛野郡のちうさき 殘菊俗謂之殘菊 ○重陽以後の菊

といふ、殘菊の宴ハ十月 殘草菊の異名藏王ふ載

五日、冬の部と、野山の錦のちうさき の条ふ併せ注こゝ

秋 のねく 野山の錦のちうさき の条ふ併せ注こゝ

との部ふ
併せ出さ



七月 化生

五雜俎 歲時記 七月
夕俗蟻と以て嬰兒

と作り水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とて二日
と化生といふ王建詩云水拍銀盤弄化生是今今の人
泥塑嬰兒或ハ銀範と以てまざる者化生と

苦丹 丹 苦

ふとこととちりて七夕の戯あることとちりて
と龍騰といふハ誤
観音艸 観音草花肆
ふありの葉蘭ふ

似て少く狭く短し石菖ふ似てふのきとあり六七月
莖と抽て小花とあらり穂とふと淡紫其蒼とま

愛まぐ一然るふ大和本草ハ観音草無花無穂とい
ふハ京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯と縛ふ観音

草の名義 常山花 和漢三才圖會根と常山と名
ふありの葉 葉と蜀漆と名く和名久佐

木處々ふあり其葉甚と臭し高と丈許葉梓楸の葉
小似て團く尖て畧皺して澤わらと六月細花と開く白

紅雜 常山の虫 同上 蟲ハ此木株の中ふあり蝸
木の心と蝸ふ六七月株と破てこれ

と取用て痔の藥ふ入ふ或ハ灸て小兒ふ食ハハ九蟻之
取の法其ある木ハ株小ふ小き穴あり管を以て水の中

入るもハ虫首と穴より出を輒木 栗奴 和漢三才圖會
と剪而端と縛りとまを採り得ハ 栗奴 栗の苗穂と

ふと時黒き煤と生る者 鏝虫 和漢三才圖會書出俗
類の奴麥の類の如し 鏝虫 正字詳ふと

小此虫沙雞のこくハ翅青く腹黄色前脚長く疾走
て跳る毎小穴ふ出入する故ハ獲てくし秋鳴声馬の響

の音小似たり 蛸螿 時珍曰秋月鳴て音
因て名づく 兼三 紫ある者蟪蛄とて

秋物 降り月 滑摺雜談 師説ふかづり月ハ
十六七夜の既望とて月といふ

然とハ居待月の頃より廿二夜迄の月次第小魄と生
ると望とてなりともなり月ともいふハ藻塩草の傾くの

義も捨 葛 同根と堀 直葛が原 和漢三才圖會
べうらむ 真葛 其葉韌薄く

指の葉ふ似て面青く背白し爪至長くハ 翻 恰も
掌と交まるとし 婆娑とて声とふも故ハ哥人の葛の

秋

葉の裏見し林火の根ふゆぐ大和本草根と各月或
 春はく苗と生ぜるとまほし用ふ葺敷又乾用
 葛根是古式月の季と不審真葛の真ふむ
 る辞直葛原京師知恩院山門の南ふありと
 只葛の生る原名は

花壇

貞享式今按るふ花壇と
 花田の末と秋不定む

草の花 草は實

諸草のくひ春夏ふ花を開
 く者むと秋多む故無是

草花と秋とと實もも然こ古今みりふ
 ひつ草と春と秋のくの花ふをりる

栗

その部蓮芋をえと中近江國三浦觀音
 の条をし

觀音寺梨

寺より出微赤

甚く大中子漿多く味
 甘し口中不消るがじし

九万疋

籍一名九万疋
 といふ部の部鱈

の条ふ
 注を

八月

桑名祭

十八日春日大明神の社勢
 川桑名の城下あり

祭る神四座別當似眼院説小云經津主命神護景雲
 元年下總香取の宮より勸請と云

二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請二天宮年秋命

姫大神永正三年八月十八日伊賀の名張より勸請あり
 毎年八月十八日とて祭辰とふすと二應永仁の月日

といふと修をといふ先十七日社前の南北小車輛
 飾夜小入て試あり翌十八日祭礼のとき一件の車を

南北へ引渡し音樂と奏し明和十年の春同禄以前
 兩社六座く北三崎の神社三坐南春日の神座三坐

小往古春日鎮坐の日とて祭る同禄後祭礼延引せ
 三崎大明神土地の神鎮座の年月詳ふらる疑洲寄

鳥洲寄泡の洲寄合せて三寄といふ又七月七日の神事
 あり式子真舟川ふ於て石とと末て兩社ふ獻むこは

石取の神事といふ此日雜遠物と出も此八月祭と天武
 天皇の祭礼と記せ書あり日本紀云天武天皇元年九月

朔車駕還伊勢國桑名宿るのふ今歌中ふ神事あり
 といふ

古参引

時珍曰苦味之以此名參
 功之以此名和漢三才前合其

化莖の梢小穂とふて七八月開く蔭根際
 ともふ藥用と故小根と連ね三と取

樂堀

秋

秋野山小出て薬草とよく状

虞美人草（和）

本草名花譜云花四瓣色艶罌粟小類して小園史

云吳俗呼で虞美人草とす云是は四五月花とひらく者之花彙美人蕉（紅蕉）此芭蕉の一種類説褒斜山谷

の中小虞美人草より形鶴冠のごとく大なり此より葉皆相對して或は虞美人の曲を唱ふれ兩葉撫掌しく

頗る節拍小ゆるが如し○鷺水が新式小口決ありといふもの何しの草栗茸（和漢三才圖會）山原小生を高くす

とつるや栗茸（和漢三才圖會）山原小生を高くすふ過も織四五分口く卷正白色

剝る栗の肉の下菓（和漢三才圖會）この部落點の条ふ注を九月菜

併せ九日小袖（和漢三才圖會）清最正徹記九月衣類菊襲の条ふ注を

縹色の小袖と著し互ふ鞍馬祭（和漢三才圖會）九日諸神記鞍馬寺由岐の社

天慶年中勸請を神社落敷鞍の社山城國登官郡給馬山のあり祭る所の神一座大己貴命○此社天子不豫

世上騒動の時鞍を此神前小懸く故小由木と号蓋大己貴命少彦名ともよ疾病と療天下と治るの神とを

りて五條天神及當社小鞍とくろの遺法より或説小祭る神素盞鳥尊とて例祭九月九日八日の夜氏子の男女

供物と旅所小献も勸學會（和漢三才圖會）十五日三月九月十五日一年兩度行る

三月の条見合をべし公事根源勸學院の大学の南小此院とてとらうハ南曹とを申め冬嗣大臣遠三傳

の字問をくんとらん小建立三吳服祭（和漢三才圖會）あの部穴織祭の条ふ併

世注胡桃（和漢三才圖會）庖厨本草此木らうふ似て最も大なりを、其实核四く大く色淡く皮厚く硬く

脂多く味最も美し棋檀の實（和漢三才圖會）蘇頌曰棋檀の木葉花実酷く

木瓜類も木瓜より比をんハ大わして黄はと存する小惟蒂の間とるハ重蒂乳の玉きのものあり此則棋檀

秋

大和本草花ハ林檎又海棠ふ似
てかきて開く、實ハ秋熟を、
九年前母 俗ハ九年母

事類合璧九月霜降より長しや早く実る、
栗 乃チ熟し其色あつら

裂て墜者久しく藏むべし苞裂る者腐易し、
落栗、迷栗、燒栗、栲栗、柴栗、刺栗、打栗、出落栗、三度

栗、山栗、錐栗、搗栗、各
熊栗架と搔 時珍曰
熊石巖

頭字の部ふりちて注、
枯木ハ在と山中の人とと熊館といふ、性よく木ふ上り

好て栗と食ふ故ハ攀縁て稍ふ至て枝と折し並鋪て
居所と設く是と熊の 菜黄 和漢三才品会 胡頹

架といふ熊館の類、
大抵三種あり其葉
と實少し異しそのの一種春月ニ當て苗と種

時實熟も大さ小束束のとき者こまこ苗代胡頹子と
名く一種五月実熟も大さ束束のとき莖長くして下

垂ふ一種九月実熟を小く其大さ櫻の子の如くし
て簇り 草牡丹 大和本草葉ハ牡丹に似たり軍の
白花といふ實牡丹に似たり楮

根より生む又實とちて
草の主 百首うまかり

生む是又牡丹と葉の類、
草の紅葉、草比色

の匂いハわづら菊の花うへ
草の錦 野山の錦 草木の紅葉と錦とていふこと

を草のりりありは馬房
新続頭林 織いふと錦とやん秋
下て葉の破壊さる

草の錦 野山の錦 草木の紅葉と錦とていふこと
山崩魚藻 といふ魚藻の形状

の野ふりぐく咲る、
暮の秋 暮て行秋といふ秋
九月

花の千種ハ 邦忠、
晋史 蒲柳の
質秋の望て

春の部上り魚 暮の秋 暮て行秋といふ秋
九月の晦 質秋の望て

盡 九月の晦 質秋の望て
八幡安居の頭 十五日 紀事 九安居の頭
大経営之故ハ三年

先 八幡安居の頭 十五日 紀事 九安居の頭
大経営之故ハ三年
秋 又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ふりて

建所小綱の神入長吏の補任と扱はるるに指部（又）
 正月九日頭人の宅に御家衆を饗應し能拍子亦以
 ると古那志といふ是小習礼の記と又十二月十三日頭
 夫婦杉山不動堂の前にて垢離を修せり（又）精進令
 り又十二月十三日頭人淨衣を著り七所の社へ参り本幣
 の頭人の婦も又さふ従ふ並に御家鳥帽子淨衣を著
 し奉供せり行粧甚ど古風なり放生川小橋あり
 一安居橋と名く是安居當人の渡り橋常ふ不淨の
 人と標を頭人らとて渡りて今日山上相知る所の社僧
 坊小止宿して精進潔禱もこの間而此桂の里に女子
 懸夜又白布を以て頭髮を（又）束りて桂始と稱す是
 を桂帽子と稱す今京の童謡に云桂帽子是十二月
 十五日安居頭人夫婦社赤本社の前ふ大なる松二本建て
 白布二疋ととの上下の枝おは人ちと候小猿のま
 ととの松小登せとのけ布の枝と代携りて頭屋
 小帯（又）後代修頭の致とも（又）増山の井今正月十日昔
 編米（又）本朝食鑑今製らる糲米（又）精細と以て得據

此を燒米と稱し其佳味は勢州莊野の市上と燒米
 と造る青麥草と以て俵子と作てるをと畏ると四方に
 送る（又）弟切草と（又）益母草（又）
 灸化（又）くせと（又）嫩なる蔓草小白花とひら内
 微紅の児重其花とらう唾せり（又）草付
 方と上やと手足或は類小貼るふさから灸のし
 依て名を（又）是和産（又）其蔓葉女書り似て七月葉
 の間小筒葉の花とひら（又）五瓣やと少し（又）瞿麥の形

あやんま（又）の部蜻蛉（又）兼（又）秋物（又）暮者類（又）
 の条より出

和漢三才圖會和名夜乃都伊毛俗（又）夜乃乃伊毛今云
 長其其根の長さ尺む（又）三寸灰黃色肉白し
 煮て食べ（又）救荒本草暮者類溪の四ふ而と出時
 時凡水小感と縷（又）衰半衰ら有とら人姓（又）
 ○此者暮者類と云暮者葉といふ又山葉といふ初の唐の
 太宗譯と類といふ因て辟て暮者葉と改む（又）燒布
 宋の英宗の譯と暮者といふ因て山葉と改む（又）燒布

躬恒秘藏抄

焼たると馬あどの尾髪ときつてこま
てその余りて焼て田ふ立る。其髪ごきて鹿のよまぬ
そとと焼
放生會 八月十五日諸國
放ち鳥 此とわりの

八月八幡祭

とと男山の神更と以て京師の人八幡祭或は放生會と
社頭美豆の南八九町ふあり京と去ると四里余男山岩清
水と号或は雄徳山鳩の峯と称と欽明天皇三十一年冬
肥後國菱形の池の辺民家の兒三才の時神託と云我
ハ是人皇十六代譽田天皇也。是ふよりて豊前國小鎮
座して八幡太神と稱と傳へる貞觀元年秋七月八幡太神
鳩の峯ふ移る。秋の行教南都大安寺小居る。元
僧姓ハ武内大臣の裔。曾て貞觀の初め宇佐の神禰小
詣づ。夏九旬登ハ大乘經と説夜ハ密咒と誦と一夕夢中
小太神告て云師王城小歸らむ我も又隨ひ行。土城小居
て當小皇祚と守るべし。行教やうやく山城國山寄小
至る。この夜太神又夢中告て云師我居る所と見よと
覺てこまとて。東南男山鳩の峯ふ光と現。行教と
とと奏して宮殿と成る。正殿三層中ハ八幡宮也。

紀事 足稚尊功西比咩大神 後天孫天皇源の姓

と諸皇子小賜ふ時八幡宮と氏神と此社と以本朝を

の宗廟とてまふ。毎年二月初卯の日神集り。御神

樂小准きらる。八月十五日放生會あり。養老四年九月征夷

の事。ゆり大隅日向の兩國逆亂とよりて宇佐の宮小祈

請せり。あまのの祢且幸嶋勝婆豆米の神軍と奉て

かの國を征し敵と討て利あり。大神託と。日合戦の間多

く放生とゆき。宜く放生會と修むべし。諸國の放生會

とふ始る。○紀事 八夜神と輦中ふ遷し奉り。神を

促む。左右の馬寮御馬二疋と奉り召使。官掌外記史左

右兵衛の府。參議上卿左右兵衛府上臈前駟本館屋

殿小参り。向ふ神輿楯の鼻と下り。病院頓宮ふ至りて行

列行幸ふ准む。この式後三条院延久二年。

東穂

豊年の稻の穂のち

山雀

和漢三才圖會 狀を畫眉鳥

あへのゆく長きとゆふ

小似て頭黃白小赤色と

帯ふ眼額の辺小黒き條あり。背灰赤色。背胸尾と

小黒く腹赤く性慧巧よく。嗜る好て胡桃と食ふ

秋

紙燃の輪と作て篝中くわちゆうに設くる時ハ飛て其輪と燈とう別わか箱と篝の隅すみに安やす宿處しゆくじよと云○此鳥藝このとりぎと云
敗荷たいが注しよ不ふ九月山口祭くわがつやまぐちまつり

中なかつ巳午日周防国吉鋪郡仁登にとうの神社九月中くわちゆう巳十日祭礼まつりと行ふい山口祭やまぐちまつりといふ山口の古名ハ仁登にとうの庄故ハ仁登にとうの神社と号ス祭る神住吉三神と以も本社ほんじや合あせ祭る神二神味兼高彦命下照姫かみひこのみことの命各おのづか社以上王殿三社と云仁登にとうの神社と号なづ又織機大明神オリハヒ又稻宮いなみやとも称なづ衣食いじよくの事こと主しより多おほ神かみ又また此号このなづあり祭礼まつりの事こと織機オリハヒの神かみ又また次つぎの日ひ神かみ神喪かみ三座本社さんざほんじやの西にし神幸かみの地ち小出こいで奉たてまつ流なが流なが流なが流なが皆みな国くに主しよりことと執行しよと有あ司しよりこと國くに主しよの拜まつり礼まつりあり又また六月むつき御田みでの祭まつり鎮守ちんしゆの年月としづき詳しよ人ひと王わう一代いちだい聖せい仁に天皇てんわうの御宇みう勅幣しよくへい幡花はなの頭かぶと奉たてまつらるるの傳記でんき失散しよさん也
山城国八幡山の社やまぐちのやまはたのやま僧そう九月くわがつ止とど日ひ花はなの頭かぶと修しゆ先せん月つき

俗板しよばんと割わりと片かたといふ又割わりといふ是板いと割わりて臺たいと製せい表ひょうの義ぎあり花はなの頭かぶハ社僧しよそうの弟子でし髪かみと剃か衆僧しゆそうの列りよく小こ加かのこととき社僧しよそうと郷食きやうじよくをを小彩箋せうさいせんと以もて草花くさはなと製せいし其その臺たいと神かみ前まへの廻廊くわいりやう飾かざり酒宴しゆえんの興きやうを催もよほ故ゆゑ小こ花はなの頭かぶと称なづ也
山路草やまぢ菊きくの異名いみな○十名じゆ山路やまぢのこと各おのづか柄えのことちちめることちちも猶なほやぢらんこと前内まへうち犬いぬ

臣實しんじつ燒栗やきり燒やき栗り山粧やまざい臥遊録おしゆりよく秋山明淨あきやまめいじよ破やぶ

芭蕉ばせう芭蕉翁移ばせうおううつり芭蕉詞ばせうし唯ただこの陰小遊いんせうしゆ漸寒ぜんざん次弟つぎ寒さむきとこといふと

ま 七月 槓賣たきうりろの部ら六道むだう叢そう

の糸いと曼珠沙華まんじゆさげ大和本草たいわほんそう金燈花きんとうが鐵色箭てつしよくせん前まへとも云い月令廣義げつれいくわうぎ曰い冬ふゆ春はる葉は茂さかり夏なつ月つき

花はなと生なして葉は死しる花葉相衛はなはつあひまもと云い此花このはな下品げひん其葉そのは石蒜いしかん小似こに似に一類いっるい此花このはなと國俗こくじよく曼珠沙華まんじゆさげと云い翻譯たうりやく名な

義ぎ曰い曼珠沙まんじゆさハ此この柔な軟な又また赤華せきわといふ酉陽雜俎うしやうざん曰い金燈草きんとうそう俗人家しよべにやふと種くさるとこと惡わるふ一名いちめい無義草むぎそうと云い

花あるときハ葉あし葉ある時ハ花あり○俳書ハ曼珠沙華石蒜同物とことつとと篤信翁の説ハ石蒜ハ志の部ふこ

松虫

和漢三才圖會 懸蟬の類 褐色ハ志の部ふこ
て長き鬚腹黄ハ野草及び松杉

の籬ハ在リ夜羽と振て鳴声知呂林古呂林といふこと甚だ優美ハ松虫鈴虫昼ハ得がとし夜燈火と照を時ハ光アと慕ひて來ると捕へて籠中ハ畜ふハ今俗アリなくと鳴と鈴虫とりふハとらし是松虫といふハ鈴虫

兼三秋物 眞夜中月

子ノ刻ハ

鳴とりハといふハ
出て午の
二刻ハ入
無名抄 穂の長さ一尺

眞蕪宇の芒

同上眞の蕪抄と

と書るハてころ得べし
とりの心ハ眞蕪抄の芒といふべきこと
詞を畧しとるハ色深き芒の名あり
麻苧穂の芒

はるかの糸 同上 眞麻の心ハ是俊頼朝臣の哥小あみて
待るハすんの糸とてころけと待るハるの乱れ

中ノ云 堀川百首花をよもまをわの糸とてころけて

たえどと人をかりわゆるハ俊頼のまをわの芒とハ穂の赤きといふハますやまをころとといふハ

松尾梨

形觀音寺梨小似て 雪のどく漿少く甘し

圓梨

梨

八月待宵

八月十四日夜孫 明後詩云銀河

無声露暗垂玉蟾初上欲回時情樽素瑟宜先賞明 夜陰暗未可知○待宵ハ翌の夜の暗曇りはかりか

三潮草

和漢三才

待ハ翌の夜の月と待義ありハ 松茸 岳会ハ松 草ハ山城の北山の産最佳ハ赤松の陰所秋の雨湿り為

小釀さきて生を初め落葉を戴きて見ると漸く長毛 者二三寸頭圓く柄あり鼓の槌の如ハ其大なる者尺 小近し日と經て傘と傘ハ外の色黄白紫と帯内白く

細く深く刻みあり其柄太き者菜な也なり 同上
て味良し八九月の交盛なりあひま

ハ朽木小生む、綴柄あり一株片々と叢生す、
火炎茸の如くして上黒く元白く味脆く甘し、
間引菜 まひきな

貝割菜 摘菜 あひぎな
和漢三才圖會 九蕪菁蘿菔の類、大抵

小葉 こば
八月種と下し彼岸中小苗と生む其敏也
と拔て煮食ふ摘菜間引菜是也又曰苗と生じ地と出

ると二三寸漸く茁て二葉あると蔬とす是と貝割菜と号

猿子鳥 まゝりこ
和漢三才圖會 正字未詳狀大さ雀の正し

黒き魁あり尾の下兩端小自者二つ其背短くして赤黒
く脚黒く頂灰黒頭より胸小至て淡赤なりて白き圈の

豆鳥 まめとり
豆廻 まめまわ の条とす

九月 豆名月 あきあひげつ
八月十五日の月と芋名月とつづふ
對して十三夜の月と豆名月とつづふ

外市 まぢういち すの部住吉相 まぢう 鞠花 まぢう
菊の異名 藏王 まぢう あり

音多訓 下り又鞠の如き形とす
搢棹 まぢう 菴日樹林
橋の如く花

白綠色とくせし此種蕃邦より渡りて此訓ハ則蠻語
ふり今京師小多し梨子りしの如く凡味も又梨子小似て

少しうろしきせいとことつハ菓子ハ、
豆引 まめひき 和漢三才圖

と菓といハ菜と藿といハ莖と其といハ本綱ハ菜也
の總名皆菜とあり大豆小黒白黄褐青斑の數色あり

大抵夏至十日以前種を下し、
正木の蔓 まぢう 真國菊

七月花をいれ九月莢と結ぶ、
此らハハカと常盤若草とこまきの如くつとまてのふりしハハカ

申ハ極こたまりと髪かみとせしハ一種有るハ古今集小深山こみやまあり

年としの古葉色つき落るりハハカハ山の岩木いわぎと小ゆとす

めふスものもつづるあり是ぞ山行時むをら目す

つきてて右のてくはよみつん云 ○真洲翁の説
ふよるまきこ 定家蔓よ似たり 俳諧は秋季と定めり

古哥ふ色づくことあり 冬青の實 和漢三才圖會 冬正月其葉冬

もまこ正青く光澤あり 口長ふりて尖りて 軟なる 鋸

齒のへ 夏小白花とひらき 秋実と結ぶ 生は青く熟ると
紅みおのつら 裂て中小白子あり 由てはさへ

枝とさして活易し 藩籬といふ垣あり

天和本草 楮の一種 葉は楮に似し 厚く大なる色深青
面は光沢あり 屋材と器と作り 舟の楫とて其用楮

と同じ 一類別種は実ハ楮より大なる 櫨 和漢三才圖
會 其实棟

とを民用と助く ○実を以て秋と名 榎の子は如くありて 小く 簇りあり 生は青く 熟ると 赤し 裂て 内紅子 三四粒あり 其葉秋小至て 紅あり

松の實 志の部 松子 け 七月 今朝は秋

立秋と 牽牛 志の部 二星 夏解 夏書納

夏四月十六日 入七月十六日 解是也 夏解と云ふは 夏九
の間 他は北益の爲 小聖經及び名号題目と書寫し 夏

終るの後 是と堂塔伽藍に納め 三夏万葉集 夏解草
回向と 是と夏書納と云ふ 在家も亦此に效ふ

釈氏要覽 僧尼解夏の日 録と以て 節と束ねて 檀越の
遺ることを 夏解草と云ふ 今この草と詳ふは 小の五
分法身の座と名 故に吉祥草と名づく 潭川府志 四時

一色 泉石の中 小生を 山村の人 瓶小挿とて 先と祀る 陰字
にありと云ふと 葱翠ありて 潤まも 家小吉事は けいありつ

ら 花開く 故に吉祥草と名づく 字彙 節ハ伊及反音
印草の名 天和本草 夏解 兼二秋物 玄兔

草ハ麥門冬の大なるもの 月の異名之 ○謝莊月賦云 引玄兔帝臺 月宮殿

○この部月の兎の条より 是しと云ふ 時珍曰 雞冠花の形と以て名
都の条より 雞頭花 小命と 春苗と 生し 夏小令

高き者五六尺 短き者 幾少寸 畧 六七月 梢の間 小
花とひらく 紅白黄の三色あり 畧 花畧 久小耐り 霜の

秋 けふ

後始てけいも **鎮江府志** 莖も蔓も花も實も山菜

焦る **黄獨** 小類も葉大りてや 田く根ハ草也如

らうて髪あり味微苦し **枳椇** 正字白石李 蓋

俗ハ何首烏玉と云ふ者是也 **枳椇** 枳椇、実の名

その実大と大豆の如しと云ふと喰ハ少しく梨の味あり

小兒抱瘡鼻穴閉るるもの、さきと以て其鼻穴と穿つ

八月 けふの月 部の月見 毛見 **紀事** 土民

年の貢と納る九秋米收納をの法晚秋小縣火先て

田地の立毛の善悪と巡檢を是と毛見といふ草と毛

いふ故ハ稻未ハ獲 **罌粟子蒔** 月令廣義八

さる亦立毛といふ、 **罌粟子蒔** 月十五夜罌

粟子と種をば花 **ふ** **七月** 舟形の火の

盛やして繁し、 **藤袴** 和漢三才圖會 高さ二三尺葉

部の施火焼 **古枝草** 萩の異名之 **藏玉** 宮城野

の奈不出 **古枝草** 也露も色あは古枝草とて

しの秋も花ハ **藤袴** 和漢三才圖會 高さ二三尺葉

ふ **七月** 舟形の火の

月八十九夜の月ハチジュウノヨノツキ 更さらまら月ツキ 藻鑑草世 筆筆抄抄
又寐待月ねまちづきともいふ 日の月あり

形かたち小こい 蒲ふ萄たう抄しやう 依抄本朝ほんてう食じき無む俗ぶく蒲ふ萄たう材さいと称なづて長ながし

いいとと用もち **八月** 匏ふく ゆの部々類の 木芙蓉きふよう 菜さい
とみまむ 実みの条じょうに注ちゆうせ

者ものこまこと草芙蓉くさふようのの大だい荷かの花はな是こゝ也なり陸りく小せう出しゅつる者ものこまこと

木芙蓉きふようといふ時珍ときちん曰いひ此こゝ花はな豔えんく荷かの花はなの如ごとし故ゆゑ芙蓉ふよう

木蓮きれんの名なあり八月はつげつ頃ころて開ひらく故ゆゑ拒霜きくそうと名なく中ちゆう夏げ冬とう

周しゅう夏げ茂まく秋あきの半な始はじめて花はなと着つく花はな牡丹ぼたん芍しやく薬やく玉ぎよく類るい

紅こう白はく黄わう行ぎやう葉えつの者ものあり最もり **蒲萄** 時珍曰春はる月げつ萌も

寒かんふ耐たて落おと實じつと無なく **蒲萄** 色と生じ葉類

る括くわつ樓らうの葉えつふ似にて五ごの夫おとこあり鬚ひげを生はし蔓つる延のび數かず十じゅう

丈ぢやうと別べつ三さん月げつ小せう花はなといひ蔓つるとと總もとみと黄わう白はく色しき実み連つらり着つく

と星せいの如ごとし七しち八月はつげつ **蒲萄酒** 時珍曰蒲ふ萄たう酒しゆ小せう造ぞう

熟じやくと紫むらさ白はくの二に色しき有あり **蒲萄酒** るしとを醸飲

ハ陶たう然ぜんとて醉さい 山海産而金伊丹 **袋洗** 後信名川の流

角かく貫くわん○青せい藍らん云いひ鬼おに貫くわんの先まへ吟ぎんも **二季鳥** 惟の異名

と古こ里りとて三さん季き鳥とりとて子こ細ことて **二季鳥** 藏玉

ふとふ行ぎやうとて忠ちゆう忠ちゆう **九月** 不堪ふかん田でん奏そう 江波

堪かん佃でんの 九月七日 **公事** 根源げんげん是こゝハ諸しよ國こくの田でんの損そん七しちと

所ところ々の自みづか録ろくとて奉ほうをよつきて租そ税ぜいと三分さんぶん二にを免めんし

ふとありとあり小諸國せうしよこくあり坪ひら付つ帳ちやうを奉ほうれハ大臣だいじん津つつと

秋 ぶ こ

鳴な滝たき祭まつりの **佛手柑** 和漢三才圖會其その樹じゆ抽しゆふ似に刺さの

条じょうとて **佛手柑** 全く柚柑の葎ふ似を指

青色せいしきの物もの理り顯けん然ぜんとて零れい多た羅らの葉えつふ似にて夫おとこ

いと **佛手柑** 夜の糸の注

京都及び諸洲小夏草といふもの也。又根より草と云
根鬚より葉ハ細長として尖まり、莖と折て土小狭りむ
能生ス滑枕言雜談或説ふその葉の形指の爪小似る故
小仙甲草とも仏指甲の名あり此草の葉生ひ出て石地ハ
あま形蓮花の如く故云岩蓮花といふ篤信ハ非
ともこの岩蓮花小あり俗名ハ佛甲草と雜物也

待冬と隣注不
七月小町踊たの
部七

夕踊の条 御霊こりり七御出わいぞ
大日御ごりりの社ハ上京都
の北西ふあり下京

極大炊御門の北ふあり、雍州府志此社始ハ近衛通新
町ふあり上御霊ハ京極の西出雲寺の北ふあり上下御
霊の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神輿二
基御皇八所崇道天王伊予親王吉備の聖天藤原大
夫廣繼藤原夫人橘連勢支屋宮田九火雷神とせふ火
雷神と謂て管家の美とも者ハ誤傳云御霊八所の
内四所ハ桓武天皇の御時とせと初請と下四所ハ仁明天皇
の御時とせと初請と上出雲寺と上御霊の御出

草創くさくわうとして今兩寺とあり絶つたより寛文年中慈眼大師の
遺誠いせいよりて久遠壽院の准后山城国宇治郡山科の御下
於て出雲寺と再興さいこうしむ毘沙門天と安置あきざすふ御天
の社あり是古と存ぞんするの遺い息いあり上御霊の御旅所ハ京
極通り中御霊ふあり下御霊の御旅所ハ年々とるの所と定
めどその年神事頭屋の家内ハ安置あきざす
御旅所不在との間とて御旅と称す
ふやつて使

すの部相撲 小鷹鳥狩こたかとり
滑枕言雜談 初鳥狩はつとり小鷹鳥狩
の条小鷹こたか 少しうりありついでとせ

万葉新点ふよ、差別あり小鷹鳥と秋とす、鶉うずら雲雀うづら
その外秋の小鳥狩あり大鷹ハ冬とす、鶴雁鴨つるかり類と

狩かりすくせし 元て鷹ハ冬ふて小鷹鳥こたかの分ハ秋とこの種
類多し刺羽さしはといふ小鷹こたかハ朝鮮しんせんより来る雀つばき鶴つる雀つばき賊ぞく

つこの雄おハ兄あに鶴つる鶴つるこのりの雌めハ鶉うずらハ一ひと巢うらこのりのつひ
ハ秋巢あきうらより取とれいハ元て鷹たかハたりの挽ひ名なありと別わかて、

大おほくく鶉うずらハ小こ 仙せん花はなハせ 浮うき菖しょう
たりれ挽ひ名なハ 紅梅草こうばいそう 仙せん花はなハせ 浮うき菖しょう
の部ぶとすハし 結むす硬かた

秋

百又の末より秋碧花とひらく花（さき）と云ふ水草なり
 是と水葵（みづあひ）とわらへこの輩多し水葵ハ荅（た）ハ
 花黄あり○腥（し）小あまこの上の鮠の腸芭蕉
 酉陽雜俎 寵馬 狀促織の如く俗に寵馬（まへま）のれ食ふ
 足の北 大和本草 蟋蟀小似てひげ足あつくせい高ノ頭尾
 さかりてまると寵のあかり小穴居を筑熱の方言小
 井ヒツの海七う家ハ小蝦（あひ）ふあ（あ）るひやくの芭蕉 兼

三秋物心の月 秋の枝折心の月 氷の輪 月と
 清き心（しみ） 見と

て云東坡詩 氷の鏡 月と
 氷輪横海關 月と
 牛蒡引 注よか
 よむ

胡盧枒 名豆枒即乾枒 樹練枒 形鳥の卵の
 淡霜を生む 如し撰津丹

波不多し所謂鶉の子枒狄京師 御所枒 大和の
 小て御所枒とい木棟枒とい 御所村

紅稚子梨 稚子の形あて 空閑

梨 肥前の産淡赤あり種あり 小瀑江鮒 和漢本草
 大なり其味川村木小苗 全（ま）小

者どハ鮒と名く或ハ名古或ハ伊勢鯉或ハ口々又伊奈洲
 走小瀑江鮒といハ中 畧八九月稍長じ大（ま）ハ七（ま）ハ海の
 交あり此時泥味多し脂多くして愈甘美色 八月

黒と減して深し洗ふが如し故ハ小瀑江鮒といハ 八月

小望月 十四日のこよみ 今宵の月 つの部月見 駒
 月といふ の条まつ

牽馬迎 望月の駒 江次才 本八月十五日あり未
 きり原の駒 雀院御国忌ハ依て十六日小改

の用ハ云頭書云信濃勅旨の牧十五ヶ所延喜式（の）載る
 所の一ハ天皇南殿ふ出御ありて御馬と分ち取りむ出御
 ありきとたハ建礼門の前の大庭ふ於てこま（ま）ハ牽（ひ）分（か）しむ（ま）裏

書云云上野九牧延喜式ハ廿八日ト云七日甲斐又の初旨の牧
 十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武藏初旨

の牧又十五日信濃初旨の牧廿八日上野九牧以てこまハ日延
 喜式にこまハこの外永平官府十三日武藏秩父の牧廿

八日同小野の牧の御馬と云と貢公事根源公卿以下次

狼茅其根獸の齒牙 **革草** **和漢三才會** 山の

のこころ故不諸名あり 狀松茸小似て織の外黒く粒々の皺あり晒し乾せば黒

やして漆革のごし裏黄赤りて毛糸の如きものあり柄小

鱗甲あつて **五十雀** 正字未詳 小雀 **和漢三才**

味微苦し 面全俗小云古如良状山雀小似て小し故俗呼で小

雀との山山林多し頭黒く頬白くして口き紋の如く背

腹白く翅尾黒し其声滑りて多く **九月御灯** 三

囀る捷輕なりして上下をえがくし **御香お宮祭** 伏見京町の東了

よ同し其条 あり祭神一座秋神功皇后○古老云鎮座年紀分明ふ

らむ昔より垂跡此地あり秀吉城と築くの日東の丘

小移し奉るといふも神の祟りありし故復旧地小近し

奉るといふ乃今この社地○一書云この地紀伊郡小属

も例祭九月九日朝日と御出といふ十日神事能ありは

を今ハ神興一基造り山ニ基建物小と出を○當社ハ延

喜式小載する所の御諸の神社是より鎮坐年月未考一

書小貞觀二年勸 **後日の菊** 紀事 九月十日或ハ十

請のり記せり、 日禁裏小茂菊の宴

あ **御難の餅** 十日 文永八年九月十日日蓮上人相列

下僅小一命と全うを今日宗門の徒登と 鎌倉龍の口小於て厄難あり白又

作して像に則小供とをと御難の餅といふ **小倉祭示**

十五日豊前國到津の社ハ企救郡今村の庄到津村より祭

る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ玉依姬ノ草創年月詳

あふと後鳥羽院文治四年宇佐八幡とこの地小勸請しとの

秋

辰の年小笠原茂更小祠壇謁殿と立て祭事の上益田

齋日といひて善事と修し奴僕と暇和漢三才

ととりて閻魔堂へ詣てまじり紫葛

葛の葉蒲萄似て実と結 槐の花三安石澤云槐

いと又一種野蒲萄あり、黄中ふ其美と

懐く故ふ三公こふ位を 蕪頰曰槐木極り大なる者

あり、按むるふ尔雅云槐數種あり、葉大なり、思ききめ

棧槐と名づく晝合し夜開くもの 守宮槐と名づく葉

細ありて青緑なり、わづられと槐といふ、四月五月黄花をひ

らく六月七月実と結、和漢三才 面会 其花未開時米粒

の如し、其实莢多く連珠も、中ふ黒平あり、○槐の花本

草ふ四五 月開花といふ然ふ増山の井毛吹草

等秋と色ふふのりて、まじりて愛ふ出ま、狼尾

あて時珍曰狼尾其穂の象形秀てあつても、凝然と

草と田あり 故ふ守田公羽の称あり莖葉穂粒と

とふ粟の如し、燕尾香 開室本草 蘭草の葉馬蘭

色黒黒毛あり、似たり 故ふ蘭草と名く

其葉岐あり、俗兼三秋物 犬子草時珍曰穂

故ふ俗狗尾と名く、原野垣端小多く生む、苗葉粟小

似こ穂も又粟小似たり、色黄白なりて実ふ、和漢三才

面会 小児とと用て蛙と釣て戯むとくうせ 毛のこ

草おのれと種のあも のをををのふるとい誰うのり、俗

云阿波国鳴門例あらむ鳴動して形大なり

止むと和泉式部此哥と詠とて止む肥田 藪

附の處肉起又痕とま 青芋藪茶曰子多し

ゆの所謂著蓋折秋、細長くして毒多し

八月 繪行器緑雀 八朔 紀事 京俗八月朔日

所の女子は行器一雙と贈る どの行器の中小生初ま

藤の花と盛藤の花ハ白糸餅赤小豆と点し 此

餅の形度白糸と似たり 故ふ白糸と称又深更と名く 榕亦小豆と

称してあり、とつハ物ふ点まる とつくといふ白糸赤小

豆と点す是あつ きの其我ととりて深更と名くといふ

今日童の戯ふ松笠と以て雉子と作或ハ鳥賊の甲と

以て鷲華鳥と作、或ハ糸紫と以て 金灯筆の字を

括こ瓢の形と 又挑仁と刻とて松虫と製衣 是示の

秋

に

て

類多と遊び或ハ互に相贈ふこれと類合とて云々○
と雉子鷲の類と同じ又意は以て枝を折て行器と
との相贈ふ京師の俗
これ今日嘉祝の物に
えゆ草
龜塘の和
名より、
椶

草
和漢三才圖會 椶の根上ハ最生也 織二寸灰黒
色裏白し細き刻あり微香あり味ハ美なり
大和本草 椶本草ハ揪の類とて
今按むるハ揪の類なるを、椶と

九月 椶の實
葉柔ふ似て筋多し冬落葉と実ハ胡椒の
大秋熟して黄く味甘し小兒好で食ふ、
て七

月次
拾遺 水の面ふてる月なりと云々今月を
秋の寂中よりける源順○てる月と月次ふの
けてよ

八月 天中節
八朔 拾芥抄 八月朔日の日
シ出より以前 天中節
赤口白舌隨節成と書て門戸ハ押陰陽秘法ハ白大

月兼二秋物 天井守
条下ふ出と
照

節節減ふ傳へ山惡の日に陰陽家天中の札とて良
賤の門戸 天狗草 大毒あり故ハ
貼と 人ちりあを
てらつき 鳥

きの部 天王寺一乗會
十四日 摂州大坂四天王寺
一乗會ハ九月十四日
或ハ十五日六時堂ハおいてと修を此堂傳教大師草
創之且本尊某師如來日光月光の三尊大師手造り
との入寺説云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司乘入

沙汰入堂仕公人出仕も先ッ時刻と三綱及び一和尚小告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕も太子の
像ハ鳳輦小つすその式二月十五日の如し廻廊の下り
六時堂へ渡御あり法事の次第振鉞阿弥陀經傳供方
歳衆延喜吾樂陵王納曾利悉く終る酉の刻還御
てんまのやんごめ

天満流鏑馬
廿五日 摂州西成郡天満小あり祭る所
の神北野小同じ九月十五日流鏑
馬あり社家とこと勤む鳥居の辺より
出落栗 紀夏
土俗

天満橋ふりて馬と馳て的と射る
秋
てあ

誤りの古不孝の子あり此粟を以て又投ててこと傷
る因ててこち粟とらふ和俗又と称しててことつふ○一
説此粟自ら毬と脱して
地ふら故不出落粟とふ
あ 七月 秋の初風

秋の初めつこの 秋さつと 秋の末 秋さつと 姫朝

顔姫 異名分類 八雲御抄 秋去衣とハ
等うと注叙見えぞ、 秋去衣とハ

御傘 御機 御機之具云云 万葉拾穂抄 天の川

只秋の衣也や秋さつりハ秋の末るといふとあり
銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河 箕斗二星の間ふあり其

星河 河漢 長きこし天小竟と 揚泉物理論漢
水の精氣登くと弁り精華上ふ浮ふ宛轉して 飛

流る名つけく天河といふ一雲漢と五粟星とふ出

鳥井の鞠 堀の鞠 紀事 御機小飛鳥井家並難
波家蹴鞠の会恒例に上加茂松

露拂並枝鞠上足木の義あり堂上及び地下の門人多

あて行くと式之鞠の露拂ふ當家門外の上置 荒鷹
の者坪の内へ持来る是二星へ手向る心あり

鷹の雛己小巢と離れ自ら大食の時羅と以て捕ふ是と
網掛といひ又あら鷹鳥といふ新小捕へく人小馴ると荒鷹と

い 愛宕火 世四日 紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿三日
あり廿四日至る云 撰陽群談 標及豊

鳥郡池田村小あり愛宕山古言小所謂五月山ありと山
上小愛宕権現の社あり毎年七月廿四日の夜種々の灯籠火

を点して愛宕火と名く大坂北の町より望み見れば星
の如し愛宕の神社有馬郡道場河原新町口小あり祭る所

火産灵尊毎年七月廿四日祭礼 扇置 太平新
あり世俗とを愛宕火と称す 録詩

人皆棄 朝茶の湯 貞享式 風炉と夏まき 炒炒ら
秋扇 木地の炒縁と春

とませれば朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用とふひ
茶人の家小尋せしハ朝茶の湯ハ日中の暑といふ故と

青葉 部の弟切草 牽牛花 和訓栞 朝顔の美
の条もべし 朝とふ花と

秋 あり

ありのひかり
蘭とのふふの部
藤袴の糸ふ注ぎ

栗穂
和漢
の部とのふ注ぎ
青瓢箪
ひの部瓢箪
の糸ふ注ぎ

三才面金種類元て數十青赤黄白黒の色あり早中
晩あり早粟米實晩粟ハ皮厚く米少し○秣狼尾草

粟奴各頭字の部
秋津虫
この部とのふ注ぎ
秋の

蝶秋の蚊秋の螢秋の蠅秋の蟬
注釈不及を中を秋の蟬ハ

兼三秋物
秋のてふハおとろへるもの多ふあり

朝月夜朝の月
黒双紙朝の月ハ十七日
より二十八日まであり
曉月

夜
源氏初音巻影まき
有明
八雲却抄十五日以後
の由匡房往生傳了

秋月
清光と賞さるる

秋風
物理

秋水
莊子秋
水時小

秋聲
歐陽永叔秋声の賦あり畧之
續猿蓑

秋の七草
萬葉

秋野
尔咲有花乎指折可伎
数者七種花
芽

之花
乎花葛花瞿麥之花
姬部志又藤袴朝白

之花
○是と秋の七種と称を
撫子の一種ハ連俳ハ押出

秋の山
田機活法秋色詩
秋山如畫更分明

夜
物哀ある余情小作るべし
○秋の
ありはみ

あらしき

桔梗とゆふこき

栗奴各頭字の部

秋津虫

蝶秋の蚊

朝月夜

夜

有明

秋月

秋風

秋水

秋聲

秋の七草

秋野

之花

之花

秋の山

夜

相摸集

梨とささき入のり
やるとし、梨とささき入のり
と人らふありの梨とささき入
忌てありのり
八月 安濃津祭

社説曰伊勢國安濃郡津城の南八幡宮鎮座高良
の二神殿中 相傳入建武中足利高氏卿、國毎八幡二社
置んと欲し伊勢と以て始とす宮殿一千歳山の土ふ
造り石清水の神と勸請し源家の興隆と祈る旧記あり
永正年中當國兵乱ふよりして神殿荒廢僧願海募り
國中と化して再興し時小享祿二年、又數十年の後頗
廢して僅存を寛永壬申年城主田獵してこに至り
小祠と林樹の間に見る左右何れの神あることなき者ふ村
老とめりてことと問ふ言らく足利將軍の建る所あり即
心願と發して土木とありて正殿拜殿神庫華表と造る寛
永十一年初めて祭儀と行ふ同廿一年垂水藤澤の村三
百石の地とつけて昌泉院と以て別當とす今寒松院と云
いやく山の上あり千歳山八幡宮と稱す、今の地は近し

一志郡垂水村に屬し蓋津の城の街に
ハ奄藝安濃一志の三郡に跨るなり
秋の宮 春の宮

とのひ后宮と
秋の宮
綾巻 きの部砦
藍の花 葉蓼似
て七八月迄

紅花とわし
蘆の花 説文曰其花凡小遇て吹揚れ電あり
のど、地小聚るハ繁比あをく
茜

堀 時珍曰此草東方小在と少し西方の多小をまき則
西草と以て茜と名十二月苗と生蔓延る數尺

方莖ありて中空し筋あり外小細き刺あり數寸一節節
毎小五葉面青し背緑り七八月花とひらき実と結ハ和

漢三才圖會苗ハ赤根を以絳を染へ
通草 楨葉白草
の實長三三

し近世種方木と以て茜より代ふ
四寸核黒く瓢白しこもと食ハ甘美南人謂て燕覆子
と名或ハ鳥覆子と名く七月と過てこもと米ハ時珍

曰通草ハ莖小細き孔あり
栗引 取収と
溢蚊 滑替
引と云、

八月の溢と蚊肉と割と云
藪子鳥 和漢三才圖會倭
名阿止里此鳥帝

小山林不棲不時群飛して寺院の叢林よ出る事ありて千群と成り天と蔽ふ状は雀ふ似て大く背太し頭頸蒼みく折色の斑あり領黄赤して背白し背蒼赤亦帯ふ黒き斑あり日本紀天武天皇七年鴉子鳥天と蔽ふ

て西南より江鮭まのこ 輝鱖草魚鮭ほな 和名阿米あま 東北飛ぶせと琵琶湖の名産に大ききもの者

三尺小き者尺ふ満さるものあり儼鯪魚の如し江鮭は六則江湖の鮭は河鯪魚より臆多し湖水あての佳品は秋は

月雨水河小より湖中流れ入るべき多く川より新走あせり 上る築と構へ或ハ大なる撞網と以これと取る

新酒の尤早き秋の暮あき 湖東問答あま 問云春の暮小對して暮秋と心得

もの新走と云る作者多しとりり尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり春の暮ハ暮春の事侍る也や答云春の暮ハ暮春

又一片小限るべし一句の趣をもよほし○秋の名暮といふこと文字の數もさきさき句あはれ畧して秋の暮

と云ふ近より下五文字ハ秋の夕と云ふも九月

温酒

九月九日ハ秋分也此温酒と飲め病と得もさき

より酒と温の用よりあり栗田口祭あぐちまあり 十五日増の丹白川橋の東

世諺明答を引り八天王の祭に祇園牛頭天王娑婆羅龍王の女頗梨女とめりてうとあるハ王子ありて八將神

穴織祭あやオリまつり 十七日摂州豊嶋郡池田村民家の北を山上揚陽羣談あやオリまつり 穴織是服の両社

其間僅十町むり日本紀應神天皇十四年春二月百濟王縫衣の二女と貢ぐ真毛津の云同三十七年春二月

戊午朔阿知の使主都加の使主と具小つりて縫工女と求めむ阿知の使主高麗國小至して更ふ道路とを

道と知る者と高麗小乞ふ高麗王乃久礼波久礼志二人を副て道守者とてこふ小ありて具小通むること

具の王工女兒媛弟媛三織穴織と興ふ同四十二年春二月午朔阿知の使主具より筑紫小至るの時宵形大神

工女と乞ふ故小兒媛と以て宵形大明神小奉る今筑紫に御使君の祖に既りてその二女と率て摂津國小至

る武庫ふ来て天自崩さゆふ及むも大鷦鷯の尊
 小献るこの二人亦の後今具の夜縫蚊屋の衣縫是より
 仁徳天皇七十六年戊子九月十七日小縫媛二人も去の
 てつらふらふと祝ひ祭て縫媛の神多と毎年九月十二
 十八日と穴織吳織兩社の祭礼と和衣荒布の神供と
 てととと神衣祭と秋と社家の説ふい應神天皇春二月
 縫媛と具ふ **秋の花** いふ不審言の休小よる
 求むとらる **秋一入の花** 菊の異名とらる
 草ふらる **秋一入の花** 分類藻塩草小
 とはゆとらる枯るまで野小残とらる秋一入の花
 是古き物ふあり或説ふ菊と秋一くとよむと云今校
 ざる小埃囊抄云聖一國師重陽の佛事の時にき童
 の花と北の籬小植てノントくと南の山と見るとよ
 しりてとらる是ハ古文前集小陶淵明採菊東籬下
 悠然見南山とらる詩と東と北と植とぞ傳
 寫の誤あるべト埃囊抄ふよる藻塩草 **赤小豆**

大抵土用の中種とらる **秋の葉** 御今
 蔭九月月れれ **秋の霜** 初霜ハ
 小綿絮を以し損ふの芦花の絮を以て父ととと出さんと
 す損が白母在世ハ一子單多り母去ら三子寒しと遠小
 止 **鳥** 本草別録鳥折して熏じ乾を甘温
 朝氣さむい朝寒きいと **朝寒** 御今
 九日の前ふ打初て宇治の **網代打** 藻塩草網代ハ各
 網代人供御小奉るあや **秋過て、秋暮て、秋**
 そ隔る、秋小後る、秋より後、秋の別
 秋の名残、秋の限、秋と惜、秋深き、
 秋の湊 **七月ささか小姫**
 不及 **七月** 異名

姫の丹之内、が小と、蜘蛛のこゝ異名分類開元遺事小蜘蛛

と以てまこと小き金盒の中、納め曉ふ至て開きて蜘蛛の

糸の稀密あるを視て巧の多少を得たりと云ふ、長明寺

季物語に、蜘蛛とて、さきゆりて、その其つこむり、或

ねづひの糸、ふいと引ゆるると、雨とて、私めゆづひ、さき

つとを、さきとあるべし、さき、さき、さき、さき、さき、さき

餅先代田事記七月七日織女とまらる、又牽牛神あり

その祭供、小索餅と以て、是糸織の象、小表、す、並

犂麩と以て、これ、鋤耨の象、小表、を、十節記昔高辛、小

子、七月七日、小死、まらる、是鬼神とありて、人小瘧を病む、其

存、まる、日麥餅と好めり、故、小その死、まらる、日、至て、索餅

と以て、まらると祭る、後人、これ、索餅を、まらると瘧疾と思ひ

刺鯖の糸、小出ツ、澤桔梗大和本草、莖、大なりて

葉、小、つる、が、如し、花、ハ、桔梗、小似て、淡碧色、桔梗、あり、小、あり

水、辺、小、生、も、秋、花、と、ひらく、根、ま、と、桔梗、の、どし、又、浮、菖、の

花、も、沢、桔、梗、と、五味子本草、五味子、皮、肉、甘、酸

味、あり、て、其、味、其、故、小、なり、春、苗、と、生、し、小、なり、葉、を、小、

引く、其、長、と、六、七、尺、葉、大、と、同く、杏、の、葉、に、似、たり、三、四、月

黄白花と開く、蓮花の状、小類、を、七月、實、ある、莖、の、端、小

叢、生、を、豌豆、許、の、大、さ、の、こ、を、生、青、く、熟、ま、ら、紅、紫

さ、ら、萩葉の細、く、あり、と兼三秋物哉、生、明

二月三日の月と云ふ哉、始、前、の、月、大、あり、と、二、日、小

明と生、ま、前、の、月、小、あり、と、三、日、小、明、と、生、ま

生魄十六日の月と云ふ、尚書曰、望、後、月、明、死、て佐々

魄と生、ま、の、月、の、照、さ、る、所、を、魄、と、い、ふ

良衣壯士月の別名、萬葉、山、乃、葉、乃、佐、々、良、衣

壯士、天、原、門、渡、光、見、良、久、之、好、藻

不皿の光、皿の影御人十、不皿の光、中、月、小、あり、

さ、ら、け、き秋の月、君遷子、の、糸、下、小、出、ツ、

狭牡鹿和名抄、牡鹿、和名、佐、子、之、加、和名、正、監、要、略

頭、宗、天、皇、紀、に、牡、鹿、此、小、云、左、鳴、子、加、和、訓、の

秋

と

と

と

と

と

狹雄鹿こら狹山狹野さやまをさへての詞あり○萬葉こら小牡鹿こらと書るはちひさき鹿とひらあしこらの

ては、**猿酒** 猿菓と取て山中樹木の虚或ハ常腹のちり、ちり 四つ小貯へ置き、数日の後熟し

酒の如く味甚甘美、これと猿酒 **八月** 埴天神 さひこんといふ獵者かひや往々見て竊ひそく食む

祭 三日 泉州府志 泉州埴常樂寺天神の像、菅神太宰府とらに在せ、日自ら作つくるもの七軀の像の内

也といひつゝ、長徳二年或ハ延喜年中正月海濱ハ漂うひ来り、より此所あちに安置あせし、或ハハ昔塩穴の御淡村あり、故ふ

塩穴天神と称なす、中世北の莊あり、と勸すすめ、文明二年菅原為長あの記云、和泉国毛須深井、草部土師、向井

塩穴、高石、菅家の氏神、天之穂日の命、以来の旧領あり、為長卿の真跡、今按ある、小塩穴天神ハ、天穂日命あり、後

九条殿あり、小菅丞相と合せ祭ある、○例祭六月十二日と夏神樂あり、八月三日と秋神樂ある、この日参詣多し、神輿埴七道濱あり、

東島あ渡御即日還幸あ、先板の諸あ三五の夜

つあの部月見 **西院祭** 廿日春日の神あの祭、郡ああり、四条通西の上

の条小出ツ、手四町計あり、云、西院村の西平林村の中あり、名跡志

按ある、小西院の号、中頃此所の西あ齋院居あり、故、小此辺の名あとして齋院と書ある、後誤ありて西院あ作

る、秋、○例祭八月廿八日神輿二基あり、其一あツ佳佳、神輿あ村の西あり、**紀事** 柘榴 時珍曰、榴あ、丹實

西院ハ幡祭あり、未詳、**柘榴** 垂ありて贅瘤あの如し、事類合璧、榴大あくして盃あの如し、赤色あ黒き斑あの

點あり、皮中蜂の巢あの如し、黄膜あありてことと福あ子、人の齒あの如し、淡紅色あ亦潔白ありて雪あの如き者あり、潘

岳賦云、榴あ天下の奇樹、九州の名果、千房同膜あ千子一、の如し、飢あと禦あき渴あと療あし醒あと解あし醉あと止あむ、**比史**李祖

收傳、元魏安徳王延宗李祖收と納あて祀ある、後あ帝李、宅あ幸あと妃あ母二の石榴あと帝の前あ若あむ、人其意と

知ある、祖收あ云子孫多あうしてを欲ある、○今鬼あ子母、神と祭ある人あれ、備ある、小榴あと以あてまある、千子多、**三七**、子の義あらる、花の形あハ夏あのこの部あと

の花

本草三七春苗と生じ夏高サ三四尺葉柄
艾ふ似て勁く厚く岐尖なり莖赤き稜あり
夏秋黄花とひらく蕊金糸の盤紐のごし愛を成し
氣香しと花乾くと紅い絮とて乾て苦賣絮のふと

烏鳳

和漢三才圖會今云三光鳥近年こまあり紺
碧色背の上赤と帯腹白く羽黒くして微
赤く頂の毛乱起て頂上冠あり眼大ゆて臉青く其
尾長き者一尺半計ありとてく廻轉も其声清越日月星
と云ふ如し今三光鳥と稱も其雌雄ふ似て浅く尾短く
俱ふ世男悍雜と音る時か一鳥鴉の来こきハ羽と
振ひこくと拒む或ハ其眼と啄く其巢鞠の如し
兩端小口あり表より入裏小出尾の長きと以然つ

鮎その部落
鮎の糸出

九月坐摩摩祭

記夏のさ

の部坐摩の御扱の糸小注しられ爰ハ累々例祭九
月廿二日と見と相嘗八十島祭と号と新嘗の神事ま
廿四日社説云江州滋賀郡琵琶湖の南
逆髪祭

四の皇子蟬丸の社蟬丸及此所より故小物し

廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山左
近し奉て各涙雨を滴て帰京を残り留る人白川の紀

則長基經古屋の美女師輔云爰小於て姉の宮深く
蟬丸をまとい密に禁闕と出て相坂山小来り蟬丸と共小

花月と清賞し旅駄の山石川陸を偏歴して雲髮緑
髮顛倒と國人御名を逆髪と号く天慶九年廿四日逆

去りし故小毎年九月廿四日の祭祀今小至て怠る事
あり姉莞去の後蟬丸とてのハ一社小合せ祭と云昔盛

云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人とてハ女説ありは
後撰集のゆくものつるもとある哥の詞書小あき人の

とてと有やてあるハ諸書小論ありとていもよし水
戸學士の一説ハ唐の南朝元帝の詩と延基とつり延基

の三男襦褌の時より極ち其上替とらハ遂小是と相関
とつ所小捨多小此子の名と彈兒とつふハいふんと多ハ幼年

より疑とてく彈せり故小のく付し今此事より日本の
蟬丸の支と考つる小延喜と延基と千の音同じし彈と

蟬と字の形相似り又相関と相坂の関も相似り又延
秋

喜の御子と捨多くと彼是同意、彈鬼の事ハ古史考業
の三十一ふとえうりと云、**俳諧歲時記**按ぞふ逆上六坂上の

誤あるべし、寺門の説ニ云、江州相坂山関の明神二所、一所ハ
坂上ふあり、一所ハ坂下ふあり、云、元坂上の社をいひ、

誤りて種々の説と設けともあらん、又云、二所より道祖
神と祭りて以て関所の鎮守とて朱雀院の御宇蟬丸

の灵と當社小合せ祭る、依て土俗蟬丸の社と称を下の
社の前ふ井あり、関の清水と名く、清水明神と号、祭礼

九月廿四日上下の社同日、**皂角** 時珍曰皂莢樹
神輿二基、云この説穂あり、**皂角** 皂、故ふ名とを

廣志小云と鶏栖子といふ樹の高さ大、葉槐の葉
の如し、瘦長して尖、枝の間小刺多し、夏細き黄花と

開く、実と結ぶ、三種あり、一種小ありて猪の牙の如し、
一種ハ長くして瘦薄く枯燥て粘り、其樹刺多して

上、かきくちらむらぶら、**櫻紅葉** 櫻のあもも
ふし、**珊瑚** 仙夢珊瑚仙 葵三名

同物、園史兼山茶の如く小、夏白花と開く、秋紅の
橘の如く及ぶ、葉の如く、秋あり、葉長く、葉あり、実

日とと夏、陰葉宜く、本草綱目雜草の部百両金、
此と同物、**和漢矛** **栲栗** 江東小栗

金仙靈草 禱云、**七月**
北野御手水 六日山城國葛野郡北野天満宮の

帝闕より北小わるとを以て北野と名く、**紀事** 七月六日
北野松梅院御手洗と神前小供を松風の硯小穀の粟

と添てると供を松梅院の、**幼奉** **北野煤拂**
或ハ故障ありと云、ハこの義ありと云

雍州府志 毎年七月七日北野社内外の陣小あり、所の神
室と西の間及び幣殿会所不出し、と曝を、その間小

宮仕内外の陣、**乞巧奠** **名目抄** 今の俗キツカウチ下
の煤と拂ふ、**乞巧奠** 云ハ不足言、**乞巧針** **乞巧瓜**

乞巧奠とい人々其業小、巧とあらんとを願ふ意あり、
開元遺事、七夕小蜘蛛を以て金盒の中小納曉、開て蛛

絲の稀密を視巧の、**乞巧針**、**乞巧瓜** 新楚歲
多少を得、**秋** ささき **時記** 七

夕小婦人七孔小針と穿ら或ハ金銀鑄石と針と瓜菓
を庭中小陳ぬ巧さをたふ蟻子たりて瓜の上小明を
ハ明を得 九枝燈 漢武内傳七月七日帝宮掖の内
と掃除し雲錦の帷を張九華の

燈と燃を西王母降公事根源
燈堂九本かのく大あふ

禁裏御燈籠

滑紀雜談 當世小おいて禁裏御家門方より燈籠と
献せらる奇巧金銀と鍍り花鳥人形木の美と入せり
是と南殿ふらふらふどのころより掃きもあき事

十四日ハ禁門と赦して賤の男女と庭上入是と

拜せ 切子燈籠 和漢牙面金一種岐里古燈籠
聖天宗ホ小孔と用ふ飾る所

紙繪甚 逆の峯入 紀貫七月初大峯の修驗道
山伏の客僧大峯より京師小

華美 出て大ある法螺と吹き自ら金剛杖と拏う々と瀧靈
しと齋料とふ或ハ前鬼木鉢或奈良硫黄木の物を
目那の家小贈る九峯入の法本山派熊野より大峯入

逆の峯入といふの春の部順の峯入の条のちりりといふし

○貞享式 峯入の類ハ順逆といひて春と秋とと断れ也
今の俳諧の省法小よらハ秋季すよつてハ

秋より春季よりとてハ春とあひへん 木曾川
小よりて名る 十日七月九日より十

日小至つて京 師清水観音小諸人恭詣と夜小入て恭詣殊ふ多し今
日の恭詣平日の千度小あるとつ江戶淺草早の観音と
同日よりて恭詣多し 十六日 撰洲四天王寺此

俗四万六千日といふ 經木流 東僧坊の前小
亀井の水より白石玉手の水と号をむり白川法皇
の上東門院當寺小詣し時其水盤小亀の形あると見て
白石玉手の水と以て亀井の水と詠むこれ其早の起る
ところあり 新古今 濁るもあき亀井の水とむをいひけて
心のちりとそそぎつらりねの七月十六日世俗經書堂小
おいて經木の表小法名と記し此水と手向て灵魂と吊
と撰陽群談おもとそそり昔八月毎小六斎の日講堂小お
いて經と誦し恭詣の戒名と名帳小記し面向せしといふ和

秋 き

泉式部恭詣のとき名と名薄ふまゝとて詠むも奇粹

とつて一と一はもとねごとつてふき身の敷ふりぬまの

経木のこの名 **桔梗** 時珍曰桔ハ結ニ其草の根結實

薄の遺意也 **和名抄** 和漢三才圖會 山野及ひ人家ふ多くこれと

種九紫碧の者と桔梗の正色とを又白花あり紫白相

交る者あり單葉あり八重あり **古今** 物名秋ちう野

ありふたりちうのの おけること葉もひらきうゆく友則

天和本草 本草四十一卷 竈馬の附録よの一名

蟋蟀 蟋蟀又蟀とて立秋の後夜鳴くイナゴ不似く

翅あり角あり頭ハ切ると如く若くは俗まづき

とて西土の方言名ツツとて古奇ふきりくをせ

は是秋の末までよく故古奇は霜夜よめりハ

鳴あをむむらぬもの我きくはまどハ華つ虫ち

るむすげの庭鳥ホの異名あり頭字の部ふちて淺

兼三秋物 銀虫 月とて入階煬帝云 既望ハ

さよひの糸 **既生魄** 既ハ魄とまを十七日の月

ハ併せ註 **暉** 月ハ魄とまを十七日の月

素 **文選註** **金波** **前漢書** **霧** **尔推孫炎註** 天氣

と雪とてハ地氣天小雀して應せざるを霧とてハ **和漢三才**

金 雲霧の二種皆露の凝する者秋月盛んありて其降

や朝と夕とふあり甚と多きとハ菜蔬草木凋枯

と霜雪より烈し **藻菰草** 霧ハ春夏も詠どつし秋ハ

限るべからざとつてとて連俳ハ霧とむりハ秋ハ雲御抄

の如く春山の霧ふまるとる鳥又夏霧とも万葉あり

と云俳諧とて春夏の季ハ結ば春夏ハわく

べしハ朝霧夕霧別義あり胸の霧ハむの部ハ注 **霧**

の **芭** 霧の立とて **霧** 野原ハ下ア霧

とつて別ふき物ありハあらを霧不

の香とよきと詩ふと作るハ只秋霧の

霧 **立**

秋 霧

人 **八雲御抄** 霧雨

霧の深き所ハ雨の降るべし

樹ト示熟シ美キ 伽羅木

一名透徹材形長く四微尖り肉中沈香の

味脆ク美シ 錦馬 鹿の異名あり

八月 北野祭

三十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼よりて幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日小定らる五日ハ

後の国忌ふよりて **拾芥抄** 北野祭今ハ四日ハ五日例大臣より始て納言参議に至りて大頭と称を催し中

あり、料米六十石、○祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿 呂吉祥女菅家の北の方都の西南吉祥院小住ぬひの御名あり 鷺水記曰此祭其

美麗ハ神輿下立賣の西御旅所小移し奉る、其廿余町の地ハ蜀錦と敷き供奉の葎綾羅の袂とつら

管絃ノ声雲井ハひびくる **碁** 四手打 綾卷 字林キ トリ、當社の古記あり、衣打 小春と持

とつ、古人衣と持小両女相對と一杵と執り米と養

其便と取り和名抄唐韻云碁和名碁掛衣石ハ作碁掛杵和名 ○綾卷衣と表末ハその緒と巻て打く、四手打

雲御抄ハまきり小打衣とて打ともよめり **银杏** 時珍曰银杏其葉鴨の掌小似り、因て鴨脚と名く、

の初茹て貢ハ改て银杏と呼其形小杏小似て核の

き小因て今 **木の子取** 木の部草符 拒引 白果と名く、

啄木鳥 一名トツツキ 時珍曰此鳥樹と對ハを食

る者雀の如く大なる者鴉の如し面桃花の如く啄足 皆青色爪剛く嘴利く錐のごとし長さ數寸舌味より

長し其端小針刺ハて蟲と啄得るとときハ舌と以て釣 出ハしことと食ふ、○昔王造小天王寺と建し時此鳥群来

て寺の軒と啄キ損ハ故小寺啄と **菊戴鳥** 和漢 名く守屋ハ怨ハ鳥とありしといふ **九月** 菊 上小黄毛ハ花の如き者と戴キ故小名く **秋** 秋

八雲御抄 霧雨 霧の深き所ハ雨 木淡 降るべしと云

人 樹ニ小熟し美き 伽羅枳 一名透徹枳形長く四く 枳と木淡と云ふ 微尖り肉中沈香の理の

如くありて 錦馬 鹿の異 八月 北野祭 四日 味脆く美し 名あり

二十二社註式 一条院 永延元年八月五日 祭礼と云ふ 幣あり 後冷泉帝 永承元年八月四日 小定らる 五日ハ母

後の国忌小よりて 拾芥抄 北野祭今ハ四日ハ五日先 例大臣より始て納言参議に至て大頭と称を催し申

あり 料米六十石 〇祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿 菅 品吉祥女 菅家の北の方都の西南吉祥 鷺鳥水記曰此祭甚

美麗ありて神輿下立賣の西御旅所小移し奉る其間 廿余町の地ハ蜀錦と敷き供奉の筆綾羅の袂と云ふ

管絃の声雲井ふひらる 礎 四手打 綾巻 字林直 といふ古人衣と博小両女相對して一杵と執て米と舂

其便と取る和名抄唐韻云礎 和名礎 博小 杵 都知 〇綾巻衣と表末との緒と巻て打く 〇四手打ハ

雲御抄云きり小打衣とて打ともよめり 银杏枳實 〇まろ打と云ふ 槌の名ハ槌を打と云

時珍曰银杏其葉鴨の掌小似たり 因て鴨胸と名づく 宋 の初始て貢を改て银杏と呼其形小杏小似て核の

き小因て今 木の子取 木の部 茸 拒引 白果と名く 一の条小出云

啄木鳥 一名とらつき 時珍曰此鳥樹と劉劉を食 取食故小名く禽經云小

る者雀の如く大なる者鴉の如し 面桃花の如く啄足 皆青色爪剛く嘴利く錐のごとし 長さ数寸舌味より

長し其端小針刺のつて蟲と啄得るときハ舌を以て釣 出しことと食ふ 〇昔王造小天王寺と建し時此鳥群来

て寺の軒と啄き損と故小寺啄と 菊戴鳥 和漢 名く守屋カ怨冥鳥とありしといふ 菊戴鳥 三才 番会状眼白鳥小似て背翅青緑色頂の 九月 菊 上小黄毛花の如き者と戴く故小名く

花の宴

九日青藍云俳諧歲時記小周の穆王三妻就山
の時名と彭祖と更て文帝小此術と授け奉る文帝の
術と受て壽七十歲今の重陽の宴是此説妄説の甚
しといへし列仙傳小彭祖ハ帝顓頊の玄孫姓ハ錢名ハ鏗
周小至了八百歳ありて衰老せし穆王召して大夫とせしと
す病と称して與らる後遂小流沙の西小姓彭祖の傳カ
くの如し慈童より事と以て附會せらむれハ元野史小
説の詩話より出づ菊花の宴ハ秦漢以來より既あり云
論ひくり實よし妄説附會の甚しといへし云々
本朝文辭ハ視賜群臣菊花詩序云紀綱言採故事於
漢武則赤黃挿宮人之夜尋舊跡於魏文亦黃花助
彭祖云々又世諺問答と魏文の説と引きたるハ古くより
いふに云々女談とてハ元風雅の道ハ事の虚實ハ
いと其趣のちうき小隨ひとて云々といふと
まことハ附會の説といふと云々云々
菊紀 公事根 四脚竹
もあつてハこの部重陽の宴併し云々

菊花の酒

高小登の統 茱萸の袋

部重陽の宴の条

全文ちの 菊花の酒

諧記

汝南の桓景費長房小隨ひて遊學アせらるる景年
長房謂曰九月九日汝が家中災わらん急小去し家人各
絳袋を作て茱萸と盛り以て臂小繫て高き小登りて
菊花の酒と飲め此禍ハ除くべし景言の如くし景年
家山小登る還て見ると雞犬牛羊一時小暴死と長房
これを聞いて曰此まも小代るし今世の人九日高き小登りて
酒と飲婦人茱萸の 菊の節句 栗の節句 菊酒と
囊と帶蓋以小始る 飲栗と

親戚朋友

互小贈る故小 菊比着綿 御湯殿記九

菊の節句

栗の節句 菊酒と 飲栗と

殿の南階

小菊と多く植其菊小赤白黃の染つこと

丸め菊花

小作して枝々小付るし今日葵と菊小販へ

らるる

○青藍按むる小菊小者

くハ菊の露

とて小移しとり面とぬみ

葉とせし

後撰集とあり小まて侍る時九月八日

伊勢が家の菊

ふとて着ふつり

秋

き

伊勢故宮... 藤原雅正... 紫式部日記... 九月菊

源氏枕の草紙... 菊の綿を... 菊の部九日小

龍 菊の部九日小... 時珍曰陸佃埤雅云菊本

云九月菊黃莖あり... 和漢三才圖會本綱

見草金草... 千葉單葉心あり... 尖秃の異あり

草、蕪我菊、承和の色、殘菊、野菊、くらもちわ

闘菊 御記云仰侍臣令新菊花か三番

相爭勝負以甲時各方領花參入... 菊の洲 宿の菊

金目貫 百菊の内より番、秋

牡丹 天和本草 秋牡丹 外 農圃六書

貴船祭 九日 神社啓蒙 山城國愛宕郡鞍

馬の北一里むりふらり、祭る所の神三座高麗の神長水徳

訶遇突智と斬て三段とせし其一段高雷龍と云ふ改曆雜事記九月九日小兒

貴船の社の船王命と高雷龍と云ふ改曆雜事記九月九日小兒

咳逆疫と云ふ死亡せざる者多し仍て相者としてトセリ云貴

船の神の祟まふ所と云ふ於て弘仁二年百六代後秋九月九日

疫と追ひし今貴船の神輿と稱して洛中へ振るりの是此の

遺意と云ふ今以来毎年九月九日小兒相集て小き

神輿と作て貴船祭と稱して市中

北山祭 廿日六所の社

洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中より祭

神詳あらむ例祭九月廿七日 名勝志の説北山天神祭九月廿

六日この拜殿於て三番あり正月廿七日六所明神小猿

樂のり菅見記九月廿七日等持院村祭 本社等持院鹿

苑寺小相隣る故ふまじく北山祭と稱す類聚國史北山の

神社大北山村あり天長五年八月天地震災ありて

丁丑北山の神小祈ふ名勝志北山八高橋の西北四五町小

り高橋北野平野の洛陽より成亥のころ北方より

ととと古より北山と稱を疑らむ村名小

も吹草北山祭廿五日と記諸説迭ふ異 金柑

時珍曰金橘実と結 本草孟經橘の如して

ふ秋冬より黄熟す 和鼓 小く高さ五七尺葉橙の如く

刺多し春白花を生ず 大和本草 枸橘今案も

カラ多子とのふりの其木より多き故小人家植て籬と

盗ふ備ふ昔より國俗誤りて是と

和鼓枳實と云ふ葉小用ふ非多 七月 祐天

寺千部 十五音より 明顕山祐天寺江戶驪黒あり

廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五

日より廿五日まで阿弥陀經 夕顔の實 品類

千口修行この節赤詣多 ひまご 多し

○瓠 長き越瓜の如し首尾一のて 懸瓠瓠の

一頭より腹あり長き柄あり者として柄あがくしてひまご

まぐ ○瓠柄あがくして 田大形ち扁き者 ○壺瓠の

短き柄有て大腹ある者 ○蒲蘆壺の 短き腰の者 ○

其形状各同くうらむとのて 苗葉皮子 性味ハ

右本草時珍の説 ○乾瓢ハ瓠畜と云生 日小

又塩とひく ○おのり

うけおきて日小 兼三秋物 夕月夜 請

の大小ふよりて朔二日の夕より出現する事分明十日
あまりの頃までも暮は出るわどの月と夕月夜と讀ふ
らそ **弓張月** **釈名**弦は月半の名其形一弓ハ曲
しい 一、一、一、直くして弓の弦と張る如き

夢野の鹿 扱津国凡土記云雄伴郡ふ夢野の
父老傳云昔刀我野ふ牡鹿

にりその嫡と此野ふ居ふその立女の北鹿淡路國野島ふ
居る彼牡鹿屢野島ふ往て妻と相愛と既く牡鹿
来て嫡の所ふ宿と明且牡鹿その嫡ふ誥て云今夜

吾背ふ雪ふりおけりと見き又とと草生ふりときき此
夢何の祥ぞとの嫡ま夫の妾の所ふ向往きを悪と乃
詐と相して云背の上ふ草生る矢背の上ふ射るの祥

又雪ふるハ白塩穴ふ塗の祥淡路ふ渡らむ心船入ふ射
られて海中ふ死人謹て復往事ふととこの牡鹿感意ふ

勝も復野島ふ渡る海中行船ふあひて終ふ射殺さ故
此野と名づけて夢野とら俗説ふ刀我野ふ立る真牡鹿

夢相のまふ **河社**契仲大人云仁徳記ふ草餓野の鹿
の夢のこいあはれと云ふ

よりて夢野 **加菱** この部菱取の
糸もふ **九月 柚** 説文
柚ハ橙

小似て酢し柚の皮ハ **柚味噌** 滑替雜談 近世編笠
柚味噌といふものを作る

抽出し乾し置て柚味噌は用ゆる所の味噌と其行ふ盛り
包み編笠の形ふありよく蒸して用ふ **行秋** 行秋の
行秋

園の茶店閑東何某始て制衣をも所 **行秋** 行秋の
行秋

の部、こ由 **七月 益母草** 諸麻俗目
つらくせマ

そふこと云莖ハ胡麻に似て葉ハ麻のよし其葉兩々相對
して一層ハ東西一層ハ南北とくふハ十字字なり七月紅

紫の小花を開く又微白の物あり本草ハ **八月 名月**
ハ花四五月と記きて土地の違ひあるべし

の部月見 **眼白鳥** 和漢三才圖會 頭背翅尾黃
青く鮮明俗ハハ夜眼黃
是は眼の睡ふ白圈あり胸臆白くして柄名と帯ふ
腹白し性よく群とあそぶ友と好て樊の中ハ在るハ一様

小集の相依て互に推し、其中一雙飛出群を抜るさまを、
餘まゝ相推を、又中より抜去初のこころ、毎ふ好む

七月 鼠尾草

時珍曰鼠尾草の形を以
名小命、韓保昇曰鼠

尾草の端、夏四五穂を生ず、

水懸草

増山の井説々
なり、貞徳云

車前の如し、花赤白の撞あり、

水影草ハおもく七夕ふより、水懸草ハ縮の事

三井

ふり又或説ふことごとく、聖霊小水むこころなり、
十五日江州長等山宗福寺、又蓮地福院々

寺女詣

大津の側あり、園城寺又三井寺と

称さ、園城寺ハ御園小隣ると以て名と、三井寺ハ西巖

不灵泉あり、天智天武持統三帝即位の時、この井の水を搦

て浴湯ふ献す、因て御井といひ、後小改し三井小作る、是三皇

の浴井龍華三會の義也、この寺平日女人結界の山、六七

月十五日女人の恭詣と許し登山せむ、れと
妙法寺

御狹山祭、信及諏訪

の火、の春は出ツ、

神の祭、今在記、上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ坂

入姫命、或説小御射山の祭ハ、薄少て神殿を造る、其外

人の家も祭の程ハ皆薄少て作る、又いふこと云もまきこのこと

日本紀才、野槌の神ハ、五百箇野蕨の八十五籤と採り、

是ハ天照大神と天の岩戸より出し奉る、世時のこと、うて

信及諏訪とて山祭ハ、薄少て以幣とす、故小くらと川信濃

どりのあり、○此祭小遠笠懸と射て進らまると、其始、田村

將軍の安倍高麻呂と伐んとす、信濃國に至り、此神小

祈り申さん、小握の葉の紋付し直垂着ると、人湖の波二

水馬と走りせそ笠懸射りしと、今笠懸射て神事とす

る、この所謂あり、うて、越波とも記して諏訪ともありと

縁起不出當社ハ、桓武の御宇、田村將軍の建立こといふなり、

この神、まゝ、田獵のことと主とあり、○穂屋、御狹山小

作、穂屋あり、この祭ハ、貞徳説ハ、八月、藻塩草七月廿日

と、増山の井ハ、七月廿七日と、此説多し、まゝ、まゝ、

新式秘抄云、穂屋つら、諏訪祭の、諏訪祭ハ、

年小七十五度あり是との一ツ、みさ山桑山山城望取の近所
のいふ説ありと名所方角抄哥枕秋の縁書示ふ信濃と
まの様蓑雪ちや穂屋のうら蓑荷の花周礼庶民喜
のまゝさの菊のうら芭蕉草と以て毒草

と除く宗懐謂喜草則蓑荷の花是の時珍曰崔豹
古今註云蓑荷其子花根の中小生む花は敗れさ時

食ふへしスキ兼三秋物身小入滄方生秋夜賦
氣入肌以寒涼

瀟林蕭索甲子紀行のまじし三日月
新月朏魄文選

とらふふ凡のまじ身の芭蕉月賦出礼記の注月三日ありて魄とま向云朏ハ

盛明あり魄も地と出て明生スの新月纖月玉鉤

蛾眉磨鎌ホ三日月とい入此外種々の譬喻詩々水

多し何事のま似む三日の月芭蕉

ホの諸名あり時珍曰東方虬賦云其鳴くと長吟

秋水梨形ち青梨似く褐色蚯蚓鳴歌女秋名王龍地龍子寒蚓

百合とあり蟲蝮と火とありて雌雄とまふ

蓑虫鬼の子和漢子面会諸木の嫩葉漸く紅葉

いり糸と吐き用て窠と作る長さをり波濤と

燃る艾柱の如し毎小枝小纏る其虫も又黒色破段

ありて首と時々小首と出て嫩葉と食ふ其首も

動も貌蓑者と公羽小彷彿り枕草紙のむこ

哀むのうみ々多くおも似てまふまふまふまふ

とありんと親のゆきなみきたせて今秋凡のかんさ

音なるまり八月のうらふおもむむちあくとはうれはおれは

あんとも誓也と父とて辭あり女の舞あり

季吟云蓑虫とむりハ八月三村祭三村或ハ水

雜く鳴心あれば秋、秋 み

刈塚の庄塩穴の下糸開口村あり住吉日記祭の神伊

非等草の御子事勝食勝國長使之後生玉十頭天王

と合祭の乃住吉の外宮とを故の朝廷二十五年小度住

吉の社造り替とありあゆみき當社も此義あり社地と

開口村と村原村の間俗三村大明神と称し本寺あり

原州府志社説云密來山念仏寺聖武帝の御願依り行基僧

開基せし所社領八十石の例祭八月二日と云三村祭

又大寺祭といふ木戸村開口村原村の産沙神あり大念

佛寺の鎮三津八幡祭十日摂州西成郡坂三津の寺

敷津難波津長傳へり昔行基寺院と建て三津寺と

号後神託ふより八幡と勸請と毎年八月十五日祭礼

あり社説あり當社清和天皇の御宇筑紫宇佐の神

男山の遷座のとき西海より初て至りあ洲中への旧跡

不祝の祭るといふ又一説小應神天皇行幸の地といふ

の撰州難波堀江の人月と此所小賞も各深更不及ひて

家小帰るごとく月見と称と又水引の花和漢字

難波の御被り称と八幡祭の面盆水

引草高と三三又葉楊柳似て秋長穂と出

小き花く紅色其莖四く織く紙然及び水引の如故

小名水始潤月令九月三度栗本朝

刈下野刈り山栗あり極て小なりて一年三度栗と收

故小三度栗と称も味佳あらむとせ及古のゆり

水木和漢三才面盆美豆木高きかの二三葉梅

黄色ちり一種土佐の山中より出る者高と二三葉粉

團花の葉小似て小し正月黄花と開く檳簇下り並

る子と結ふ赤色呼て土佐美豆和漢三才面盆

木とつるの実と賞して秋と和漢三才面盆

名ハ橘類の總名今單ハ太知波奈と称しかの包

橘と專果と其皮と葉とを乃蜜柑其実熟と

きハ蜜の如し故小名づくたまた草橘ハ准と

化して和漢三才面盆と云ふきありといふ此箇と

とらん九年母とつるもの其樹と移し水の紅葉

秋みま

川の紅葉ふ同じ、
かの部こまづし、
る
七月七夕
七日の夕
二

星 せい 牽牛織女大飼星 月令廣義 魚林大年記云天
河鼓彦星たけつめの河の西ふ星あり煙々こころこ

参り俱不出こまると牽牛こころ天の河の東ふ星あり微々
とこて成の下ふありこまると織女こころ世ふ雙星とこ

名抄 尔雅注云牽牛一名河鼓 和名比古保之又織女和名太伊奴加比保之 織女 和名太伊奴加比保之 故小

男星 とせいの 二星の屋形 やま 唐の天宝年中宮中七夕小
錦綵と以て結びて樓殿とふ

と高と百丈數十人と容へて花果酒炙と陳ね坐具と設
け以て牛女の二星と祭る。○本朝式は少く異七ツの棚とが

七種の舟 なふね 七種の舟ハ色々色々の室と
七色舟小積て手向

新吉原燈籠 あき吉原のりんどう 一日より 専保元
三十日迄 年江戸

吉原の遊女玉と菊と追薦のあり一年七月中の町の揚屋
各燈籠と出すは是より例ありて毎年此事ありとの燈

この節男女群集をこれと燈籠見物とあり燈籠ふあり玉
菊が来る夜 あき吉原のりんどう 聖靈棚 あき吉原のりんどう 鹿鳴草 あき吉原のりんどう

抄鹿鳴草 和名マダモト 故小此名ありありハ雲異本ふありな
草とあり教長集都方も咲ゆるとも慶安と名あり草ハ秋の

山 いふまゝ 石蒜 いふまゝ 大和本草 老鴉蒜とむむとれあり四月或ハ八九
月赤き花と下品此時葉少くて花と故筑

紫と捨子の花とあり○彼岸花とも あき吉原のりんどう 秋海棠 あき吉原のりんどう 名花譜秋
海棠一名

断腸花 あき吉原のりんどう 嬌姿柔軟真ふ美人の粧と捲くごとく性陰と好む日
と見ふ不即瘁く九月枝上の黒子と收め地上不撒けハ明春枝

と発し老根冬と過る者花発き更不茂る 大和本草 寛永
年中中華より初めて長寄不来るそれ以前ハ本邦あり色

海棠不似たり故小名づく あき吉原のりんどう 棹柳 あき吉原のりんどう 時珍曰柳一名添
秋海棠西瓜の色不咲ゆる甚置 柳即ち柳あり一草

とる者故ふことと柳とあり他の折熟るとときハ黄赤唯熟と
とる者亦青黒色搗碎き汁を浸しこまると凍柳とあり

諸物と滌べし、**澁取**

和漢三才圖會 抄淡造る法、析一斗、
故に漆の名有り、**滌取** 滌と去水二升、五合、
小盛り、宿を經て、こまこと搾り、渣も又水、
二日と經、やうやくととせ、露とこつて消せり、

兼三秋物

李白詩 秋露如白玉、**伊勢物語** くらたまの

とら露

何ぞと人のとひくとき、露とこつて消せり、

物、**新月** の余り注せ、**志まほし**

月の異名あり、**秘藏抄** 朝敷

けび、**常娥**

淮南子 羿不死の、
葉と西王母に請ふ、
後天文志 嫦娥ハ羿

姪娥とて竊んで以月を奔る、
不死の葉とを竊んで月を奔る、とれと蟾蜍とす、

真如

の月

法華を義 清淨真如、雲外の月のごとく、
如仏性ハ常ノ煩惱ハつゞまれても、
汚しを喻、**眞如**の月とす、
眞ハ不妄の義、如ハ不異の義、

條芒

宗祇曰 芒のききと、
綴芒 綴ハ白一のぶき、
忍草 忍ハ草の、
眞



箱云志の本草、和名抄の若草の類、垣衣と云ふ、
古き築地朽す、物の端古き軒端と云ふ、
山中の草と云ふ、
本草の石長生の、
時凋まむ、
の廟前にて、
是ハ垣衣よ、
良草と別、
千年ふ、
羊わ、
鹿の角ハ、
鳴く、
うせ、
頭字の部、
鹿とす、

新澁

七月の部、
鹿、
格物論、
鴛鴦、

鹿笛

獵人鹿角の根及び胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮と以苗と作て吹て北鹿の音と偽
る牡鹿匍匐して来て竟小涼小雁或ハ縮痒ふ入ふ
つれく草女のまらるる足歌よて作此獸田圃に出鹿垣設設と食糞

入らんと防んぬ小垣百虎通五者諸侯田狩
と設く是と鹿垣と云鹿狩所以ハ何と云田の為

小害と陳藏器拾遺鵲ハ鵲の如く色青く嘴長
除く鵲 沉塗の間不在鵲 速音 声とふも村民云

田鷄の化せる所○時珍曰今田野の間小鳥ありいまご
兩らざる時鳴く是ふり和名抄 鵲楊氏抄云之 和漢字

苗金按むる小俗小鳴字を用ハ蓋田鳥の二字と製する
秋○かゝ鵲 多識論杉雞 暮斗志義 ○時珍曰杉雞按む

小臨海異名志云關越杉雞 常小杉の樹の下
居頭上小長き黄毛の冠あり頬青正色垂縷のこぞハ鳴

突網職業盡 下総国萩原辺原中小鳴のり居く
動ハあるを七八間隔て竿羅と持て鳴の正面ハ

向ハ袖らいと付をくくると廻 廻て最初ハ大輪廻
又段々近寄まふ小輪廻 廻て六七尺小間近くあり

てかの竿羅と扱てより六七尺の所とありふわやまを
雁とせしてとる手練の業是と鳴突 山城鳥羽

以多しときけり荒野 鳴突ハ和訓栞 鵲
萱津のあまのじまを洲支 鳴の羽撞和訓栞 鵲

羽とまて音の高く聞ゆ其教も 百
羽りきとも敷撞とまも曉天 小必くわは直 小曉の

事ゆとと古今 曉の鳴の龍鳥 以有經

羽とまて君 夜我を教く和漢三才圖會 正字未

和訓栞 俗諺との田沢小居時魚 詳俗云志比良長崎の

の閑黙を ちめてたり人呼 比以半といふ按むる小鰯の状類して頭山く尾

鱗細ふ味もも取 似て大ある者二三尺九万疋と名く
其多くを 以ていふ越中 鰯養 と上とを相傳て云

中華の負やて四五月唐船多く入朝の時来て群遊を
唐船帰る時九州の鯛唐人肉食の腥き氣と慕ハ船
小著て入唐を夏月鰯 日本小多く冬月鯛 中華の淺

小多し大和本草 シイラ又名之ニキ 八月 白髭
筑紫をて猫シイラ の味美く秋 老

開帳

五日 神祇正景近江國白鬘大明神稗由彦也社
説比良明神と同体之○昔ハ開帳ハ元禄

中より止む今ハ只内陣と隔て宮殿と拜せしむるの事
四月上の辰の日祭礼神輿渡御あり、往古の神門石橋の
邊ハ今水中二町をうり湖水の沖あり、縁起あり、鳥
居のありし所と鶴川、らへ社頭より二十町をうり、河あり、鶴
川と号す、此川の北と鶴川領と入別當と白頭山延
命寺福壽院と号、毎年二月八講あり、開帳ハ正月

賀八幡祭

十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年
壬申近江國滋賀郡小垂跡八幡一

の御前八幡大井ハ今の聖真子是之唐光僧の形聖真子
ハ阿弥陀八幡大井の分身之○是山王七社の神なり、淡海
國滋賀郡坂本村あり、見瀬村の神社あり、
わ、今ハ山王祭の外神事あり、あり、
秋社 月

廣義曆書云立秋の後五戌の日と秋社とを註ふ云
社ハ后上あり、民々してとれと祀りむ以て農と祈ふ
死

活杖祭
此祭ハ京都猪の熊三条の南福連の神社あり、
雍州府志昔刑部省此四あり、獻と

断して以て死刑と行ふ故ハ刑死の人の為ハこの社を建て
祭祀と修せり、毎年八月神事あり、と云と死活杖の祭
といふ○千本引接寺壬生の地藏亦あり、毎春修むる
所の念佛會ハ元死刑人の為ハ修行せしむる始なりと
四手打、志ころ打
此の部礎の志とハ鬼の
糸小注と、 紫苑

蕪頌曰紫苑三月の内地小布て苗と生て其葉二四相
連て、五月六月の内、黄白紫苑と開く、黒子と結ふ、
菅草吾下紐介着有跡鬼乃志許草事仁思安
利家里 家持○鬼醜女草これ紫苑也、袖中抄鬼の

志と草とハ別の草の名小あり、乃志草ハ愁と志る、草
をハ鬼と志る、と志れん料ハ下紐につけられど更ふこと
ることあり、志草といふ名、只事あり、猶意つけられ
鬼の志と草とく、つらとつら、誠の鬼あり、つらと
つら詞ハ日本紀第一ハ不順也凶目汚穢之所と云、つら
と嫌ふ詞ハ凶の字とあり、俊頼抄昔人の親と云、
人あり、此とつらと孝行をせむ、親とせむの事歎き、塚
小詣て在が如く有る、年々つらめれど兄弟とつらと

秋 志

ゆきぬ其兄公ふつて私とくつりて思ひ入る
 やう只よ止む時ふし忘草の思ひとて思ひ入る物と塚ふ
 らんと植る弟はいつくことと恨と紫苑の忘れぬ草
 こと植る兄はいつの程うらまえて行ど世小萱草と忘
 草といふことと弟はいつくことと絶と詣てぬあの日親
 の塚ふ声あり忍るうらまえてわん君の塚と守る鬼
 神の兄は忘草と植て公ふつてうらまえて思ひ入るその
 家と思つて實に其許の思ひ草と植てま子く思ひ入
 至孝の天帝はいつくことと給ひて思ひ入る今より益
 わんこと夢ふ昔ふしきことといひて止る弟不思議
 おわい帰るぬそれ益あること夢ふ見る小連りて徳を得
 らうこととこの紫苑草は穉しきことあらん人の植てうらま
 え歎くことわん人の植てうらまえて草の故ふ思ひ入
 とらん鬼のうらまえてうらまえて鬼の師草と思ひ入る
 和漢三才圖會 推の木より生を大 和漢三才圖會 原野
 あるもの二寸より大小最生も 松露 松露草俗云
 松露沙地松樹あり陰處ふ生を松の津液と秋濕と相
 感して萌えぬ 狀如零餘子小似田く大

推草

和漢三才圖會

松露

松露草俗云

濕地茸

和漢三才圖會 原野 濕地ふ生を故ふ濕地

小淡く甘し香あり

茸と名く狀松茸小似て小くすむりふ過る織の内皮

白色柔く脆く破れ易し九月盛ふ出づ又織の外黄

色の者あり並ふ食ふて木朝食鑑標才茸標才茸

茅社多く生むる地の名下野國黒髮山の下の標才茸原

あり此則其處あり此茸草才 和漢三才圖會

卑濕の地より生む故ふ名づく 猪草 草茸小似黒

く織脂潤い其裏ふ穴 夜止柄さ中

あり蜂の巢の如し毒あり 更毎言と喚

ことと代るることといふ代と田 四十雀 和漢三才

ことと春の部苗代の条に注あり 四十雀 和漢三才

雀ふ似て大也頭黒く兩頬白くして白き田紋黒き圈頬

小至し胸背灰青翅尾黒黒あり灰白の堅條あり腹

白色ふして胸より尾小至て黒雲の紋あり其声清滑し

て多く轉る四十雀といふが如し故ふこととや其老

るかれ毛と換色や異りて形も又大 麿鳩 種鴉

俗呼て五十雀といふ鳩の腹の雲紋幽微 狀如

秋 志

鷄ニ似て鷓ノの如し胸の前ノ白キ闊クありて真珠ノことし
 背毛ハ紫赤ノ浪ノ文ありつ時珍曰鷓鴣飛こと必南
 飛ニ必南ノ向ク東西ハ回翔スことハ翅ト開クの始メ
 必先ト南ニ飛ビ其志忘ル南ニ懐ク北ハ祖ト性霜露ト
 畏ル早晩出ス稀ニ夜栖木ノ巢ニ以テ身ヲ蔽フ
 多ク對シ啼ク今俗其鳴ヲ謂フ行ハ不得奇其性
 潔キと好シ和漢三才圖會字彙云鷓鴣其性教育不隨
 正月ノ如キ一夕飛テ止シ蓋未知然る也近年亦
 中華ヨリ來ル最モ珍シ狀若雞ノ雌ハ似テ
 頭ハ鷓ノ如シ深淵草中此鳥寒ク鳥ハ似テ秋ノ
 末ヤ紅赤ノ散ル背中負ム雪霜ノ寒キ也
 故ハ青ク鳥ノ和漢三才圖會今鷓鴣青鷓鴣物
 上毛ノ紅ク鴨ハ山林ハ在テ
 原野ハ出ス形雀似テ黃赤色
 翅ハ黒キ縦ノ斑アリ脚掌黒シ新酒
 白米一斗用テ釀シ酒加利酒と稱小瓶一舟小
 入其酒ノ水半滴復布囊入テ飲ス酒ハめラ

九月四の宮祭

満足出ツ酒滴了ク後汁取澤と云これハ新酒と云
 ○新走中汲除醱醱袋洗各其頭字ノ部ハわキと云注
 比叡國常氣比仲哀小禪師火々山按ズ當社日吉ノ
 神殿故ハ四座と以テ地小丘也里民云此ノ神鎮座ノ日
 官幣使四位某ノ卿故ハ四座と以テ四位ノ宮と号スと云誤ニ
 四神鎮坐ノゆゑハ四位と号スル社説云祭ル神坐座大比
 枝小比枝氣比小禪師益土ノ老翁小禪師と本社子故小
 四ノ宮ノ例祭九月十日大津浦中ノ太祭神輿三五分
 山十一壘物造花水と下鳥羽祭十日山城國宇治
 出ス夜ハ入テ相撲有リ郡下鳥羽小
 あり祭神輿天皇と号スル例祭九月十日下鳥羽
 及ヒ横路ノ土人本居神と神輿一基あり名勝心云
 神社法傳寺ノ號ニ白川祭十三日名勝心云
 町ハり木林ノ中也天神ノ祭也
 て洛北白川ノ里南山ノ上ハあり揚社山王春日ハ祭也
 神輿一基餘五本あり社説云祭ル神天滿宮小多名

の尊指社の前小同じ、天満鎮座の延喜八年三月十三日、
 旅所の本社鳥居の前二町、西ふの例祭九月十二日
 土人産沙つちのうぶ 十三夜みそよひ 後の月、二夜の月、高瀬五十三夜の
 神かみと云々、
 豆名月、栗名月、月見、我朝の風、
 らうと近世のいせ儒者小天邊將滿、輪月又光彩遍空
 輪將滿といふ詩又明の十二家詩小鄭少谷何大復、
 十三夜の月と翫ぶといふ詩と引て異朝も十三夜の月
 と賞もといふれ、附會の説、信ふ云今彼集十一家詩と云
 る小是八月十三夜、つて九月十三夜、あもも其他、つも九月十
 三夜の月と賞も、詩又う、まも、一、章あり、も、これ、
 其人臨時、の奥ありて、天下の名月と、まも、事、我朝の、これ
 旧風、右中記七十五代崇徳院保延元年九月十三夜、今宵
 雲清く月明らる、夏む、寛平法皇明月魚奴のよ、
 仰出、依て我朝九月十三夜と以明月の夜と、常盤日記
 生熊、万里小路部光卿の御説と引て云、十三夜の月と賞
 せ、正、さ、起、天曆七年九月十三夜始て月の宴を行
 ひ、か、い、遺例、ふり来、但此宴、本八月十九夜の
 御遊、と、行、其由、八月十九夜、先帝、

の御国忌小當り、の、候、の、後、此九月、其遊、行、
 と、あ、此月、と、十五日、猶、其、日、次、も、
 十三夜小定て此月の宴を開き行、忠道公十
 三夜翫月詩云、閑窓寂々月相臨、從爲窮秋望、已禁潘
 室、昔、跋凌雲、訪、蔣家、旧、徑、踏、霜、尋、十三夜、影、勝、於、古、數
 百年、光、不、若、今、馮、前、軒、回首、見、清、明、此、夕、價、千金、唐、小
 富士、あ、の、月、も、見、よ、素、堂、○、後、の、月、と、十三夜、小、對
 して、○、二夜、の、月、十五夜、の、月、と、二夜、の、月、と、賞、ま、
 栗名月、豆名月、浪華の俗、十五夜と芋名月、
 と、い、十三夜を栗名月、豆名月、と、い、
 女、神明

祭

十日より 江戸芝増上寺大門の傍あり、神領十五石
 廿日まを 別當金剛院神主西東氏當社旧地、増上寺の

山際

あり、故、小、飯、倉、明、神、と、号、を、祭、礼、九、月、十、日、より、廿、一、日、迄、て

神幸

あり、此、節、時、と、て、秋、雨、多、し、を、以、て、世、俗、神、明、の、め、こ、れ

祭、と、ら、祭、礼、の、間、社、内、小、於、て、生、姜、と、商、ふ、
 本朝醫方傳小云、薑ハ穢土と去神明小通、土俗、か、の、
 事、と、誤、り、傳、つ、く、生、姜、と、賣、り、外、檜、割、筆、小、藤

の花、と、馬、き、内、小、船、と、盛、り、て、これ、と、風、木、箱、と、稱、す、但、し

風木の餘りあて作れりといふ謂ありし、城南寺祭
赤詣の人必生妻と此ちき箱と買て歸ふ。

廿日 **神社啓蒙** 城南の社ハ山城國鳥羽の里よりあり祭月
の神、坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社

伊勢、石清水、松尾、稻荷、賀茂上下、平野、春日以上城南神
と号を、例祭九月廿日神輿二基あり、この地人皇七十四代鳥

羽上皇の離宮ありて王城の南、鹿ヶ谷祭 廿日 **紀事**
浄村

十禪師祭云、洛東銀閣寺の門前北の方小十禪師の
社あり、同所小八所明神の社あり、神号詳ありと主人彦沙

神とを、祭礼九月二十四日 **雍州府志** 鹿ヶ谷
天皇家祭云、今祭祀撤ありて記をよ及をよ

黃狸々ハ万重大人、乱狸々ハ本紅あて能、**女花** 菊の
尖り大人、小狸々ハ狸々の如くあて小人、**異名**

女節、女莖の異名あり、**兼和の色** 菊の異名、**藻塩**
是よりてりふや、**草** 唐あて菊と

ゆてをゆるとい、陶洲明ふりあり、我朝あて、**兼和帝**
仁和、始てりて遊ひぬ、故に兼和の色と申よ、此

ろりのま、菊の品も分とをも、只黄ありと用ひらけ、黄
菊とて兼和色とも、**蕪我菊**とも申とるや、云、藻塩草の

説くくの如くとも、類聚國史小桓武帝の菊の御と載
らんとれ、兼和帝あり、菊とは、あて愛しめひりあわ、

只此帝あてて菊とを遊ひぬ、**志ら菊** **和訓栞**
く、後の哥山多くあて菊とあり、**菊**、大要

黄を貴ぶ、詩人の賞ま、**栞** 葉用ふ入もま、同じ、とる小哥
小多くあて、新羅菊の義とつり、花史在編、菊品

新羅一名倭菊、**芍薬の根分** 芍薬其花肥大
葉純白とてえり、ありんと欲を、**畫**

壞とて、毎年九、**柴栗** 栲栗の、**熟柿** 鴨小秋の
月根と取削り去る、**熟柿** 鴨小秋の

熟柿哉、**推の實**、**推柴**、**推の葉**、**大和本草**、**推**、**閩**
支考、書ふことと載て

本草、**雁山文集**、余幼年より推、木の名、子、果
あて、太平御覽不在と聞く、後、小文老、蓋明説、後、項、

書、南山志と見る、小推、科子、其末尖、て、**錐**、似、り、
故、推、といふ、宋志、小推、小作、る、木、に、従、ふ、**下**、**畧**、**和漢三才**

齒會 榧子 鐵櫛 其葉櫛小似て鋸齒細く小強く冬もま
葉落む其葉長く尖て筆頭小似て紫褐色仁白く両片
とふる云く九榧釣栗榧子の棟相似り小椀の如し俗呼
て供器といふ○季吟云堀川百首小推柴と冬の題小出
せり其故や冬とまると一説わめて実つきき推
ハ秋季と持し小推柴も葉も実も秋といふ 松子

新松子

海松 天和本草 海松五葉あり若水日信州
戸隠山あり然るに日本小本よりあり

から松訓むるハ非あらず松より大之子ハ果より食
ふハ日本の産ハ朝鮮より来るふおとと 倭名抄 松子
漢語抄云五葉松 ○青栂と 貞享式 此式
子和各万豆乃美 大坂の里語小新松子といふ 例の賞翫
奈何とあれハ蒔ハ冬ふして食ふ 新米 米 食療
ハ秋ある前後の働と賞してと 千首 かりのと
稗米新熟の者ハ氣と動し 霜踏鹿 本單

年と經る者ハ亦病を登と 霜置て岡への道ハ
霜置て岡への道ハ 名 七の部小 七月 楸
とていふ声 稱名院

の葉と載く

夢華録唐の時立秋の日本師楸の葉
を賣ふ婦女兒童剪て花の様ふり

と載く 一葉

桐一葉 淮南子 一葉落而天下知秋○
葉ハ桐とも柳ともいふ句体あり

一葉の舟

一葉の水小浮びると舟ハ 冷 柳令初
一葉の舟詩多し 秋の事

彦星

志の部二星 火取香 棚機小手向
の条小出づ 江次第

西北机居香爐一口納殿の百和香四兩盛之 菟麻子

唐胡麻くと 秋 時珍曰楸葉大かて早く脱つ故これ
の部小注す 楸と楸といふ楸葉ハ小かて早く秀故

小これと楸らふ 花景 楠 品字義 ヒサキ、キサケ、カフ
テコブラ、ライテンキリ、人家往々ここと載 高さ二丈白

鐵樹に類して皮赤龍の鱗の如し葉ハ好木小類
大或ハ尖マ或ハ三尖夏筒子の花をいらく小かて白色

紫点あり凋て莢と結ぶ數十箇 蛸 天和本草 時珍
とありて枝の間小垂る長さ尺餘 曰小かて色青

秋 い

緑ある者、尔雅註云小青蟬也、此世中山中少あり、晚ふく
故ふ名く、常の蟬より小なり、青赤之音、聒々、其聞ふ堪
く、寒き
兼三秋物引板 拾穂抄板小本と添
て細とつけしりや

し、鹿と驚 い、や、や、き **一本芒** 天和本草 一葉よ **八月菱**
この物あり、
多く叢生を、

取 時珍曰菱實一名菱或ハ沙角との角稜峭
これと菱といふ俗呼と凌角といふ中
自湖中

ふ生を、葉実とも小く、其角硬く、人と刺、其色嫩く、
者青く、老る者黒し、嫩く、時刺食ふ甘美、老る時ハ莖
して食ふ、**天和本草** **稔** 時珍曰稔苗莖赤の如し八九
月莖と抽んつ三稜あり細花と

八月九月これと採、
ひらく、簇りて **瓢箪** ひんがし **百生** 千生 **和漢三才圖**
栗の穂の如し、
青瓢箪 会苦瓠 俗

ニ云瓢箪草、壺盧と一類あり、と別種ある者明けし、葉花小
かりて、壺盧に似て、瓢の味食ふ不堪、以て四本ある者多く
炭斗小作る、長して細腰あり、以て酒樽小作る、一長五六
寸の者あり、俗百生と称ふ、二三寸の者あり、千生と称ふ、細

腰本末相均、と者俗呼、
て、開夜、といふ、珍なり、
平藟 和漢三才圖 而全平藟
林の濕地子生、苦種

の樹多く、と出せ、十月盛ふ、其形松茸に似て、瘦傘
薄く、蓋し、故ふ名く、大さ三四寸亦至て大なる者あり、灰白
色、裏白く、縞き、刻あり、性柔く、不脱く、其柄多し、
正中あり、と畧偏て生と、大小叢生と味淡く、
和漢三才圖會 菱喰状ち雁小類とて大あり、背頸俱、
灰色、翮深黒、其尾本白く、末黒し、腹白く、脚黄、背黒く、
して鼻の辺、黄の條あり、其肉の味雁に劣らざる、
脂も多し、臭香、鶴の肉に似たり、とあり、
和漢三才圖會 俗云比鳥土里、状ち鴨、鵝に似て、尾長く、蒼灰色
頭上の毛乱れ、起眼の辺、微赤色を帯、胸臆、灰、背腹
の下、灰白く、俱ふ黒き、斑あり、背利く、脚脛短く、掌ま、蒼
黒く、常小群とあり、飛啼好て、草木の實と食ふ、或ハ云
山茶花 ひんがし **鵝** 古抄秋、貞享式、ふ、ひ、
冬の部、ふ、つ、注、を、
和漢三才
而全俗

云比雁、状四十雀、に似て、小く、頸背赤色、頰の辺、
了白黒、相交ふ、腹白く、翅尾黒く、其根澤あり、
鵝

秋、ひ

河原鷄 **和漢三才圖會** 俗云比和止里雀より小く全体黄

色より青と帯ふ頭背頸翅は黒を交へ尾黒し腹黄白

背灰白く脚黒し其も滑溜よく鳴る又河原鷄状鷄

小似て稍大く頭背灰白く眼の後微黒く背小黒斑

あり羽蒼黒みして黄と交へ大和のけ **和漢三才圖**

本草 **唐鷄** 紅鷄 鷄 赤より伏略 **鱧** 鱧 鱧 鱧

三合和し言ひく後石といふと鱧と成り同く茄子

生薑穂菱番椒赤漬るも又佳く鱧 **九月賜氷**

の字未詳 **本朝食鑑** 鱧 鱧 鱧 鱧

と九日 **公事根源** 十月の旬のことふわらふ今日を

魚 氷奥と給ふ例あり **年中行事** 菊のみち折

給ふことありはるき内容 **百菊** 草小云和朝ふゆい

て菊と愛まると中ふ殊ふ百菊とて百種の名あるゆれ

りし傳へり足利將軍義輝公御園小植らる御龍愛

あり義景藤孝兩人小贈られし百種 **鴨上戸** 赤名

の菊あり百菊はく種ふらる云

かの部 **出づ** **錐栗** 栗の田よりて尖らるる錐栗と云

の **樹** **和漢三才圖會** 其木の葉女貞小似て厚く狭く

ふ大さ豆の如し自ら裂る中子細小く黒色別小其葉

の面小子の如くあるもの脹出で中より小き蟲あり化し出づ

穀小孔あり塵埃と吹去り空虚と云大なる者ハ桃李と如

し其文理椗椰子の如し人用ひて胡椒胡椒木の林と收り

瓠瓢小代ふ故小俗瓢の木と云或ハ小兒戲ふ吹て笛と云

駿州小多くことあり祭礼小この笛と吹て神輿供養を

楹藤 時珍曰其子楹の形小象る故小名く紫黒色

去り葉瓢小作てて腰小垂 **廣川記** **糴** 字彙 糴 再

藤小似て樹小つゝ通草のごとく **糴** 糴 糴 糴

古今 川まの田ふたつゝのつちのわふ出ぬ

世と今さらふあきことと云と云 **も** **七月**

百子 姫 **棚機七姫の内** 百子 **百子の池** 七子花

の池より名くといふ

秋 **ひも**

紅葉の橋

古今 天の川かむらとほし
あせむら、あせむら、あせむら、あせむら

真淵翁云々とぞとせむら秋と待
まらるといふのこ紅葉の橋は秋に
初秋にて紅葉せぬ比やうららで
のこ中畧此紅葉と橋とをらとら
今よりむらあやまりくわが多し○青藍云此古今集の
あり天の川原ふみちの橋はも趣小古くよりより
又棚機のはらまんとするとき紅涙とせむらと
のみちのさうとら説は後小設けらあせむら、紅葉
の帳

藻塩草

紅葉の戸むらと錦の戸帳と七夕ふら
よせむら、天木、かきごの河風、ちぬたれ

天木

後九条内倉 **文珠會** 八日 **公事根源** 是八東
寺西寺少て行つる

文珠會

仁明天皇天長十年七月八日大法師恭善よりあて文珠會
と修む大政官府其略曰文珠會は畿内郡邑廣く此會
と設け麻食水とあして貧者小施しめは是又文珠涅槃

經の文小依るこ云若衆生めて文珠師利の名と聞ん
まさる者ハ生々の處恒小諸公の家ハ生まん云

小十二億劫生死の罪と除却せん若礼拜供養

秘藏抄 不出 **桃の子**

時珍曰桃の性早花植安
して子繁し故字本兆

從ふ十憶と兆といふ
其多きをのちうら

兼三秋物望月

説文 望
八月の満

相望む君ハ朝まらら如し月ハ
从い臣ハ从い壬ハ朝とらあり

紅葉鳥

鹿の
異名

鳥ハ朝まらら衣きこ名あくらん **桃吹**
この部木綿
の糸ハ出し

藻小住虫音小鳴

本草約言 蔓葉其中小螺蛸
天和本草約言ふく處古

奇小こあるむらうらあせむら藻小付て殼の一片あ螺蛸
分敷の意 **古今衆雅抄** 蟹の川藻小付て此こ我うら
と身とほらむらふよりて名づらん **古今** 蟹のさる藻小

朝臣の御傘 **鴟**
和漢三才圖會 鴟鳥 兼名又鵲字
と用ふ日本紀百舌鳥こ用未詳鴟形

小ハ雜をもり **鴟**
と用ふ日本紀百舌鳥こ用未詳鴟形

鳩小似しく頭背尾に至る黄褐色眼及び前顔の容小き
 鶏小似て眼の辺に黒く眼上の白き條羽引ず黒くく
 末曲る頰臆白く腹黄赤黒き横尾あり脚白く羽黒く脛
 掌黒く爪利くと毎小鳥と撃てこれ食其声高く
 喧し喜異と知らず

○秋小至とも鳴く 鳴の草葦 鳴の早鶯

抄 じつと男野之行て女も心ゆるかきふも
 一其家とて女也ぬる草もさるて日暮夜を
 のれ草葦のまよふゆらゆら里天のぼりて男遠
 なくさるるゆらゆら葉にてもぬる枝心ゆら
 ぶさるゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 ありてゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 こころ草もゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら見ず
 伝あり 袖中抄 鳴の草葦と鳴の草とるるあり

哥林良材 鳴の草葦、鳴の時鳥の音ふて有るが
 音手と取ててふらふらて其ふらふらふらふら
 物と草の葦とるるふらふらゆらゆら夏と眼の早

藜葦草 鳴早鶯のふらふらふらふらの草
 葦ふらふら中から時鳥とて軒の時鳥のふらふら
 らふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
 らふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
 草木のふ枝ふ刺貫き晒ふらふらふらふら鳴の早鶯とて
 人氣味き別荘とてふらふらふらふらふらふらふら

○諸説とて本説とて後の人取用とて
 哥とてふらふらふらふらの説とてふらふらふらふら

鳥浴 紀事 山林の間門ふ鳴の目と建の架張る 旬

本犀 社部桂の 九月 百夜草 葉に名す

お菊が庭の百夜草花とてふらふらふらふらふらふらふら
 の里ふ老菊あり彼庭一本の菊とてて世菊とてふらふら
 菊秋冬を盛て春夏ふらふら花も葉もふらふらふら
 て李とてふらふら開く七月一日より毎夜菊の下落る物あり
 くらと百夜草の毎月此花とてふらふらふらふらふら
 て世菊四季ふらふらふら仍百夜草とてふらふらふら

物と備ふ是ハ鬼子母神の子と云り食ふ故ハ佛戒めて食ふ
 食ハ別ふと誓ひて食ふ故ハ未世の仏才子ハ
 初して毎日淨飯七粒づゝを食へその飢渴と云くハ云
 ○一説小目蓮の母餓獄の中ハ墮ちてこの功德を云は
 諸の餓鬼とて食を得ずしむるハ施餓鬼通覽
 廣大施餓鬼の法淨き所と点定し地と掃ハ棚と作る長
 三尺ハ過ぐとも但挑樹柘榴の外用ふるとも云れ鬼神
 して食ふと食ふと云えむ或ハ海地の上大石の上或泉池
 江海流水中これ川小用ふ東ハ向うて施す尤時と時定め
 て食ふと行ハ大幡二本を食ふ咒語と書て云唵唵唵唵
 呼唵婆娑訶と云空裡閑經の咒又七如來の幡と云く
 別ハ焦百鬼王と用ふるハ施食のころハ面前鬼ハ始て故
 俱舍論頌鬼八月と日と云五百
 人間の二月と一日して壽五百歳
 攝待 門茶 仏祖純紀
 宗祇傳曰
 義井と城南の標社ハ鑿法華水と云ハ以て行者ハ飲しむ
 真すと云の上ハ作て施すハ湯茗と以す屋と結んで敷盤
 創て攝待と云ハ○往來の人
 洗車雨 洒淚雨
 門茶と施すハ門茶とも云

天中記七

月の六日の雨と洗車雨と云ハ七日の雨を洒淚雨と云ハ
 塩草車と洗車雨と云ハ七夕別と云ハ○この夕ハ雨ハ天
 の川水漲アと三星命と云ハ俗説この洒淚雨と云ハ誤ラレ也
 施火燒 大文字火 鳥居の火
 船形りの火 紀事 七月十六日今宵東山淨土寺の山上
 妙法の火 小薪を以て大文字と云ハ此字畫九葉の及ハ
 處ハわらむ傳へハ室町家繁昌の日遠望遊觀の為此ハ
 点せり故ハ一条通りと正面とも○一説小延徳元年七月十
 六日相國寺横川和尚始て此と作る是將軍義尚追憶
 のためハ九この月六日より薪を伐点火と云ハ小至るハ
 小預りハ数十家あり今日申の刻各伐乾と云ハの新
 と擔さハ山上ハ登るハ大文字一畫長さ百五十間余五尺むり
 と隔て薪木と積事ハ推るハ数四百八十余所各薪と積終り
 て後日の波ちまると待て同時ハ火と点せこの外北山松が寺ハ
 妙法の火と点し船岡山ハ船形りの火と点し愛宕山ハ
 鳥居形の火と点し洛外所々の山岳并ハ原野ハ諸人集りて
 枯麻の枝こ檜の枝破子こ公卿其の類を燒く
 善福寺童
 此と聖昊の送火と云ハ又施火と云ハ

相撲

十五日江戸麻布雑色町ふあり麻布山と号し開
山了海上人ハ親鸞上人の弟子也今日開

権現の社前少童相撲あり報恩の事あり
仙

公羽花

花の形刻と有て小刀或ハ鉄と以てきりたる
仙

俗ふせんといふ秋深紅の花といはく種類数品
眼皮ハ類異種

カニヒフシクハ三四月五六月ハ咲依て前春羅
拵て此花和種ハ昔嵯峨清凉寺の北小寺にハ仙翁寺

つ其寺絶跡小珍花生む時人仙翁花
兼二秋物

兼二秋物

千秋樂

盤涉調の曲也 体源抄 千秋樂 柏子ハ又
王子降誕七夜ふさふと奏を盤涉調ハ秋の

野小秋女郎花凡吹く如く吹きこハ俳書ハ千秋
樂と出く万歳樂秋風樂と出さく秋凡樂ハ漢の武帝

の時出来て秋声の辞ありと
八月 釋奠 献昨 続

秋季ハ一ハありき也

本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯秋奠服雷及ハ儀

と改定む二月不同ハ春の世の部ハ公事振源あ
る日秋奠の昨とありて藏人持て朝餉の前ハむ藏

人奉てあんちつらこの奉と昨日の秋奠の昨曾と文字
とふくついで高く筆持て簾の中ハ入事ハ此支ハ二月ふ

わんきや昨と献もハ八月ハ限らず承ふ猶有職の人
事ハ昨といひりありき也 鶴鴒 千

振 胡黄連と 千生 九月 泉涌

寺 舍利會 八日 浴の泉涌寺舍利殿ハおいて毎年九

海末の白蓮寺ハ 仙蓼 珊瑚 梅檀の

實 時珍曰其子金鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴
と名く杉ふ衆る也ハ梅檀ハ棟ハ夏のあの部

七月 硯洗 水灯會

十六日城洲宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふたり入當專
 八華人黄蘗隱元禪師明誓中の建立之（紀事）會
 宇治川の舟中やうきと修之水中施食の法事其
 式船一艘を舟の刻むり小國屋の前へ出先流ふ
 舟に宇治橋の下へ至る暮ふ及て船中數个の燈臺
 とあり僧徒を舟座と列ね七如来の牌と安し供物と
 備（經卷と誦し音聲とをもちて流ふ隨ひ下りて
 後三百六十个の燈と宇治川へ流ふとて水は濁ひ
 散亂せむ恰も螢火の如しその灯白紙と以小蓮花と
 造り内ふ艾心と堅くする熟艾の燭硝と以て煮る火と
 その末小点をたき或は流ふとて伏見豊後橋の
 下へ至るわのり僧徒亥の刻より小國屋の前へ端
 る其間遊覧の船數千一月令廣義南國の凡俗中
 元の夜家々各羹飯と具へ齋供と門前小羅或は桐櫛
 の所傷亡の野鬼と祝祀し畢ると水燈三千六百とてけ
 流水へむらひて浮び名づけて度孤と云ふ燈は紙燈あり
 相撲（すまひ） 部頭使（べうとうし） 漢書注（わんしよちゆ） 兩々相當（りうりやうたう） として力と技藝射
 騎小艇戲（せうせう） とて故小角紙（せうかくし） と云ふ事原

史記秦の二世甘泉宮小在て樂を角力戲俳優戲と云
 漢の武帝この戲を好び即今（すまひ）の相撲之垂仁紀大和國當
 麻（ま） 阪速と出雲國野見宿禰と力を撲（つ）し阪速野見小
 勝とあつてもその腰と踏折（つ）してて死せり野見管家
 の祖（す）扶桑畧記柏原天皇の時より代々天子皆悉相
 撲と好む貞觀以後寂然（じやくぜん）として無事今聖王これと捨
 せり又集（しゆ）しつらむや○先二三月のころ大將以下陳（ちん）の座
 小於て相撲使（すまひし）の事と定む諸國七道不遣（ふてん）して相撲人と
 召（よ）むること部領使（べうりやうし）といふ事根源相撲（すまひ） 江次（えじ）才（さい）に身殿
 あり裏谷（うらや）ふ云南殿出御のとき、是、諸國の供御人（くごにん） 供御（くご）八相
 仁壽殿（にじうでん）於て百合の技出ホあり 是、諸國の供御人（くごにん） 供御（くご）八相
 まる人則諸國の供御人をめりあつめて七月小相撲の節とつひて天子
 の御覽（ごらん）むることあり先十六日の間小召仰あり上御勅（じやく）と
 奉（た）りて左右の次將小相撲ありきよりと仰らる左右の
 近衛方（ちかゑがた）に分て國々へ使（し）こ下して相撲と召（よ）むこと凡（た）く果
 小こしとて使（し）とつくり廿六日小内取（うちと）といふてあり仁壽殿（にじうでん）
 才事（さいじ）廿六日の月廿六日小の月廿六日仁壽殿小於てこれを行ふ
 御物（ごぶつ）心のこき清涼殿（せいりやうでん）おつてこれあり近手御物（ちかてごぶつ）と申しこの
 義（ぎ）のこき内取（うちと）といふちからいふ出御（しゆご）あり左右の角力人（かくりきひん）
 故（ゆ）小左と右と右相撲あり出御（しゆご）あり左右の角力人（かくりきひん）
 又て角力十五番あり故障（かざり）續鼻（つづな）の上小狩衣袴（かむらひ）をききく
 あるとき仰不随（おほ）て進（しん）止（し）も續鼻の上小狩衣袴（かむらひ）をききく

延元三年江記云角力人三十人決才行列この勢東鳥帽子狩衣
積鼻輝之差細狩衣の上小帯を着下衣袴を着着まは徳詠答三人
ふりまきふまき取りて勝負あり廿八日大の月廿八日 召合

あつし 裏谷云召合技出ハ左右相撲相合江次云勝方乱声
時と決ま左勝負右勝負のとき右先納曾利揚共奏と性年取事
變三と奏と入せんけいあるやまきま他の舞と奏す、天白皇

簡殿の出御王御参上と大将相撲の奏と執ふ十七番取
勝方乱声あり又廿九日技手として角力とてこの御覽せ
らるる神亀三年ふ始りて諸國より召上せらるる寛平七

年小童相撲と御覽ありまて角力の起りと甲ふ日本紀
垂仁天皇七年七月當麻邑小勇士あり云〇助手最手加

手まごこれ相撲ふり所〇助手是と股手といふ江次第り
らるる今関腹中らるるまららるる名に設け 意坂仁

和漢三才而合苗黍類し兼の間小枝とてまらるる穂と出
し實と結ぶ其梢の端ふ小白花と開く九草木の花花落

て實と結ぶ此花と実と別〇形田く末尖り端ふ白絲三條と
出ま暑乾くときハ絲脱去て孔とあり上下通ぞ小兒絲を

貫きて念 西瓜 和漢三才而合慶安中黄蘗隱元入
朝の時西瓜扁豆柿の種と推かへ来り

始て長崎小種本朝食鑑水瓜ハ西瓜之俗小瓜中水多
故小名く大和本草三月種と下し蔓延て地ふ布四月月

黄の花を開く 鈴虫 和漢三才而合金鐘蟲月鈴兒
俗云鈴虫此亦蟋蟀の類良果

松出小似て首小く尻大く背窄く腹小黄白色なり夜鳴
声鈴と振か如し里里林里里林とらふか〇此鈴虫の

舟まの部松出 すげの庭鳥 異名分類ふらふら
の糸小のこ

兼三秋物 尔雅薄草 兼三秋物ハ
の取て生

と薄らふ又芒といふ杜栄〇時珍曰芒兼皆草のこく
うて大く長き四五尺甚快利ゆて人と傷ふと鎌又の

如し七月長き莖と抽んで穂と多し蘆葦の花の如し
者〇〇縷芒 篠芒 蘆芒 穂芒 兼三秋物 兼三秋物
麻草穂の芒 真蘇草の芒 穂芒 花芒 相撲草 和

尾花 鬼芒 等 各頭字の部ふらふら 漢
三才而合 野原湿地小あり葉地は布て最生を 忍凌ふ似く
微痛く石草小似て浅く秋莖と起て嶺小穂とあり十月白

秋

色細子あるはまどものもよく其莖偏く強健長く六七寸
小児莖を取て穂と縮結し織の如くし二筒を用ひハ其禰
めふまゝにさみ兩人莖と持て 透檄材 加羅材などの
相引く切るとる方輪とす

すのぶる

そぶると鹿といふに誤し先代の諸師もそぶ
ちかひて秋の部よ出さふよりてそぶ積して
其ことありと注し「古今」もそぶは秋の萩原朝ちて旅
ゆく人との ころまゝに 真洲翁云そぶるは日本紀ハ螺蕨
と書てそぶるとあり一ハ似我蜂と云此蜂ハ米の
木の虫とにい来て已に巢めて七日元はぬと云い如き蜂
とあるとありそて其子ハ一度巢とてちて又歸来らぬ
と云其如く今別ゆきて又いつともあらぬ人そぶに歸ると
いつともあらぬと云い此のそぶるは中 此の何ともあら
ぬはハ萩原といふはそぶとてそぶるハ鹿の事と云いそぶ
説ともいふに 俳諧の書ハ後の説とも
そぶるはそぶる物と云いそぶる誤人多し

八月胡

芋の莖といふ大和本草唐の芋の 鹽鈎 鈎 鈎
芋ハ煮て食し生じて酢とて食す

天和本草 魴魚大なる者三尺三月以後七月まで 肥ハ暑

月脂多くして味より八月より色も夏秋さうと 鯨

鮮とあり夏月腸の味よりクモワタといふ腸あり 脂多

味より小あらとセイゴといふ松江あるハ中華松江の魴

ハ其大サ日本のセイゴの如くと云河魴味尤より暑月の

佳品ハ海と河との間ふあるもの味より漁人これと釣或ハ

戈少と突てそぶ 猿蓑 鱈

九月 任吉相撲会

拾芥抄 九月十三日任吉相撲会 社家説 神

升市 興玉出嶋頓宮へ渡御傳々供あり津守の

神主勅使代として宣命と讀畢をそ相撲十三番童相

撲三番あり續鼻禪の上ふ注連と纏ひて手合あり是

今日の神更ハ一説ふありハ神前へ黄金の升と作つて

新穀の稻と奉りたるを以て農家用する処の升と

此処ハ持来として賣りたるを以て種々の市人群集する

故室の市といふ也只當社の新嘗会と心得へし今神興

と別殿へ迂り奉りて五穀新嘗の神膳を奉り相撲

会の事中頃より沙汰あり室の市升市是ハ一〇升買て

秋 す 追はほり

分別くさる月 晦日 九月晦日 揚州住
見くぬ 芭蕉 住吉の神送 吉の神興王出嶋

の仮殿一渡御即後と修まると住吉の御菅の後と
祝祠あり又北奈と称と出雲石とつ所と称宜出雲
と通ふ拜むとんと神送とつ今日四天王寺石の鳥居の
邊つらまると神送つあり大坂所々の神社も又神送りの

神夏 爵入大水為蛤 月令此記戌月之候爵為
蛤飛物化為潛物九月節

あり 醉楊妃 百菊の内大入薄 芒散 其花老る
時祭の如く

ありて風ふまるとかひて
散乱まるとて鴛毛の如く

追加は 八月 八朔梅 冬のふの部冬の
梅の条の注と

ほ 七月 星草 大和本草 穀精草 沢中水田
の中小叢生と葉の中より

一莖と抽んで其形其蘭小似て莖の末より白
花の四さむと〇俗太鼓のフチとりと

七月 琉球芋 大和本草 甘藷葉ハ番薯と藪
菜の葉小似たり根ハ瓜樓根に似

たり根の下小短き蔓あり根の餘のひけあり又鴛尾
卵小似て大きあり鴨の卵小似て小ちありあり大あり

ハ重と一斤あり長きあり口きとつと夏月蔓長く生
む中畧此種元禄の末琉球より薩州小渡る煖土小

よりし寒地小 ぬ 八月 鷓 大和本草 和鬼ツ
品 常の

グとより三倍やと大ありほり多し山中小あり鷓の字
順の和名抄小唐讀と引けと中華の書小ハ怪鳥と

とい 九月 万年青 此詞増
山の井

小出ツ万年青のまへむと牡丹の脰松の脰とて立花小
用つるあり但し池の坊三ヶの傳受ありと委しと

ら し 八月 鳴の羽盛 鳴の羽あり千鳥
の羽ありとわ料

理小と事あり切と頭翅を以て全体のみと
作てその脊のとらうへ焼とる肉と盛ふとんと鳴

秋 追ぬを

の羽盛
とらふ



増補歳時記葉草秋之部終

